



北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第9号





目 次

➤ ご挨拶 在マカツサル日本国総領事・名誉会長	渡辺奉勝	1
北スラウエシ州住民への総領事メッセージ (Mando Post 掲載)		3
➤ ご挨拶 会長	前田良昭	6
➤ タルシウス続刊について	吉田全志	8
➤ 入会のご挨拶	石野 赫	9
➤ 入会、そして退会のご挨拶	羽根井義博	12
➤ 「アモールの思い出」	新田洋子	14
➤ 「ドリアン通信」マナド編	吹原 豊	16
➤ 回想、Sarah! 失敗談、etc. etc.	外岡 蔚	19
➤ インドネシア北辺の町マナド (スマランより)	河野親優	25
➤ ビトウンの日本人墓	長崎節夫	28
➤ インドネシア版吉四六ものがたり	吉田全志	32
➤ アルー島、密林の怪	吉田全志	34
➤ 怨霊に崇められた船のミステリー	吉田全志	40
➤ 北スラウエシ州ビトン草紙	青山秀夫	45
➤ ビツン在任中の事と新任地フィジーの事 (フィジーより)	太田隆久	47
➤ 日本語弁論大会 (マナド大会)	新田洋子	49
一位「ごくらくちょう」	ダンチェ・ナウイバ	51
二位「マナドの埋め立て」	ダイネ・トウラル	53
三位「ストレス」	マリアム・トリウオギ	55
➤ クバン港及びビトン港開発プロジェクト	石野 赫	60
➤ 素晴らしい日本人会誌「タルシウス」	石野 赫	67
➤ ビトン港に日本国練習艦隊現る		77
➤ 堀内豊秋大佐関連特別資料 (資料提供者: 河野親優氏)		82
秋月達郎著「伝説の人になった落下傘部隊長」(歴史街道より)		
日本経済新聞切り抜き (同大佐関連記事)		
➤ Bahasa Manado/Sangihe/Taluad/Indonesia 語豆辞典		
(スラバヤより) 玉置忠嗣		88
➤ ミナハサ民謡 「O Ina Ni Keke」		98
➤ お知らせ		99
北スラウエシ日本人会緊急連絡網		
在マカサル日本総領事館からのお知らせ、その他安全対策		
厚生労働省刊「インドネシア (病気対策)」		
大統領選挙法が成立 (リジャカラン新聞より)		
➤ 編集後記		118

ご挨拶

在マカッサル日本総領事
北スラウェシ日本人会
名誉会長 渡辺奉勝

今年1月に在マカッサル総領事として着任しました渡辺奉勝でございます。北スラウェシ州には、6月の同州公式訪問と、7月の海上自衛隊の練習艦隊ビトン寄港時の2回すでに訪問して、日本人会の方々にもお目にかかっておりますが、この機会にあらためて着任のご挨拶を申し述べたいと思います。

北スラウェシのマナド、ビトンのあるミナハサ半島と日本とは、歴史的にも深い関係にあり、特別な親近感を抱く間柄となっています。そもそも船舶しか交通手段のなかった半世紀前、ミナハサ半島の港は、蘭印の東の表玄関であり、日本とは、距離的に一番近い土地でありました。昭和11年9月時点で、ミナハサ半島に在住していた邦人数は、320名、そのうち、ビトンに140名、マナドに71名いたとの記録があります。日本の領事館が開設されたのも早く、在マナド帝国領事館は、昭和12年12月に開設されております。(在マカッサル帝国領事館が開設されたのはその4年後の昭和16年2月でした。)

ミナハサ地域は、風光明媚で、豊かな自然と穏やかな人情の感じられるところで、日本の原風景のふるさとを思い出させるものがあります。日本人が感じる親近感、我々の祖先のどこかで血のつながりがあるのではないかとふと感じさせるほどのものがあります。また、町の雰囲気、開放的で、どこか包容力のある明るい印象を与える土地柄でもあります。サービス産業の開発のテンポも速く、自然環境との調和といった21世紀の人類の課題にも直面しているようにも思えます。

このたび、関係者のご努力により、3年ぶりに日本人会会報「タルシウス」が発行される運びとなり、誠に喜ばしい次第です。過去の会報誌を集め、一通り読ませて頂きましたが、その内容は、読み物としても面白く実に充実しており、また、よく調べられた豊富な情報が満載しており、資料的価値の点でも高く評価できるとの印象をもちました。そのような伝統ある「タルシウス」が、満を持して再び編集されることとなり、関係者の熱意に大いに期待しているところです。

日本とミナハサの関係は、過去にいろいろありましたが、今また一つの曲がり角に差し掛かっているというようにも思えます。

その一つの例として、今年に入り、マナド、ビトンの日本人墓地の整備問題が浮上してきたことが挙げられます。この地には、水産関係者が明治の時代から大勢移り住んでおりました。また、先の大戦の関係でも、多くの方が当地でお亡くなりになっておられます。このような方の中には、望郷の念を感じながらも、この地に身をうずめる覚悟で働かれ、土地の発展に貢献された方々や、あるいは、心ならずも戦禍に巻き込まれ、この地が非業の最期となった方々もおられます。このような先人の努力と犠牲の上に、今日の我々日本人が存在します。それは、頭の中ではわかっていても、実際、そのような方々の霊を称え、偲ぶために日本人墓地や記念碑を整備しようという動きが沸いてくるのは、時と縁が必要でありました。

実際、我々の祖先の墓が荒れ放題になっているのを目の前にすれば、同じ日本人であれば、それを見過ごしていくわけにはいかない心情となります。やはり、由緒ある日本人社会にとっては避けては通れない課題であります。そして、今、ちょうどそのタイミングの節目にさしかかったような気がします。

日本人墓地維持問題は、どこの日本人会にとっても、自分達の座標軸を守るような大切な仕事で、この問題が、北スラウェシ日本人会で、真剣に取り上げられるようになったことは、一時代を画するもので、関係者のご尽力と使命感に敬意を払うとともに、日本総領事館としても側面的に、必要かつ可能な協力をしたいと存じます。

もう一つの例は、彼我の経済関係緊密化に伴い、昨今、大勢のミナハサ人が、日本に就労を目的として渡日するようになり、経済危機以来、特に合法、非合法での日本滞在・就労者が増大していることです。これは、場合によっては日本と北スラウェシのこれまでの良好な関係に影響及ぼしうる問題を内包しており、総領事館としてもその動向を注視している次第です。

このように、北スラウェシと日本との関係をめぐる変化に伴って、北スラウェシ日本人会の活動も新たな局面に入っていくものと思われます。新たな局面は、新たな発展の兆候でもあります。歴史と伝統のある北スラウェシ日本人会の今後の一層の発展を期待して止みません。

(完)

美しい花の町に訪問した日本総領事のメッセージ

2003年6月4日

在マカッサル総領事

渡邊 華樹

メナドの町は、色とりどりの美しい花がいっぱい咲いている花の町です。小官は、花をみたり育てたりするのが好きです。日本は、四季折々に花が咲き、人々の心に癒いをもたらす、日本人の情緒を豊かにしています。このメナドの町がこれほど美しい花がいっぱい咲いていると言うことは、メナドの人々が自然と環境を大切に、花の美しさを愛することのできる情緒豊かな人である証拠だとおもいます。

小官のマカッサルの公邸にも色とりどりのランや、名もしらない赤い花、黄色い花、白い花、バナナの花が一杯咲いており、それを大切に育てております。

ところで、皆様、

小官は、この公邸に咲く花をどんなに大切に育てても日本に持って帰ることはできません。自分の所有物にはできないのです。自分が花を大切にしているのは、その美しさを大切にしているのであって、その美しさは、人の心が受け止めるものでありますから、自分の所有物にしなくてもよいわけです。

しかし、よくよく考えてみれば、もともと価値あるものほど自分の持ち物にはできないということでもあります。いや、価値のあるものほど自分の持ち物にしなくてもよいのかもしれません。

自分にとって大切な子供のことを考えてみましょう。子供は親にとってなにより大切なのですが、親は、自分の子供といえどもその子を独占することはできません。子供は親の所有物ではないのです。親ができるのは「授かりもの」の子供が一人前になるまで大切に育てることだけです。

ところで、大切なものとしてこの世にはお金があります。人は、お金などを自分の持ち物にしたいという願望にかられ勝ちです。しかし、人間の過ちの多くは、この自分のものにしたいという強い欲望からきます。何でも自分のものにしてしまいたいという思いが過ちの根本にあります。

人間は、何も持たずに生まれてきて、何も持たずに死んでゆくのになぜものに固執するのか。よく考えてみる必要があります。

その花の美は、自分だけのためではなく、それを愛する人すべてのためです。そのような美こそ時代や民族や国境を越えた普遍的な価値であり、人の心に訴え、伝わるものである。美しいから花の心などわからないという反論は間違いであります。なぜなら、この地でも美しい田舎の地ほど美しい花が咲いているのを実際にこの目でみて確かめているからであり

ます。日本でも現代人よりもっと物質的に貧しかった昔ほど、もっと花には関心があったのは日本の文学の歴史をみればわかります。

このような考えは、日本人の間ならある程度通じます。日本人の心の奥には、人生をどのように理解する哲学があるからです。我々はそのような考え方を無の思想とか神の心とか説明します。

外国人から見ていると、現在の日本人は、お金やものだけに関心があるから、経済発展したのだと即断してしまう嫌いがあります。しかし、実のところは、外国人が、日本に行き、日本人とすこしの時間でも一緒にいればそのような解釈は間違いだとすぐ判ります。

日本人の心の深いところには、もっと精神的に価値の高いものを追い求めているのです。物質的な繁栄の中でも決して精神的な価値や、伝統や文化的な価値を失わずそれを大切に
する日本人の心を他の国の人にも理解して欲しいと思っていたのですが、この美しいメナ
ドの人ならそのような日本人の心はよくご理解いただけるのではないかと願います。

(了)



このメッセージは、去る2003年6月21日の "Manado Post" に掲載されました。ご参考までにその切抜きを次頁に添付致します。

Pesan Konsul Jenderal Jepang
di Makassar, Motokatsu Watanabe

Manado Bunga Indah

KOTA Manado adalah kota kembang di mana berbagai bunga warna-warni berkembang. Saya suka melihat dan memelihara bunga. Di Jepang, pada setiap musim berkembang bunga yang berbeda-beda, memberikan ketentraman bagi hati setiap manusia dan memupuk perasaan hati manusia Jepang. Kesan saya adanya demikian banyak bunga yang indah berkembang di kota Manado adalah bukti bahwa masyarakat Manado mementingkan alam dan lingkungan hidup, serta dengan penuh perasaan mencintai keindahan bunga.

Di kediaman saya di Makasar, juga banyak bunga aneka warna warni seperti anggrek, bunga warna merah, kuning dan putih yang saya tidak tahu namanya, serta bunga pisang. Saya memelihara semuanya dengan baik.

Walaupun saya memelihara bunga di kediaman saya dengan penuh perhatian, tapi saya tidak dapat membawa pulang bunga-bunga tersebut ke Jepang. Bunga-bunga itu tidak bisa saya jadikan milik pribadi. Saya memelihara bunga berarti saya memelihara keindahan bunga itu. Keindahan bunga itu akan

dirasakan oleh hati manusia sehingga bunga tidak perlu dijadikan milik pribadi.

Apabila dipikirkan lebih jauh, hal itu berarti sesuatu benda yang nilainya semakin tinggi tidak dapat dijadikan milik pribadi. Atau, semakin tinggi nilai benda, tidak perlu dijadikan milik pribadi.

Hal itu menjadi jelas apabila kita berpikir tentang anak.

Walaupun anak sangat penting bagi orang tua, orang tua tidak boleh memonopolinya. Anak bukanlah barang milik orang tua. Apa yang dapat dilakukan orang tua hanyalah memelihara anak dengan penuh kasih sayang sampai anak tersebut menjadi dewasa.

Uang adalah salah satu benda yang berharga di dunia ini. Manusia cenderung bernafsu untuk memiliki uang. Akan tetapi sebagian besar dari kesalahan yang dilakukan manusia disebabkan karena nafsu yang ingin memilikinya. Keinginan memonopoli apa saja menjadi dasar dari kesalahan ini.

Mengapa manusia bernafsu memiliki benda? Padahal, lahir tanpa memiliki apapun dan meninggal tanpa membawa apapun. Pertanyaan ini perlu dipikirkan baik-baik.

Keindahan bunga bukan hanya untuk dirinya sendiri, akan tetapi untuk semua orang yang mencintainya. Keindahan seperti itulah nilai universal yang tidak terikat dengan batas zaman, bangsa dan batas negara sehingga menggugah hati manusia. Argumen bahwa kemiskinan menyebabkan orang tidak menghargai bunga adalah salah. Saya sudah melihat sendiri bahwa justru di pedesaan yang tingkat kesejahteraannya lebih rendah, banyak berkembang bunga yang indah. Di Jepang pun, pada zaman dulu ketika secara material lebih miskin daripada dewasa ini, manusia menaruh perhatian lebih baik pada bunga. Hal ini dapat diketahui apabila melihat sejarah kesusatraan Jepang.

Pemikiran tersebut di atas dapat dipahami diantara sesama orang Jepang sampai tingkat tertentu. Hal ini disebabkan karena adanya filsafat yang memahami kehidupan seperti ini dalam lubuk hati orang Jepang. Kami menjelaskan Pemikiran seperti itu sebagai pemikiran "nihil" atau hati "zen".

Kadang kala orang asing menyangka bahwa Jepang berhasil berkembang secara ekonomi karena orang Jepang hanya menaruh perhatian pada uang dan benda saja. Sebenarnya, apabila orang asing pergi ke Jepang dan menghabiskan waktu bersama orang Jepang walaupun sebentar, ia akan tahu bahwa pengertian seperti itu adalah salah.

Orang Jepang, dalam lubuk hati yang paling dalam, menuntut suatu yang lebih tinggi nilainya secara spiritual. Tadinya saya hanya ingin mengajak agar dapat memahami hati bangsa Jepang, yang walaupun berada dalam kemakmuran material, tetap tidak melupakan nilai spiritual, tradisi, dan nilai budaya. Malahan menghargai semua itu. Saya yakin bahwa orang yang hidup di Manado yang indah dapat memahami hati bangsa Jepang seperti ini. ***

ご挨拶

北スラウェシ日本人会
会長 前田良昭

ご無沙汰致しております。小生、業務の関係で昨年中頃から日本国内並びに諸外国へ出かけることが多くなり、中々皆様とはお会いできる機会に恵まれておりませんが、その後もお変わりなきことと拝察致しております。

小生の留守中は、平野健副会長が代わって、何かと皆様の面倒をみさせてもらっているのではないのでしょうか。

さて、この「タルシウス」は今回で9号となりますが、創刊号発行は、1998年5月スハルト政権が崩壊し、ハビビ新政権が誕生して2ヵ月後の7月20日でした。振り返りますと、その前年7月から、アジアを中心とした金融危機（クリスモン）が始まり、インドネシアでは一番深刻なものとなりました。社会不安が募り、我々も落ち着かない日々を送っていたのです。その最中、当地在住者間での親睦促進と連絡網の整備を目的とした「北スラウェシ日本人会」が7月9日正式発足しました。

「タルシウス」は、その機関紙として産声を上げたのですが、川口博康さんと川井雄二さんという二人の熱心な編集者のご努力で、日本人会誌としてはあまり例のない密度の濃い機関紙に生育して行きました。しかし、残念なことにこのお二方が、2000年新年号（8号）発行後に新任地へ向かわれたため、遺憾ながら発行が中断してしまいました。

そうこうする内にビトン在住者の顔ぶれも少々代わりました。2002年の春でしたか、皆でゴルフしたあとビールを飲んで世間話をしている際、ここへきて仕事をしたからには、自分がここにいた記しになるようなものを残したいとの意見が出ました。そこで「タルシウス」を紹介しましたところ、中断させておくのは勿体ない再刊しようとのことになった次第です。途中、少々もたつきましたが、ようやく今回の9号に漕ぎ着けた次第です。

日本人会長として、会誌「タルシウス」が継続発行でき、非常に喜んでおります。会員のご協力があったればこそと感謝致しております。また、これにて発行に尽力されてこられた先任編集者へのお礼ができたとも思っております。

昨年10月、アジアの青年達を乗せた友好の船「日本丸」が正々堂々とピトンに入港して参りました時には、胸を張ってこれを迎えた記憶があります。聞くところによりますと、来る7月20日には、海上自衛隊の練習艦隊が寄港するとか。

これまでの「タルシウス」に掲載し紹介されてきました第二次世界大戦時の日本軍による占領記録やこの地を統治した賢佐、堀内豊秋中佐に関する記述が思い出され、感慨無量であります。

なお、在来の北スラウェシ州は、地方分権政策（オートノミ・ダエラ）の一環で、2001年2月16日をもって、北スラウェシとゴロンタロの2州に分割されました。従って、この会の名も新しい呼び名に変更すべきかとも存知ますが、これについてはいずれ皆様のご意見を伺うこととして、今回は歌の題名よろしく「古い名前」で出させてもらいました。悪しからずご了承下さい。

残念ながら、小生、この会誌の発刊が予定されている8月にはまだ、内地におりますが、この紙面を借りまして、皆様のご健勝とご発展をお祈り申しあげますと共に、皆様との再会の日を楽しみに致しております。

2003年7月吉日

日本丸



タルシウス続刊について

私達、シニアゴルフグループ、前田日本人会長、マグロ伍詰等の専門家、外岡さん、Bitung 港コンテナヤード建設のコンサルタント、石野さんとは、よくゴルフの後、レストラン Xanadu, Sunset、でよく一杯やりながら、世間話をしていますが、日本人会誌タルシウスの話しも良く出て、特に石野さんは興味を持たれていましたので、皆んなでお願いしたり、けしかけたりして結局、続刊をお願いする事になりました。

私が、一番けしかけたほうで、そのくせさっぱりお手伝いもせず、原稿ぐらいはと、軽く考えていましたが、やっぱり締め切りの4月末に間に合わず、延長をお願いしたり、石野さんには、本当にご苦勞をおかけする事になってしまい、申し訳無い事をしました。

その上、デング熱にかかり入院されたり、大変だったと思います、ゆっくり編集してくださいよろしくお願いします。ご苦勞様です。

PT SINAR ABADI CEMERLANG

吉田全志

e-mail : my24@indosat.net.id



2003年6月25日

入会のご挨拶

日本港湾コンサルタント (JPC) ビトン事務所
石野

JPC の石野 赫 (いしの・あきら) と申します。2001年9月13日にビトンに参りました。今年末ぐらいまで駐在すると思います。あと残すところ僅かですが、宜しくお願い申し上げます。

仕事は、目下日本の建設会社「リンカイ」さんが施工中の、ビトン港コンテナ一埠頭、コンテナ・ヤード並びにその関連施設工事の設計・施工監理であります。今、JPC の日本人駐在員は私も入れて2人です。クバン港の同様工事 (同じく日本人2人が常駐) とワン・パッケージになっておりますので、ジャカルタには所長の今村充孝が駐在し、両現場を統括しております。

建設屋は、工事がある場所に移動し、そこで仕事をし、それが終わるとまた次の現場へと移ってまいります。ここへ来る前は中部ジャワのスマランで同じようなコンテナ埠頭やヤード工事の施工監理をしておりました。かの地でもこのこと同様、駐在されておられる日本人の方々と幅広いお付き合いをさせて頂いた次第ですが、小生、いろいろな土地を移動してまいりました事から、遂には「ジブシー系石野」なる「号」を頂きました。本人は、自分の歩んできた道を思いますと、この呼び名を「なるほどよくぞお付け願った」と自分ながら満足している次第です。

その名付け親は、本誌に特別投稿されておられるスマラン在住の河野親優 (こうの・ちかまさ) 殿です。

さて、このジブシー。インドネシア共和国の西はアチェから、メダン、パダン、パレンバン、ジャカルタ、スマラン、ジョクジャ、ソロ、マラン、バリクパバン、で仕事をし、そして今はビトンで皆様のお世話になっている次第です。

しかし、ここはこの国でこれまで経験した他地方の雰囲気とはがらり違っており大変驚きました。実は、1999年10月に一度、土地感を掴んでおこうとの目的で、マナドに2泊し、あちこち見て歩きました。その時は、話に聞く通

り教会が多いな、乞食がいないな、ぶらぶらしている若者の姿が少ないな、それにしても椰子の木が多いな、程度の印象しか持たなかったのです。

ところが今般常駐して、こちらの人々といろいろ接するの及んで、国章ガルーダの足元に書かれた「Bineka Tunggal Ika」(多様性の中の統一)の国是を実感している次第です。

この地はキリスト教徒が75%とか。総人口の95%がイスラム教徒と言われるこの国の中にあって、この高率は驚きです。

これまで働いていた地方では、朝はいつもモスクのミナレットに取り付けられたスピーカーから流れるアザーンの声で目を覚まされていました。それが、ここでは教会の鐘です。朝5時前、斜め前にあるシオン教会の鐘の音と共に礼拝に向かう人の足音と楽しげに話しあう声が、耳に入って来ます。それに賛美歌の合唱も聞こえてきます。

日曜ともなれば、我々即ゴルフ場に向かうのすが、道中、盛装した善男善女や子供たちがにこにこしながら教会から出てくるのに出会います。これがまた、朝の太陽光線と相俟って、見ている側をも清々しい気分にしてくれます。

それに、ここではサロンを付けた人が見当たりません。スカートをはいた女性も少なく、殆どがパンタロンか短パン着用ですし、これがなかなか魅力的です。

復活祭の日、各教会が競って街に山車をくり出し、町じゅうで祝っているのを目撃しましたが、キリスト教徒を自認している一人として、ここで仕事ができる事を神に感謝する気持ちで一杯になりました。

また、海産物を主体にした料理が豊富にあるのも驚きです。それに刺身までも。これは、我々日本人にとっては非常にありがたいことで、初めてインドネシアを経験される日本の方でもここでは何ら食生活に違和感を抱くことはないだろうと思いました。

この土地に滞在して、インドネシアを違った目線で見れるようになったのは幸いです。

いずれにしても、このモンゴル系の顔や姿かたちと全般に骨太系で肉盛系なのが、我々に何となく安心感と親近感を与えてくれますし、これに関連して落ち着きを感じていますが、皆様、いかがでしょうか。

うちの運転手に一度、日本人の赤子には尻に「モンゴル斑点」があるが、オラン・ミナハサにもあるのか、と尋ねてみました。そしたら、直ぐ「アダ」との返事、「おお、お互い兄弟だな」と言って笑ったこともありました。

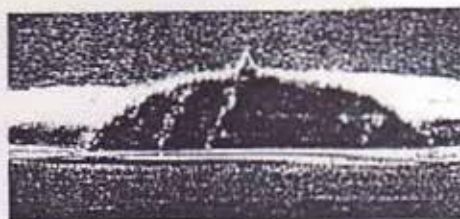
また、ここの人達は、体型に似合わず贅肉のないインドネシア語を話すのも魅力です。特にジャワ本島では、話し手はのんびりと回りくどい表現を使い、聞き手が疲れてしまう場合もあるのですが、ここは男女共々歯切れの良い話ぶりですし、単刀直入なのが気に入っています。

実は、ハルジョウイログ著「ジャワ人の思考様式」と言う本の一節でよく引用される言葉に「ジャワ人の答えに確実なものがあつた試しがない。確実性は決定後しばらくして初めて明らかになる。命令を実行していれば、それすなわち[はい]という答えであり、実行していなければ[いいえ]と答えたのだということになる。」とありますが、小生はこれを苦いほど体験をしているだけに、ここの人達の率直性に新鮮味を感じるのかも知れません。

いやいや、まだまだ皆様のお世話にならなければならないのに、諸先輩を前にして生意気なことをくどくど書き並べ失礼致しました。しかし、このご挨拶を機に「つれづれなるままに、日くらし、ワープロに向かいて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつづり」、あやしいほどこの土地に「もの狂おしく」なってみたいなと思ったりしております。

どうか、今後ともお付き合いの程宜しくお願い申し上げます。

では、……



入会、そして退会のご挨拶

JPC 羽根井 義博

このほど、ビトン港コンテナ埠頭工事の環境モニタリングに赴任しました。

キリンの首が長いのは、ご存知の通りです。長い首に血が通っているのですから、頭を下げると、血が逆流し、脳の血管が破裂して死んでしまいます。ところがうまくしたので、キリンの首の血管には逆流防止の弁のようなものが付いているそうです。

キリンの祖先にあたる動物の首は短かく、進化とともに長くなりました。不思議なことに、その短い首の血管にも、すでに逆流防止弁が備わっていたと言う事です。

キリンの首が長くなるのは、ずっと前から決まっていたのでしょうか。

いま、我々ヒトという生物を考えてみると、分子が集まり高分子化合物になり、その組み合わせで細胞が作られ、これが集まって個体が出来上がり、さらに個体が種を造り、種が社会を造っている、こういう直線的な成り立ちに気づきます。この一種必然的なすじ道の中、ある節目節目で、生命の誕生、種の発生、社会や文化の創造等を見る事が出来ます。

これらは、なぜそうなったのか良く解らず、偶然性を感じさせます。

偶然性の結果が、必然性に影響してその必然性が、さらに偶然性を生み出しているようで、どうも、ヒトはヒトのようになりたくて、必然的に生じた生物のような気がします。

今までの多少の経験を振り返ってみると、私は、自分の中にあるものを共有する人間や文化と出会う事ばかりであった様な気がします。出会いは、けして偶然ではなく、必然であると思えるのです。

生まれるべくして生まれた生命、進化すべくして進化した人類、出会うべくして出会った人々、文化、その必然性の力あるいは意志を、そのまま諒解せずにはいられません。

おかげさまで、北スラウェシ日本人会に入会させていただき、会員皆様や、当地文化と出会う事が出来ました。

これからもまた、更なる出会いを楽しみにしております。

と、入会のご挨拶をさせて頂いたのも束の間、1年があっという間に過ぎてしまいました。

早くも、任期満了による帰国と言う事になってしまいました。

工事は、未だ続いております。後ろ髪を引かれる思いで、北スラウェシを去らなければなりません。

振り返ると、2001年ニューヨークでのテロ事件、2002年バリ島でのテロ事件、さらに2003年も中東、朝鮮と、どうも安定した世界情勢は望めそうもありません。在任期間は、何かと物騒な時期だったように思います。しかし幸いにも、その様な事とは別世界のごとく、安全に生活及び仕事をする事ができました。これは偏に、日本人会の皆様や、地元の人々の適切な助言によるものであったと思います。

短い間でしたが、様々な人々と出会うことができ、とても実り多い1年でした。感謝しております。

最後に、皆様のご健康と、完璧なご安全をお祈りいたします。

これにて、入会退会のご挨拶に替えさせていただきます。

2003年 2月



レンベ島トリコーラ付近
枝状ミドリイシの群落
2002年 4月



ビトン港コンテナ埠頭工事全景 2002年 10月 24日

「アモールの思い出」

トモホン在住：新田洋子

マナド国立大学の日本語講師としてこの地に赴任して、2年半が過ぎた。その間、私の心を癒してくれたのは、トモホンの自然と、ホテルガルデニアの犬たちだ。

私たちがガルデニアに移り住んできた時、アモールはまだ兄弟犬とじゃれ合っている子どもだった。アモールの母親はスポッティーという黒と白の斑の犬で、まさに乳牛を思わせる体形と色合いをしていた。子沢山でまた子育てのうまいスポッティーには、アモールの他に何匹も子どもたちがいた。その中で一番人懐っこく、ふさふさとした薄茶色の毛並みも美しい犬がアモールだった。

アモールは入居してきた私たちにすぐに懐き、やがて部屋の床下でいつも過ごすようになった。天気の良い日は入り口の石段で日向ぼっこをし、暑くなると床下のお気に入りの場所にうずくまって涼んでいた。アモールは自分に注目してほしいとき、湿った鼻先をくっつけてくる。おねだりの時は片方の前足を膝の上にのせて「ネーオネガイ。」というような表情を見せる。そんなアモールもいつしか年頃となり、恋をし、母親となった。「犬って出産までどのぐらいかかるんだろう。」「きっとアモールに似た美人犬が生まれるよ。」などと私たちは子どもが生まれるのを楽しみにしていた。そんなある夜、床下からフニョフニョというなき声が聞こえた。「生まれた!」と、私たちは外に飛び出し、なき声がする床下の奥を、懐中電灯で照らして覗いてみた。しかし、アモールの体の陰で赤ちゃんの姿は見えなかった。

何とアモールは初めての出産で七匹の子犬を産んだ。アモールは母親譲りか、子育てじょうずで、七匹の子犬たちは順調に大きくなっていった。そんなある日ジャカルタに用事があり、暫く家を留守にした。ジャカルタから戻ってきたとき、アモールと子犬たちはガルデニアの事務所の方にいた。事務所のスタッフが犬たちを移したのかと思い、尋ねるとアモールが自分で運んだという。「そんなことあるの?」と半信半疑で部屋に入るとすぐ、アモールが子犬をくわえて事務所から私たちの部屋の方にやって来るのが見えた。それから、一匹ずつ口にくわえて、床下の元の場所にすべて運んでしまった。アモールは私たちの留守中、住人のいない家は安全でないと判断したのか、事務所の方に引越しをしたらしい。

子犬たちは大きくなるにつれ、それぞれの性格の違いがはっきりしてきた。他の犬より一回り体の大きいクリントンは、いかにも長男といった趣があった。私たちは子犬たちに名前を付けた。白い犬はブティー、しなやかな体つきに品のいい顔をしたボーイ、猫みtainな毛並みのブッチー、そしてゴルタップ・・・しかし、親子の幸せな生活は長くは続かなかった。アモールから子犬たちは無理やりに引き離され、もらわれていたり、行方不明になったりしてついは一匹もいなくなってしまう。

そして、ある朝アモールは死んだ。ホテルのスタッフが撒いたネズミ捕りの毒えさを食べたからだ。本当にあっけない死。このミナハサで天寿をまっとうできる犬は少ないだろうが、それにしても短い一生だった。アモールの死から日の経った今も、床下からずっと出てきそうな気がして、いつもアモールがいた場所につい目が行ってしまう。しかし、そこにはもうアモールの姿はなく、土に丸いへこみがあるだけだ。



「ドリアン通信」マナド編

国際交流基金派遣青年日本語教師

吹原 豊& (同行者) 千春/明波

2000年6月に日本からジャカルタ経由でマナド入りして以来、早いものでは3年が過ぎました。当地で活躍されている先輩方と比べると決して長いとはいえない期間ですが、この3年のあいだにマナドならではの経験もいくつかできました。今回は、そんな経験を「ドリアン通信」という名前で日本の両親や友人に配信してきた記事の中から一部をご紹介します。

<ミナハサ料理教室>

マナドに到着した翌週から2週間にわたって、わが家の運転手の奥さんによるミナハサ料理（マナドの郷土料理）教室が始まりました。

言葉も大して知らないうちでしたので、教える方は大変なことだったでしょう。私の方は、この機会に野菜の名前や料理用語（切る、煮る、少し、加える、など）や食器の名前を覚えました。

ミナハサ料理は、インドネシアの中でも辛いことで有名です。チリと油をふんだんに使った料理なのです。基本になる味は、ニンニク、しょうが、チリ、小さい赤玉葱。それぞれスライスしたものを石臼ですりつぶして使います。これは、肉・魚の臭みを消す効果がありますが、他にもレモンを絞ったり、油の香付けにハーブを使ったり、仕上げにミントや三つ葉に似た香りのあるハーブを使います。

今回は私達用にチリを4本使って料理しましたが、地元の人達は倍以上も使って料理しています。運転手によれば、マナドでは「辛いものはおいしくない…」のだそうです。

料理を少し紹介しましょう。

サテ Sate（串焼き）

マレーシアやジャワには、甘辛いピーナッツソースを付ける鶏の串焼きがありますが、ミナハサでは、チリをたっぷり付けて焼きます。ミナハサでは豚肉のサテ（Sate babi）もあります。

イカン・バカル Ikan bakar（焼き魚）

海魚（ハタ、鯛）・川魚（鮎、鯉）に油をかけながらジュウジュウ焼きます。皿に盛ってからチリとニンニクの真っ赤なソースをたっぷりかけます。

カリ・アヤム Kari ayam（鶏肉のココナッツカレー）

カレー粉は一切使わず、生のウコンとチリをすりつぶして色を出しています。

プレキデル Perkedel（パン粉を付けないコロケ）

ブレネボン Sup Brenebon（金時豆と豚脂身のスープ）

スーブ・サユール Sup sayur (野菜—キャベツ、にんじん、じゃがいも、いんげん—のスープ)

ティヌトゥアン Tinutuan (野菜粥)

別名、「ブブル・マナド (マナド粥)」。パパイヤの葉、イモ、カボチャを使います。パパイヤは苦いですが、コレステロール防止に良いといわれています。

サユール・パパイヤ Sayur papaya (パパイヤの花の煮物)

パパイヤの花もやっぱり苦いです。健胃作用があるとか。

アチャール Acar (大根の千切りの煮物)

他にもにんじん、いんげん、きゅうり、ピーナッツを入れます。お酢で味付けし、ウコンで黄色く色付けします。日本のお漬物のような役回りの一品です。

アボン・チャカラシ Abon cakalang (カツオのふりかけ)

カツオの生節をほぐし、チリ、ニンニク、しょうが、赤玉葱で味付けし、よく炒ります。保存食。

まだまだ他にもたくさんありますが、私達日本人に食べやすい料理を選んで教えてくれたようです。しかし、午前中でも室内の気温が30度を超す中での料理教室は、気が遠くなりそうでした。

<マナドの地酒>

椰子の木からお酒が取れるのを知っていますか？椰子といってもいくつか種類があるのですが、お酒の取れる椰子(砂糖やし:pohon enau)がミナハサ島の田舎にあると聞き、さっそく見学してきました。

ジープに乗りこみ、車の背丈ほどもある草むらを突っ切り、車が横倒しになりそうなほどの悪路を進みます。途中から道が無くなってしまうほどの山奥まで入り、ついた場所は畑という言葉から想像できるものとはかけ離れた自然の中でした。作業小屋のすぐ裏にある椰子の木まで歩いていくと、若者が木に登りはじめました。山刀で樹皮に切り傷をつけると、すぐに泡まじりの白い樹液が出てきました。これがすでにお酒なのです。

小屋に戻ってからとれたてのお酒の味見をさせてもらいました。カルピスのような乳白色をした甘酸っぱいお酒の名前はサグウェル(Saguer)といいます。とれたてなのでスッキリとした甘さで非常においしかったです。アルコール度数は2度ぐらいでビールより軽いお酒です。ビールをチャンプル(混ぜて)して飲むこともあります。

また、このサグウェルを蒸留すると、チャプティクス(Captikus)という透明なお酒が出来ます。畑の片隅には、蒸留装置があります。ドラム缶と中を抜いた竹の管で組まれたシンプルなもの。75リットルのサグウェルから、15リットルのチャプティクスが蒸留できるそうです。チャプティクスは普通ココアで割って飲みますが、これをチャコと呼びます。またチャプティクスをベースにした薬草酒はカシガラシ(Kasegaran)といい工場で造ります。

サグウェルは新鮮なうちにしか飲めません。1週間も置くと酸っぱくなります。同じ木でも樹液が酸っぱいものからはお酢が作られます。また、樹液の甘いものからは赤砂糖（Gula merah）がとれます。この赤砂糖もミナハサの料理やお菓子作りには欠かせないものです。

（以上「ドリアン通信マナド編」から抜粋）

振り返れば、マナドでの3年間は父の死や息子の誕生など、とくに私的な面でドラマの多い年月でした。また、当地滞在中は前田会長や平野副会長をはじめ日本人会の皆様にいろいろとお世話になりました。私達はこの6月末に任期満了となり帰国しますが、これからもお元気で、そして北スラウェシの日本語教育の活性化にも引き続きお力添えをお願いいたします。



回想、SARAH! 失敗談、etc. etc.

外岡 蔚

氣ばかり若がっていても、人生黄昏を感じる様になると、ふっと何故か回想に耽る事多くなりタリシウスへの投稿も気の向く儘に、

1970年、(大阪万博年) ワー此なのがよく空を飛ぶものだ!!

始めて見るDC-8機...羽田空港にて、

清水の田舎者、初めての海外出張 家族の見送りを受け(未だ空港送見送り/出迎えが盛んだった時代) M商社の要請を受け、ギリシャへ、先ずは中継且つ担当地のドイツ・ハンブルグ 駐在員の出迎え受け市中へ、街並みも何も始めて見るものばかり、ホテルのcheck inすら自分1人では出来ず駐在員任せ、丁度6月昼の一番暑い季節 太陽は未だ高いのに、夕飯、9時 未だ々々明るい、飾り窓をwindow shopping にと云う事で裏の一角 其れはそれはド迫力 驚きドッキリ! 次なるもの かのサランボーへ 此れ又ドッキリ 目と鼻の先 特選品のずばり! しかも次から次へと替わり、海外馴れ無き先ずはbody communication! 人類皆兄弟との指導の元、突撃! 即沈! 小型、/ 鮮度良し、/ 短時間、=仕事量少、効率良し、で其の世界一般に同胞喜ばれているみたい。

2日目、今迄乗ったことも無いBMW 735スピード無制限のアウトバーンを突っ走り古都ルーベクへtemporally のメンバーとなりカジノへ まさに映画の舞台裏の儘、小額を2マルク チップ に替え始めてのルーレット しゃべれない 結局自分の手が届く範囲のみ、どこかのおばあちゃん等私等と色の違う20マルクチップで! 単独5枚など賭けている、此方は長持ちするよう 2股、4つ股 偶に単独、上気してるのか? 当たったのが解らない、時折ディーラーがさっとチップを押出してくれる、きっと当たったのだ! ディーラーはちゃんと覚えて居てくれる、大したものと感じるばかり、初体験。

市中の普通の本屋さんで買い求めの8ミリフィルム、雑誌 今迄見た物とは全く違い きれい、帰国時の検査心配し、対策を? 考えつゝ手当たり次第、... しかしこの購入が以後工場関係者、特に年増の女子従業員の皆さん、PTA、等々に喜ばれ、其れから数年 出張の都度 皆さんの心待ちはその一点 大いに地域のcommunicationに役立ったので有ります。

眼下に広がるアルプス眺めながらアテネへ、又駐在員の出迎え受け相手先会社へ名前紹介され 昔歴史で、プラトン、アリストテレス、アンドレアなど何か偉そうな名前ばかり一寸戸惑う。

翌日車で工場へ、途中絵葉書に出て来る遺跡を彼方、此方に見ながら ナフプリオンと云う小さな港町へ(最近観光旅行パンフレットでよく出て来る街) 岬の小高い丘の上

に古城を利用した小さなホテルがあり、其れはそれは古代を感じさせる所。何でも昔トムゴからの侵略で最初に占拠された所？との事。

毎日マトン / チキン 野菜は明けても暮れてもアーティチョク、夜は船着場の前庭的なテーブルに紙のテーブルクロス、でも其れが随分と立派に見えるから不思議なもの。メニューは読めないし、言葉も話せない。調理場に入り込み冷蔵庫を開け自分で魚を取り出し、此れを焼いてくれ、後は隣の客が食べている物指差して注文、其の名前メモ美味しかったら次回注文と徐々に増やし結構レパートリも広くなった次第。然し毎日のオリーブ油（現在の様に精製が良くないので）さすがの雑食の私でも可也日本食が恋しくなった頃アテネの駐在員が訪れてくれ、おむすびの差し入れ。夕食の港の脇のレストランで、今でも思い出すほどの美味しさ / 有り難さ。周りの人が見つめる中、食児童の如くガツガツと、更に何時もの如くスイカに塩を付けて食べる姿... 最初の内は一寸恥かしかったけど其れは慣れ。其の内に、これ見よがしに、こうすればもっと甘く美味しく食べられるぞ！とばかり.....でも後のスペインでもそうでしたが、此方のスイカは乾燥した気候で、元々甘味充分で、塩付けなくても甘くその様な習慣 / 知恵無いみたい、

（他の果物も、兎に角甘かった、逆に日本の果物、甘味？ 後に種乾かし日本に持ち帰り蒔いてみたけど、花までは咲くけど実は付かなかったです。）

街はずれの浜辺のレストラン夜など、白い砂浜、波全く無く浜辺のテーブルの下水と岸の境判らない、透明度、それ以上の透明度のある海、未だに見ておりません。泳いでみて又ビックリ塩分強く兎に角身体の浮く事、ひっくり返ってそのまま、身体沈まない、波も無いので水被らず息が楽に出来、数年振りに泳ぐのに何か泳ぎ上手になったみたい、まさに天国？

約3週間のナフブリオンでの、杏（アブリコット）の缶詰の生産を終え北のテサロニカの東北、ブルガニアとの国境に近いエデサと云う田舎町へ

....途中アテネ - テサロニカ、の国内線のステュアデスの其れはそれは綺麗だったこと....其のオ姉サンも既に30余年の月日が経ち.....現在や如何に??

小さな滝と公園の有る避暑地、結構小奇麗なホテル有って其処が我々スタッフの宿舍。工場まで約30分。工場は24時間操業VWのカブトムシで朝のシフトと夜のシフトの交代時間に合わせ1日2往復。夜のシフト始まり10時、その交代を見届け、途中のレストランで夕食、チキン、マトン、チキン、の繰り返し、途中休憩所が有ってお昼の掃途、一寸...丁度田舎の床屋さん...真ん中が待合、右、左に部屋有って交互の掛け持ち、SPレコード一枚、持ち時間3分勝負、実に忙しい、\$1.00 = ¥360 也

品質？それは脛毛が当って痛いほど毛深いオネイサン？オバサン？季節の果物収穫時期のみ工場稼働 / ヨーロッパへの積み出し等、この時期のみ賑わいを見せ、それに合せ臨時開店するのだとの事、此処でも人類皆兄弟を实践！仕事の事は

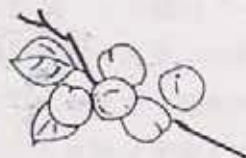
解り難くとも、この事は逞しい想像力即座に働き良く解るから不思議なものです。

当時既に日本ではTOTAL QC、導入され人員管理も難しくなってきた時期、夕陽数台のトラックに積まれて来た女工さん 工場前で待機9時半の交代時我先に工場へ 入り口に人員管理係りが居り一定人員入った所でハイ STOP! 然しトラックで来た人達バスも無く帰るに帰れず 明日のシフト明け迄工場の軒下で仮眠 朝のシフトに入れる様待機 工場前には食べ物売り待機、夜も賑やかなもの。

生産責任者のMr.アリストテレス、気の良いオジサンと云った人間で 何故か?? 出勤カード 20 枚程持ち彼自身が in/out のカードを捺している姿毎日見受ける、お気に入りの◎子さんを連れ我々の居る管理室の前を平気で通り... 宿舎へ... それも時折顔が替わってる。

特記すべきは便所、工場棟から50m程離れているのだが 通路にも、便所にも電燈が無い、周囲真っ暗 朝うっかり工場外へも出られない いたる所が 天然WC その臭い強烈、マトン / ニンニク多食の民族、まあ日本でも70年代初期は我々工場でも余り清潔とは云えなかったが少なくとも工場の便所は水洗になっていた。

一方生産の方も 運び込まれた黄桃、未熟 / 適熟、大 / 小、有り、此れを仕分け 本日 / 明日 / 明後日、の製造と区別して置くのだけど... 朝出勤すると 明日の予定の物既に無い??... にわか仕込みのギリシャ語ではどれだけ通じているのか? 画に書いたり、顔での 不安 / 安心 / 微笑 / 怒り、手足等全てを使い正に body language... で奮闘! 果たしてこんな事で我々管理指導に来てても其れなりの効果有るのか? 自等疑問を感じていたけど やはり良くしたもので、買い手側から管理者へばり付きチェックしている、との気持だけで品質最低線は確保出来たみたい。



此のメデサ周辺 大手のデルモンテの工場等も既に進出、シーズン1ヶ月で桃の缶詰生産
派遣された工場ではハンプブルグ支店向け100%の生産、品質も今とは全く異なり(当時
高級の特徴 = 食べられる物 / 安価、第一、M商社の現地 staff の昼食も...パンに魚、野菜
スパイス煮、(我々日本で生産 / 輸出していた安い缶詰)を挟み、小さなリンゴ丸かじり、
で終りの時代、今では考えられない質素なものでした。

一番の目的はシロップの甘さ(糖度)の管理...輸入時砂糖の関税高く(当時40%)
砂糖の糖度 15%以下なれば 税10%、...其れを越すと 40%、...と云って
越すれば 美味しくなく売れない。...そんな事が主な目的 (ちなみに日本でも砂糖関税
高く、ココアと砂糖を ココア51% / 砂糖49%(50%を超えない)とMIXすれば
調合品として 低関税の故、その様にして輸入したもの後 ココア / 砂糖の比重利用して
分離...日本での常法がつい最近までまかり通っていました。

幸いにして其のシーズン生産された物トラブルも無く(以前は彼等トラブル続出で可也
儲けがすっ飛んでいたとの事)特に こんな事我々派遣された事全く関係無い事だけど、
生産量も伸び / 販売価格も良く 関係者皆ハッピー ...となると小さな失敗は何かへ
隠れてしまい、お咎め無し!! 其れが病みつき 次年度から指名で生産指導に携わり、
海外要員...誰が携わっても同じ様なものだが、たまたまの!運! 此れが私の海外作業の
始まりとなった次第です。然しながら当初は現在の様な擦れ枯らしで無く やはり経験も
少なく、新しい技術的問題も発生即対応の決断 / 怖さの経験も数多く、又丁度息子達も
幼稚園児の頃の事 1ヶ月を過ぎる頃から帰国の日を指折り数える様になり、...

正に! 億良等は、今帰りなん 子泣くらん その彼の母も我を待つらんぞ!の心境も
異国ならでは!!の経験。

アテネの市中のマトン焼肉の臭いの中 遺跡の観光 / みやげの買いあさり、等々。

帰途ロンドン支店へ挨拶 未だポンド10進法でなく16進 / 12進とややこしく
ホテルに帰って筆算で金勘定(未だカンオ等無かった?) タクシーも口答では通じない
最初に入ったホテルで 此処ではないと云われ テレックスを見せたら タクシーを呼ん
でくれ 今度は運転手にテレックスを見せ OK、乗ったと思ったら直ぐ着いて??と
思ってた直ぐ斜め向かいに見覚えのあるカンバン、何の事ない直ぐ向かいのホテル
その明日解ったのだが 一方通行で一すじと通り通った丈、未だ静岡 / 清水の田舎では
一方通行なんて無かった、タクシーの支払いも支店スタッフから教えられたとおり、
小銭有りっ丈手の平に乗せて 運転手がその中から数えて持ってゆく、間違いなし、
その頃未だ黒い肌の人見掛けず安心して良かったみたい。

生意気に田舎者でもバーバリーなんか 誰かに吹き込まれ知っていて、早速ビカデリー
ハロッズへ コート購入、未だ帰途時計も買いたい、でも出張旅費では足出る事確実、
みやげ多過ぎ、未だアメリカ周りの予定、ロンドンから別送で送って貰う、帰ってからの
税金も心配!それより出張旅費では足出る!! 全く田舎者丸出し。

資金

LONDON - NEW YORK

初めてのジャンボ機 747 今では普通に感じてても当時は 大きな船に乗った感じで
おどろく するばかり、其の機内だけで フィルム 1 本 終わり！

NEW YORK

ニュージャージーのM社の販売先見て回り / 国連ビル / エンパイヤー ビル (驚いた事に
数々に道を尋ねる人も居た。) パンアメリカンビル / 2階建ての鉄橋 / 市内の道路脇駐車
タクシー まともな車 1 台も無くバンパー押し潰れ、見ていると縦列駐車 先ずバンパー
で押し出してスペースを開け其れを前後 3 回くらい、それでやっと駐車。

ホテル check in AMEX カードも無く 現金デポジット確か \$ 500 要するに
カード持てない奴は信用無し、何をやられるか分からない、たつぷり保証を取っておく、

ニュージャージーへの 道程 1 っ歩郊外 家々の前の広い庭 其の前にはヨットが並び
正に洋画に出て来る景色そのもの。

SUN FAN. MAYAGETT.

途中の飛行機 双発プロペラ 飛び上がったと思ったら 雷 / 雨 / 風、ピカピカっと
、風で 横に流れるのが解る、顔面蒼白！ 出迎えてくれた JETRO の職員、午後の便
長く落ちますよ！！ 帰りは陸路 6 時間に切り替え！

MAYAGETT HILTON 正に南国の楽園 (此れ又 映画でしか見たこと無い情景に感激)
ホテル 工場は近いし解りやすいから 車自分で運転して来てくれ、！！へー！！さて乗っ
てビックリ、..何せ 日本ではスバル 360 此処では SHEVROLET 3.5 Litter
Automatic 恐る々々 スタート アクセルちょっと踏んだ丈、ドーン ガクン
牽い 前には何も無し、ブレーキ踏めば又ガクン、 ハンドルの軽さよ！！右折左折も
無事曲がり さて工場着、生意気にバックで駐車、..ところが何と 振り向いても 後ろ
見えない、中腰 まるで立ち姿勢 での 運転、幸い何処にも ぶつつけず、無事駐車
..恐ろしかったけど 何でも経験 有難く経験させて貰った次第。

SUN FAN - LA

やっど 出発機内に座ってやれやれ！と思った瞬間 ア！！さっき 免税店で買い物
して其のカウンターに パスポート / 工場レポート の入った書類入れ忘れ気が付く！！
今でも其の時 何と わめいて、降り 先程の免税店に行ったか 覚えていない
.. 冷や汗も、冷や汗.. 今となっては 良い思い出ですが。

途中カリブの蒼い海を眼下に見て マイアミ経由 LA へ

LA.

Terminal Island 缶詰工場の駐車場には、BUICK / CHEVROLET etc の
馬鹿でかい車は何百台とズラリ...皆一般の従業員の通勤車、(当時の私の車は
スバル 360) 正にオクタマゲ ！！ やっぱりこんな富める大国とのケンカは

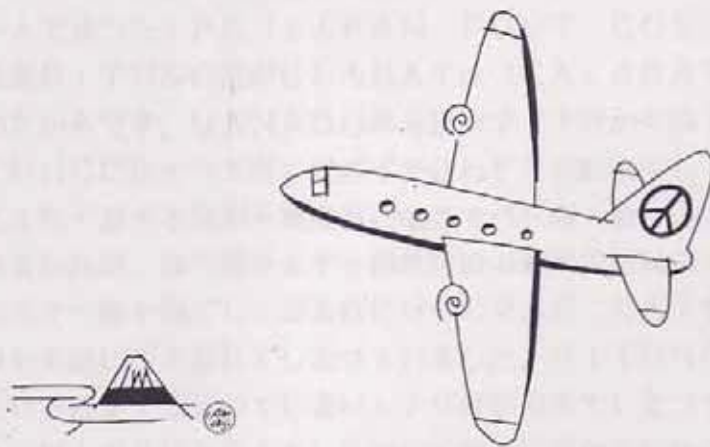
やばかった！！が実感でした。

(6)

工場生産規模 我々 30tons/日 彼らは200tons/日 然し彼らのやっける事は粗雑そのもの、我々のUSへの輸出検査は やれ cleaning の程度 / appearance 云々 鮮度 も犬の臭覚持ってる様な検査官の判定 / 計量も1gr マイナス駄目 彼らは oz 単位 の管理、同じmarketで売られている物 何でこんな差別受けるのか？ この程度の品質で良ければ我々もっと コストダウン 可能なのに！と思いつつ... (もっとも この差有ればこそ made in JAPAN が売れる のだ！) 大量生産に対する機械化は大いに参考になった、けど 管理体制は？？の感想。

数々の初体験 日本-EUROPE-US-日本と地球一周 皆にお前の英語で 良くぞ帰って来られたと、呆れられた次第。まあ此れも 未だその時期 多くの商社 食品関係も安心して3国間の商売するには、やはり品質の安定が不可欠 それで 何処でもA待遇の 出迎え/見送り、を受けたからこそ！！

こんな事きっかけで 会社の方もやはり慣れた人間の方が安心と言う事で翌年からも 彼方此方に出掛ける様になった結末が現在の姿、当初、社命3ヶ月の予定が既に20余年 此の間 当り有り！外れ有り！正に諸々、其の諸々、次の機会に書かせて頂く事に致します。





PT. SAKATINTA

河野親優

『多様性の中の統一』スカルノ大統領の演説の中で語り伝えられている『MERAUKからSABANGにいたる5100Km』の広大なインドネシア、異文化の垣塙と云つてもいいかとおもわれます。同じジャワ島の東西ですら言葉の相違、生活、習慣に大きな差がみられます。ましてや、外島となればバタク、アチエ、ミナンカバウ、スンダ、モンゴロイド、マナド、マドゥラ、アンボン、バリ、ダヤク、トラジャ、ブギス等など、もつと細かく種族をあげれば数えきれないと思われまふ。さて、インドネシアの南北、最北最南の町がどこなのか詳しく調べてみたことはありませんが、インドネシアの北端に近くそしてスラウエシの北部K字型の北の半島MINAHASA地方の中心となる異文化の文化都市MANADOがあります。九州の南端から3500キロ、国内のメダンまでより近距離に位置しています。MANADOの都市名は日本語の港からと云われたり、メナド化粧品とMANADOに関係がありそうだと思つたりしていましたが、何れも関係はありませんでした。

北の美しい町、MANADO地方のご紹介をする前に『なぜ、MANADOなのか』をお話しておかなければなりません。太平洋戦争とMANADO、日本人とMANADOとの古い縁に前々より興味をおぼえていたことが前提にあります。何と云つてもスマラン港で港湾整備で特殊な個有新技術を駆使し改善、新增設の長期大プロジェクトを成功させたメンバーのお一人であつたJPC (JAPAN PORT CONSULTANT) の石野さんの新しい任地BITUNG港がKLABAT山 (KALABAT) を挟んで半島の東側に位置していたからです。MANADOからは車で三十分から四十分の距離でしょう。任地がBITUNGに決まつて直ぐに必ずお訪ねするお約束をしておりましたところインドネシアをこよなく愛する兄が十数度目の来訪でバリ島一泊しジョクジャカルタ経由でスマランに入りましたが、後で聞きますと偶然宿泊のホテルも同じで、それに部屋も数部屋をおいたところで一夜を過ごし、おまけにNGURAH RAI空港で石野さんに声をかけられ早速つもる話に時を忘れてしまつていました。BITUNGへの旅はこうして話に夢中になつていなかで決まつてしまいシナリオが出来てしまつていました。

MANADO人 (MINAHASA人) について最初に聞かされたことは、インドネシアの他の種族に比べ容貌に日本人と類似点が多いと云うことでした。色が白く特に女性が美しく、スチュワーデス或いはジャカルタでOLとして就職率が高いなどの話も聞いた事があります。フィリッピンを植民地化したスペイン人の影響でキリスト教が布教され、イスラム教の東進に断層が出来、キリスト教会の多い町ということも予備知識として石野さんからのお手紙で知ることができました。スペイン人それに続くオランダの植民地化で今日のMANADO人が固有の文化圏を作つていることもうなづけます。

先にMANADO人の容貌が日本人に似ていると書きましたが、北方系の種族との混血であることは間違いなさそうです。後でもふれますが土地の婦人の話では嬰兒の臀部に蒙古斑があるとのこと日本人の嬰兒に共通しており興味深くおもいました。

MANADOへの旅立ちは二月十六日、ご参考までに石野さんに教えて戴いたフライトを書いておきましょう。

MZ 516 Y 16FEB SRGSUB PR2 0630 0710

BO 499 Y 16FEB SUBMDC PR2 0750 1125

朝六時半MERPATIでスマランを発ちスラバヤに向かい七時十分に到着、七時十五分のBOURAQに乗り換えて、一眠りして十一時二十五分鹿島建設の手になるSAM RATULANGI空港(MANADO空港)の新装(?)滑走路に滑りこみます。空港ビルも思いのほか立派なのに驚きました。そんなことはどうでもよろしい、到着便の出口に出迎えて下さった石野スマイル(恥ずかしながら、涙が出そうになりました。歳とると涙腺のネジがゆるみます)とがっちり握手し健在を確かめました。用意の車に乗せて頂き、MINAHASA地方北部、半島の背骨にあたる部分の案内をしていただきました。町とも集落ともいえるAIRMANDIDIを経てカルデラ湖DANAU TONDANOに至るみちすがらSAWANGANのWARUGA遺蹟を見ることが出来ました。

石野さんはMINAHASAの地誌その他をよく調べて下さっていたのと、もともと博学でいらつしやるので、説明して下さるのに時の経つのを忘れてしまう始末でした。

WARUGA遺蹟のことは、これも石野さんから川井雄二氏の調査記録を届けて戴き大変参考になりました。資料によりますとWARUGAはMINAHASA地方の石棺のことでDOMATUという花崗岩に似た石の内部をくりぬき、日本の座棺のように死者を座らせて葬りWARUGAはWALE MAROGHAの短縮語で『朽ち果てる肉体の家』と云う意味と述べられています。そして遺体は北の方に向くように静置されていると云うことでした。日本人も古くは江戸時代、文献にみられるのは大正十五年頃糸満漁民(沖縄出身漁民)がMANADO地方への進出が記録されています。現代史での日本人との関わりとして太平洋戦争緒戦に始めて堀内海軍大佐率いる横須賀鎮守府第一特別陸戦隊の落下傘部隊がMANADOに降下しました。インドネシアには古くから云いつたえられている伝説がありました、それは異民族に支配されていても、やがて白い蓮の花に乗った黄色の人間が北の空から降りてきて赤毛の異民族を駆逐すると云うもので、1942年3月突如天空から純白の落下傘部隊の降下が蓮の花に例えられ、これが伝説の人にされてしまいました。堀内大佐は大戦中の部下が犯した島民への暴行、殺戮の責を一手に負いMANADOの原野でオランダ軍により処刑されました。今も島民に守られテーリンの丘で永遠の眠りにあると聞いていましたが、資料を持たずままMANADOを訪ねましたのでテーリンにお花の一輪をたむけぬままになりました。その後石野さんが調査の労をとつて下さり、実はテーリンのほど近くのレストランでビールを傾け、談笑していたことがわかり少しだけでも墓碑に近いづいていたことで石野さんに感謝しています。

また、WARUGAの話にもどりますが、遺蹟にはORTJE(オルチェ)と名乗るおばさんが頼まなくとも、遺蹟の説明の労をとつてくれます。

WARUGAが全て北に向いているのはMINAHASA人の祖先がモンゴリアだからだと説明してくれます。然し人種の立場からみてゆくと、もともとインドネシア人は中国雲南地方、ラオス、タイ、ビルマの山岳民族が北方からの漢民族に迫られ、南に移動しつつには、海をこえてヌサンタラの島々に離散したことになっています。

MANADO人の色白の美人説はその後の北からの主として中国人が季節風にのり、スラウエシ海、マルク海遠くはアラフラ、チモール海、更にはオーストラリア北岸まで、真珠、香料、なまこを追って南下し、再び南よりの季節風にのり北に帰ってゆく海の狩人のことが文献にみられます。MANADOの見目麗しい美女は季節風が運んできた花粉の末裔と云うことにしておきましょう。その中には命知らずの日本の紀伊の漁師達もいたことも付記しておきます。

山岳部のWARUGAから目を転じてMANADOの西の沖合スラウエシ海に浮かぶ可愛い小さな島陰が見えます、BUNAKEN島です。MANADOから北西七キロ位と思われまふ。ここにはインドネシアで二隻しかないと言われる半潜水海底観覧船が運航されていて島の浅瀬のコバルトブルー（本当に綺麗なブルーの水）から世界一と言われるドロップオフにさしかかると途端に海水は群青に変わり深海に辿り着いた錯覚にどぎまぎしました。オオイソバナ、ウメイロモドキ、海亀、始めてまのあたりにする熱帯魚、その他知らない、知らない海底植物、魚類また魚、私の知っていることは大海の水一滴にも充たないことをおもいらされて呆然とし海底の魔力に射録められるばかりでした。それもその裏、MANADOはダイビング・スポットとして専門家ダイバーの憧れのポイントと聞きました。心洗われたおもいで甲板に立ち改めて目の先の緑につつまれたBUNAKENの島を肌にかいた海風を受けて眺めながら生きてあることの喜びみたいなものを感じていました。やはり此処まで来たからにはBITUNGの港まで行かなくてはなりません。男たちが汗を流し、時には喜び、悲しみにつけ男泣きする仕事場があるからです。BITUNGの町……何もありませんでした、港町特有の情緒はかけらもなく潮の匂いと日本の演歌にはなにくい寂しさに似たもの、そして物足りなさのある町でした。その物足りなさが何であつたのか今もつてわかりません。強いて云うなら、この最果ての何もない町で働く男たちのひたすらさと忍耐と情熱が何処から出てきているのか、私の胸のうちを駆け抜けてゆき、この港町が『お前も此処で働いてみないか』と引き止めてくれなかつたことが、物足りなさの正体とも思えたからです。

港を造り変える男たち、魚を捕獲して日本に送り届けている男たちの住む町の荒々しさと私たちの今のスマランの町を較べて、私たちが恵まれすぎていることに気がきました。

また、ジャカルタの冷房のきいた高層ビルで働き何時でも日本食にありつける日本人社員と地の果てで時には蠅や蚊の大群と戦いながら空腹を満たすことを余儀なくされる日本人、何れも祖国日本には無くてはならない人々であることには変わりありませんが、資本や官の論理から別途の階級社会が出来てきているように感じたのは思い込みすぎでしょうか。さて、本稿も終わりに近くなりました。やはり人間は何処を訪ねても食をもつて終着の弁としなくてはなりません。MANADOの食となれば海、やはり魚の各種の料理が第一でしょう、ところが北部のMINAHASA地方では意外に淡水魚特に鯉を主にした魚料理が多いのに驚きました。独特のチリ、スパイスが鯉に合っているのでしょうか、昼に夕に鯉にせめられても飽きがこない不思議さ、珍味と云うべき一品でした。ホテルの海浜で浜風に身をゆだね、ボツリボツリと空からは東の間のお湿りのプレゼントもありましたが、やがて星も現れてピツツアと大ジョッキの生ビールもMANADOの宵の心温まる思い出になり、石野スマイルと共に永く記憶のアルバムにとどめ置かれる事でしょう。





ビトゥンの日本人登

長崎 節夫

平成15年 7月20日、海上自衛隊の練習艦隊（かしま、はまゆき、さわぎり）がビトゥン港に到着し、一連のセレモニーが行なわれました。ビトゥンを含むミナハサ半島は帝国海軍と深いかかわりのある土地で、これまでも会報タルシウスにたびたびとりあげられているとおりですが、本稿では落下傘がらみのことではなく、カツオがらみの日本とミナハサ半島のかかわりのことを少し書いてみます。

会報の第2号にも書かせていただきましたが、平成7年にはじめてビトゥンに入った私は、港に居並ぶかつお釣漁船を見て、深い感慨にうたれました。ペリカニ社の岸壁から歩み板でかつお船にわたった私は、タイムマシンに乗って50年前の故郷の浜におりたっていました。あとでわかったことですが漁具や漁法だけではなく、かつお節の工場も日本式でした。ビトゥンのかつお釣漁業は、日本の漁業技術が完璧に移転され、その技術が真空パックされたかのように持続している、という点で希有な存在だと言えるでしょう。

この技術移転劇の主役の一人は愛知県出身の大岩勇ですが、彼について、岩波書店刊「海のアジア 6」収録の「カツオと南進の海道をめぐって」（藤林 泰）から抜粋してみます。

「大岩勇（1902～45）が蘭領東印度セレベス島北東部の中心地マナドで造船業経営をはじめたのは1920年代末であった。（中略）。1932年当時、北セレベスにおける日本人のカツオ漁は日蘭漁業（1929年、鹿児島県人によって設立されたカツオ、マグロ漁を専門とする漁業会社）とビジャック組合（沖縄漁民の組織で、カツオ漁と鮮魚販売をてがけた。）の2グループによって行なわれていたが、ともに39年から40年にかけて大岩漁業に吸収合併される。39年の大岩漁業の従業員は481人、うち日本人は128人となっている。

（長崎注 あとの353人は現地人。混合率、日本人1対現地人3.76）

（中略）この年のビトゥン在住日本人は154人である。在住日本人にとってビトゥンは大岩漁業の町であった。」

上記（注）に示したように、当時の南洋進出企業としてはめずらしく現地人の雇用率が高く、このことが技術移転の濃度をたかめる要因にもなったと考えられます。上記の数字では日本人従業員128人となっていますが、そのほとんどは沖縄県人でした。その中のひとり、伊礼永吉さんの証言もあります。

「19歳のとき（昭和9年＝1934）南洋群島のデニヤンでカツオ一本釣漁師になった。（中略）、1938年から39年にバラオに移り南興水産の契約カツオ漁船に乗り組んだ。当時10隻以上あった漁船はすべて沖縄漁民の所有であった。（中略）1942年、大岩勇の誘いでセレベス島ビトゥンにわたった。大岩はバラオでカツオ漁船を6隻買ってビトゥンに運び、沖縄漁民をつれていった。ビトゥンではデニヤン、バラオ以上にカツオが釣れ、獲ったカツオはすべて大岩漁業に売っていた。大きな鯨節工場があったが、当時鯨節に加工して本土に送るより、鮮魚あるいは少し炙った半煙製品「イカンフフ」で地もと住民に販売される量の方が多かった。」

「ビトゥンの大岩漁業」は事業展開の時期、場所、現地重視政策、沖縄県漁民の重用、そして総監督大岩勇の個性がうまくかみ合って順調に発展しましたが、1945年の敗戦によって文字どおり「灰じんに帰」してしまいました。

大岩自身も自社所有船を日本からビトゥンへ回航する途中、空襲を受けて死去。1945年5月20日のことでした。日本人漁民のうち終戦まで残っていた者は抑留の後日本に引き揚げ、病気、事故、戦災等で亡くなられた方はそのまま現地で眠っています。

去った7月19日、在マカッサル総領事館の渡邊総領事と竹山領事がビトゥンに来られた機会に在ビトゥンの会員4名と大岩勇の御子息大岩トミーさんも加わって、ビトゥン、メナードに残されたお墓の取扱いについて話し合いがもたれました。具体的にどうこうということではなくて、これからお墓の取扱いについて立案をはじめようということですが、私としては遠い南緯の地に残る漁民の墓の問題が解決に向けて動き出したということで、少しホッとしているところです。

在マカッサル日本国総領事館、北スラウェシ日本人会の皆様には今後ともよろしくお願い致します。

2003年7月20日までに確認されている墓

ビトゥン		
氏名	没年月日	享年/その他
与那嶺 亨	昭和15年	
伊礼 良貞	昭和14年	
伊礼 徳一		
並里 三雄	昭和12年11月	2歳
比嘉 松樽	昭和9年9月29日	29歳
池田 増蔵	昭和14年12月12日	36歳
古波蔵 清○		
池原 盛益	昭和14年12月8日	30歳
高良 三郎	昭和17年7月28日	44歳
祖慶 朝順	昭和12年8月18日	2歳
田畑 並正	昭和14年8月28日	1歳
中宗根 勇	昭和15年	1歳
新垣 健一		9歳
Y IDEMORI	昭和14年	1歳
メナード (オランダ墓)		
仲村栗 苗	昭和20年2月20日	海軍軍属
渡久地 平則	昭和20年5月29日	同上
山城 正雄	昭和20年5月29日	同上
古波蔵 鑑徳	昭和20年5月29日	同上
翁長 武治	昭和20年1月3日	同上
増田 誠吉	昭和20年5月29日	同上
加来 俊太郎	昭和20年3月9日	同上
加来 秀子		
中村 ○○		
大槻 ○○		

*メナードに海軍軍属で氏名不詳一柱あり。

長崎節夫さんによる墓標発見を伝える「琉球新報」

(1997年某月20日付)



インドネシア・旧セレベス島

土と雑草に埋まっ
た眞出身者の墓一
トツン

基15墓の者出身県

名「仲村渠」「久渡」

旧セレベス島で見つかった眞出身者の墓はメナード墓地とビトゥン墓地の二カ所。同地を漁業基地にしてマグロ・カツオ漁をしている池間島出身の長崎節夫さん(左)が従業員協力を得て発掘した。

旧セレベス島で見つかった眞出身者の墓はメナード墓地とビトゥン墓地の二カ所。同地を漁業基地にしてマグロ・カツオ漁をしている池間島出身の長崎節夫さん(左)が従業員協力を得て発掘した。

もうひとつのビトゥン墓地では十基の墓が確認された。没年が昭和十年代の半ばであることから病氣や戦故で死んだ可能性が高い。

平良市の長崎さんが発見

出稼ぎで海軍に徴兵

インドネシアの旧セレベス島(現スラウェシ島)で戦前、出稼ぎに行っていた眞出身者の墓が発見された。墓は土と雑草に埋まっていたが掘り出すと次々と墓標が現れたという。墓標には「海軍軍医」「久地」「仲村渠」と沖縄独自の姓が刻まれており、沖縄から出稼ぎで渡り、漁業に従事していたところ、食糧調達のため海軍に徴用されたものとみられている。ほかにも、第二次世界大戦前に亡くなった人たちの墓が見つかったおり、子供を含む、合わせて十五基の眞出身者の墓が確認されている。

雑草茂る中から墓標



墓碑銘がはっきりと読み取れる県出身者の墓＝ビトン

幼児と子供の墓も二基ある。

墓を見つけて供養した長崎さんは「墓は土と雑草に覆われ、探すのにもたついたが、近所の子供たちの応援で一基見つかった。次々と草の中から墓標が現れてきた。しかし、後々の管理のことまで考えると私一人の手に負えるものではないし、最終的には県や国の力を借りなければならぬ」と話している。

また遺族探しも難題。長崎さんによると、ビトン

では、現地に墓を探しに来たものの、見つけることができずに泣く泣く帰国した日本の遺族がいたという。

◇

旧セレベス島で墓の見つかった県出身者の氏名は次の通り。

【メナード墓地】仲村 稔、渡久地 平則、山城 正雄、古波蔵 鑑徳、翁長 武治（ほかに本土出身者と思われる加来俊太郎、中村○○）

【ビトン墓地】與那嶺 享、伊禮良貞、伊禮徳一、並里 三雄、比嘉松樹（那覇出身）、池田増蔵（伊平屋出

身）、古波蔵清（信濃）、古（同）、池原盛益（石垣出身）、新垣健一（享年九歳）、祖慶朝順（同二歳）



土地の人間に、ビトンの共同墓地名を聞きましたが、知らないとの返事。ただし、「Perkuburan depan INKOASKO（インコアスコ工場前の墓地）」と言えど誰でも知っているよ、との事。

インドネシア版吉四六ものがたり

PT SINAR ABADI CEMERLANG

吉田全志

どこの国にもあわて者は居るもので、この物語は小生スマラン駐在当時のもので、スマラン基地よりアラフラ海まで150トンの底引き漁船でえび漁業をおこなっていた乗組員のお話です。

その男機関部員として、小生も面接に立会い採用した一応工業高校出の経験者。しかし日本人機関長の話によりますと、まさにひどいあわて者、機関室の昇降ばしごをふみ外すことは当たり前で、ときにははしごの上から床に墜落こしを打って動けなくなることもあり、言葉がよくわからない事でのトラブルはよくあることですが機関長の命令でやることはまったくトンチンカンなこばかり、クビするのはかわいそう、そのうち何とかなるだろうと使っていたのですが、さすが皆の笑い者。ボド“とよばれていました。

さてこのボド君乗り組みのスマラン5号船が三ヶ月にわたるアラフラ海での操業を終えてスマランに帰港ちゅう東ジャワ、マドウラ島の北を航行中、ボド君0時—4時のエンジン当直で交代前の3時30分頃船尾のトイレにいったのですが、このトイレ木箱をぶらさげただけのものですが、雨のときはこまるのですが、普通は至極快適で乗組員はよく利用したものです。

ボド君 なにを間違えたかトイレの箱に足をふみいれたつもりが、何もない木箱の外、あっと思ったときはすでに遅く海のなかに “ドボン”。

“オーイ、オーイ待ってくれ” 助けてくれ “呼べど、叫べど、乗組員は 明け方の深い眠りに聞こえるはずもなく、甲板当直は船橋でまったくわからず、時速10マイルの船、無情にもあつというまに遠ざかってしまった。幸いチラチャップの小さな漁船乗り荒海のインド洋落ち泳ぎはたっしやだったので、ボド君仕方なくあたりを見渡すとはるか遠うくに、釣り船らしき灯りが見えるので必死でそちらに向かって泳ぎました。幸運にも、その夜はほとんど波はなく、釣り舟がかなり沖まででている穏やかな海況でした。

ともかく、ボド君、やっと一番近い船にたどりつき、
“助けてくれ！船からおちた” (ボド君)

“島は遠いぞ、いくらだす” (釣り舟)

“200ルピア” (ボド君)

“安い、1000ルピア だせ” (釣り舟)

“高い、300 だ” (ボド君)

“だめだ、700” (釣り舟)

“もう頼まない ほかの船にする”

怒った、ボド君 仕方なくほかの船に向かって泳ぎ、やっと交渉成立、船に載せてもらって 小休止 ?????

もともと、当時ボド君のサラリーは4500ルピア (月額)。米が1kg 20ルピア、ガソリン1リットル18ルピア。でしたから、人命救助に金を要求するのも変ですが、いくら地獄のさたも金次第でも、300ルピアが高いのか、また安いのか乗組員の意見はいろいろでしたが、まったくあきれてしまいました。
(後日談)

さて スマラン5号船は、4時の当直交代時間となり、新しい当直がボド君をさがしましたがどこにも見当たらず、もしやと、船尾に行ってみるとボド君のサンダルが片ほうだけトイレの横にある、あのあわてものやはり、海におちたに違いないと、日本人船長に報告、あの馬鹿者が、船をもどせと、U ターン、戻ることはほぼ1時間ライトを点滅させている船にちかずくとボド君がいたとゆうわけです。

ボド君、船長にはこっぴどくしかれたが、何とか幸運にも命拾い。
この話、嘘のような本当の話ですが、ボド君、スマラン5号船に乗り移り、最初の船の方に向かって、馬鹿野郎！と叫んでいたところを見ると、釣り舟とのやりとりもまんざら作り話とはおもえないとの船長の後日談。
その後、このあわて病患者、治療は難しいのか、またまた機関室のはしごから落ちて、1ヶ月休むことになったのは後の話です。

それにしても、人情に厚いネシヤ人の物語が多いのに、こんなこともあるのですね。

黄泉の吉四六氏、この話を聞けば、冗談じゃないそんな馬鹿のオッチョコチョイといっしょにされてたまるかと思えるでしょうが？



アルー島、密林の怪

PT SAC 吉田全志

昔から、雪の吹雪で道に迷ったら同じところをぐるぐる回るとの話を聞いていますが、雪にあまり関係のない九州育ちの私には、よくわかりません。これからの話は、むかしから真珠の島で有名なアラフラ海に浮かぶアルー島で経験した、熱帯雨林のなかでのお話です。

1971年より1983年まで続いたスマランのえび事業を閉鎖、翌年スマラン当時の、130名のネシア船員と5名の日本人船機長共にアルー島、ベンジナプロジェクトに移って間もないときのことでした。

天気の良い日曜日、プロジェクトから約8km南にあるという鍾乳洞を見に行こうと有志をつのり日本人3名ネシア人船員12名で出かけました。アルー島はせいぜい海拔100m程度の低い平らな島で東側はほとんど北から南までマングローブの林で西イリアンとの間のアラフラ海に、西は一部マングローブと椰子の林、南は熱帯雨林と雑草の生えた丘で水深3000mのメバチマグロで有名なバンダ海に面しています。

またこの島は北西から南東に3本の20トンぐらいの木船が抜けられる運河と中央に縦横にはしる小さな運河に寸断されています。ある時ソロン基地のえびトロール船の船員が船外機つきボートで運河に入り出口がわからなくなり3日行方不明になったこともありました。この島のたくさんの運河とマングローブの林が、西イリアン沿岸の湿地帯一面のマングローブの林とで、アラフラ海の約5百隻におよぶトロール船により漁獲され日本、中国、タイに輸出される年間2-3万トンのえびの温床となっている訳です。

さてわれわれ鍾乳洞探検隊？、は午前8時にプロジェクト基地を出発、約4kmまでブルトザーで作られた、湧き水の小さな池までの道を経て、けものみちにはいりました。この道は、650人のプロジェクト居住者の家と20トンのえびトロール船の材料となる木を近くから切り出しているうちに、4kmもおくまで進んでしまったという訳です。

このけものみち、さすがにそれまでとちがって、20mから30mぐらいの熱帯雨林、薄暗く、進むうちにまったく方角は分からなくなりました。とちゅう

5 mもあるニシキヘビの死骸に驚いたり、ぎゃーぎゃー、きたない声でなくインコ、ビュー、ビューと笛を吹くような野生の鹿の鳴き声を比較的ちかくで聞きながらすすみました。けものみちは、熱帯雨林のなかで、あまり日光が下まで届かず雑草や小さな木が育たないので、歩きやすい道でした。

地図で見る限り簡単そうだったので現地の道案内など必要ないと考えのんびり出かけたのですが、なかなか簡単にはいかずコンパスもなく、熱帯雨林のなかに入るのがいかに危険なことか好い教訓になったのはあとの話です。

私たちは、一応ジャワ人を先頭にし目的地らしき針路を右傾斜の道を斜めにとりすすみました。探険隊一行 15 名はワイワイ、ガヤガヤ、とにぎやかに進みました。約 1 時間小さな運河に出会い小休止、それからまた同じような林の中を進むこと約 30 分後、また小さな運河に出会いました。

“それにしてもかなり歩いたぞ、ぼつぼつ着きそうなものだが”、と日本人機長。
“あれー、この運河さっき渡ったのによく似ているが” 誰かがゆびさす下流に下りてみると、なんと、やはり 30 分まえのものでした。

“そんなバカな、どうして元に戻るんだ、馬鹿の、方向オンチだなおまえ” と日本人機長

“それにしても、なぜ??? しよげている、先導のジャワ人の船員だけでなく全員キツネに化かされたような顔でした。

“よし、今度は俺が先導する” と小生。

慎重に地図で検討の結果、目的地の鍾乳洞は次の運河の手前で小高い丘の上。現在位置より左方向は、ゆるい傾斜の上り、右は少し行くと、かなり急なくだりで、低い木が密生しやがてマングローブの林となっていました。

さっきは、ゆるい左の傾斜を上って丘に続くと思われた目的地を目指したがこんどは、むしろやや右の方角に向かおうと、方針をきめ、小生が先導しました。相変わらずまだ太陽は見えないものの、昼過ぎで位置はたかく、方角はまったく分かりませんが、たかだか幅広いところで 2-3 km、方角には小生、自信を持っていたので、今度は大丈夫と、それでも慎重に進みました。

周囲は変わらず続く、高く薄暗い熱帯雨林、ときおり、野生の鶏でもいるのか、がさがさと落ち葉をふむ音、ビュービュー、と野じかの鳴き交わす声はきこえていました。

“あの鹿、まるで俺たちに付いて来ているようだな” とはジャワの船員。

もともこの島は、オーストラリア大陸とは陸続きだったため、ニューギニアを含めてほとんど同じ動物がすんでいます。ダチョウ、ワラビー等のほか、いのししはたくさんいるようでした。小生、乾季の日曜日にはよく一人でブルトウザーの作ったみちを湧き水の池まで、散歩したのですが、いのししの群れや、子連れ、に何回かであいました。後の話です。

天候は相変わらずうす曇りで、すでに午後 3 時をまわりましたが、太陽の位置はつかめず目的地の方角はわからないまま、カンをたよりに進むことまた約 40 分、結果はまたまた、同じ運河に逆戻り、“いったいこの島、どうなってるんだ、俺たち” ブラックマジック”にかかったのかな、ジャワの船員は青い顔で、全員がへたへたすわりこんで、しばらくは声も出ない状態でした。

“今日はこれで中止だ、帰ろう” 昼用に準備した食料はパンと飲み物だけで、腹はへるし、日頃あまり歩くことのない船員たち、くたくたになって、やっと暗くなってプロジェクトの宿舎にたどりついたのです。

すでにスマランで殆ど 8 - 10 年、訓練された船員たち、日頃、船上では全て船長、機関長の指示に従う統制のとれた連中ですが、陸に上がっても同じであまり自分の意見は出さず、先頭から、最後尾まで、上司の指示どおりに乱れず進んでいったことも、後で考えると逆効果となって、二回も同じ運河に出る結果となったのかもしれない。

翌日、午後プロジェクトの総指揮者のスン氏の呼び出しで行ってみると、プロジェクトの所属する村の村長という老人を紹介され、“吉田さん この住民にとっては、この島は独立の自分たち村人たちの国のようなもの、自分たち部落民以外は全て、外国人、それにもともとは人食い人種、うまそうな、日本人、と少し黒いけど、まだましなジャワ人がやってきたと、連中 15 名の探険隊?? の後になり先になり、4 - 5 名、が野生の鹿の鳴き声でれんらくを取りながら、すきあらばと弓矢と、山刀【バラン】をもって、付けていたんですよ”

“まさか、本当ですか” と 15 名全員、特にジャワの連中、青くなって互いの顔を見合わせびっくり。

“あの鹿のなき声、そうだったのか、ずいぶん近いし、そういえば最初から最後まできこえてたなあ” とジャワの船員。

“君たち、椰子の実をとるとか、木を切るとか、悪いことをしなかったのがよかったのです、運がよかった、今度行くときは、必ず、前もって報告してください。”

散々脅され、とんでもない、2度と行かない、2回も同じ所をぐるぐる、回ったのも、奴らのブラックマジックに違いない。とジャワの船員たちは以後二度と山に入ることはありませんでした。

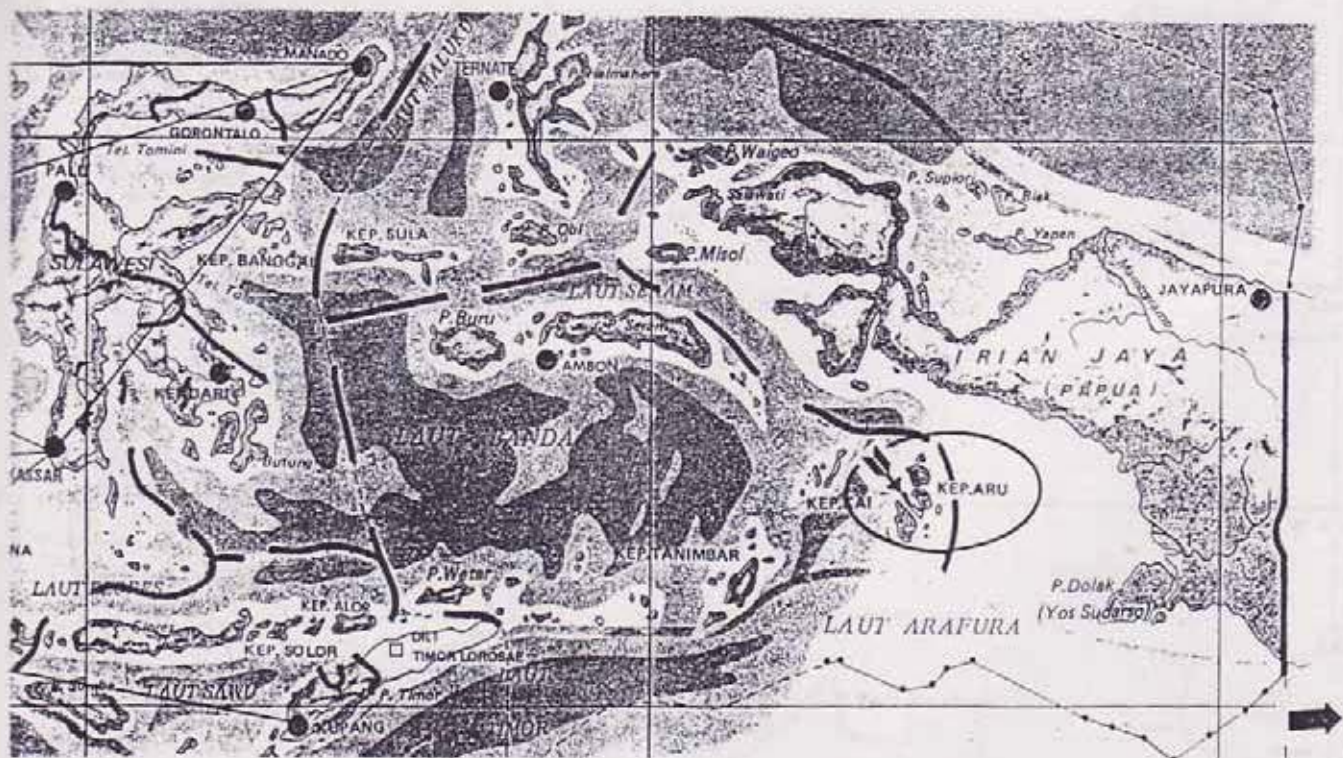
“あの矢じりには、毒がぬってあり、いのしし、鹿を倒すのに使います、毒矢に当たったら治療方法はないですよ、と村長。

“うーん、まさに、西部劇のインディアンだ。やめた、やめた、こんな所で死にたくない。”

さすがに日本人の機長も、おどろくばかり。

その後、しばらくして乾季の終わりに何度か湧き水の池に、一人で散歩に出かけましたが、鹿の鳴き声を聞くこともなく、親子連れのいのしし、野生の鶏、うずら、等には時々出会いましたが、プロジェクトの司令と、村長からの指示があったためか、至極平和で、問題はありませんでした。

もっとも、この報告を受けたアルー島の郡長、ポリス、陸軍、検事、等の通達が各村長にいったので、手出しはできなかったものとおもわれます。また、当時は食料不足で休暇までの一年のあいだは栄養失調で、痩せてしまい、われながら肉付きは、悪くどう見ても、美味そうではなかったはずだと、思い出してはみんなで、大笑いしたものでした。



アルー (Aru) 島中央付近

運河

プロジェクト (冷凍エビ)

K O B R O O R

MAIKOOR

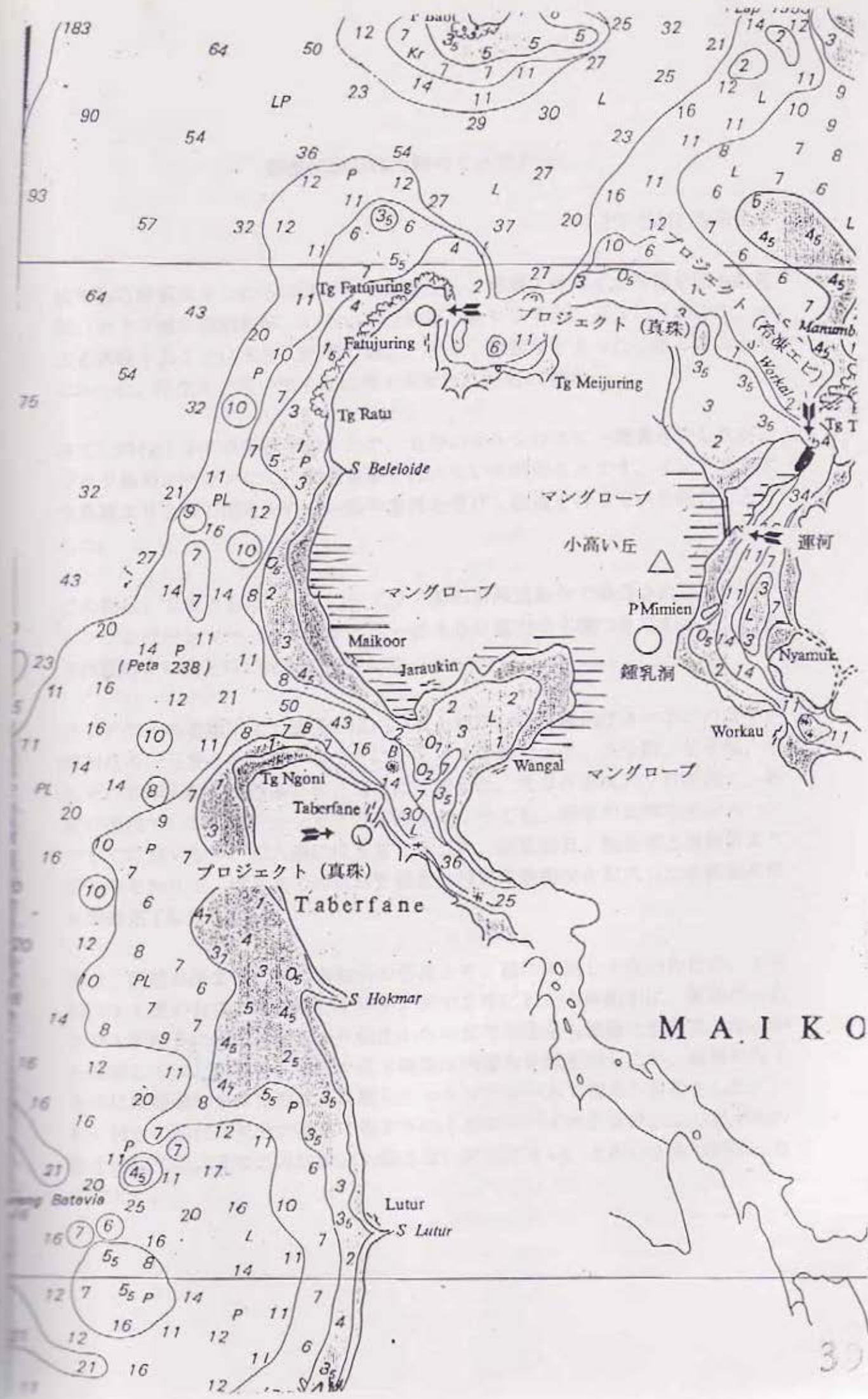
K O B A

T R A N G A N

B a u n

Work





怨霊に祟られた船のミステリー

PT SAC 吉田全志

船やある海域にまつわるミステリーは昔から、黒潮に乗って太平洋を回る幽霊船、カリブ海の高賊船等、いろいろな物語がありますが。どういうわけか、小生も体験することになり、死者の怨念、とか 怨霊などまったく信じたこともなかった、小生も、思い出す度に考えさせられたものです。

さて、時は1970年後半のことで、七号のタルシウスに一部書きましたが、ジャワ島のスマランにて、海老事業を行っていた時のことです。インドネシア全魚連より3隻の海老トロール船の委託を受け、改造を行っていた時のことでした。

この船は、3隻ともにファイバーグラス製の台湾造船所で建造されたもので、エンジンはヤンマー、とキャタピラーの400馬力の主機つきでしたが、あまり性能のよい船とはいえませんでした。

まずテガルの造船所にて改造にはいりましたが、資材調達はスマランのほうが便利なので3隻とも回航することにして、1号船を小生、2号船、3号船、それぞれ日本人船長が指揮を取ることにしました。テガル港は入り口が浅く、砂泥の遠浅でいくらドレッジャーで航路をつくっても、毎年の北西のモンスーンですぐに浅くなり、出入港には苦労しました。回航前日、船長達と造船所よりボートをかりて、港外までの航路を調査、浅い危険箇所を記入した水路図を作り準備完了しました。

実は、回航が決まった日に造船所の所長より、誰にも話してないのだが、1号船は11隻の台湾の拿捕船とサマリダで2年にわたる係船中に、新婚だった台湾人の機長に本国の新妻より船主からの留守宅送金も途絶え生活できないから離婚してほしいとの、手紙を見て機長は何度も手紙を出したが、返事がなく最後に離婚通知を受け取り、悲観してエンジンルームで首吊り自殺をした、いわく付きの船だ。充分に注意するようにとのアドバイスを受け、よし私とその船を回航する、そのことは誰にも話さないでください。とのいきさつがあったのでした。

さて、当日午前八時の満潮時まず2号船が先に出港無事に狭い港門を通過し沖合に待機とのSSB連絡をうけ、次に小生の1号船が港門にさしかかり、かねての予定通り全速前進を命じて浅瀬の通過を図ったのですが、

“フルアヘッド”【小生】

“フルアヘッド サー”（復唱、1等航海士、テレグラフにてエンジンルーム連絡）

程なくエンジンルームよりボイス連絡あり、

“船長エンジン停止、スタートできません”（エンジンルーム）

“ばかもん！すぐスタートさせろ、座礁するぞ”（小生）

あたふたと機関長がやってきて

“だめです、船長 エンジンがかかりません”

“どうしたんだ、なぜスタート出来ないんだ”

“分かりません、エンジンが重くて駄目です、船長”

エンジンの止まった船は、どうにもならず、港門のもっとも浅い所で座礁してしまった。

“1号船、座礁、3号船は本船の、左舷がわを気をつけて通過してください”。

“3号船、本船より造船所に、タグボートを頼みます、本船エンジンスタート不能、曳航準備願います、”（小生）

“了解”（3号船長）やがて後から出港した3号船は、ぶじ港門を通過。

事情を知った2号船船長の、早い処置で、昨日念のため 待機手配してあった、タグボートがやって来て、苦闘1時間半後、なんとか脱出、3号船に曳航され沖合にでたのは、すでに午後の3時すぎでした。ほっとする間もなく、小生も機関部員ともに、エンジンルームに下りて、プロペラシャフトと主機のクラッチ着脱確認のうえ、主機のターニングを試みましたがまったく動かず、起動は不可能でした。（ちなみに、1号船機長、一等機関士、ほか全てネシア人でした。）

夕食後一休みして、3号船日本人機関長のアドバイスで、クランクメタルをはずして調べましたが、焼きついた様子もなくとくに異常は認められませんでした。ともかく、翌日無事にスマランに入港、予定の造船所に係船しました。

さっそく、改造係の3号船の機関長がやって来て、徹底調査にはいり、1号船機長とともに調べましたが、とくに異常なく、主機をスタートさせたところ、なんとあれだけ、重くターニング出来なかったクランク軸がくるくると怪く動き、スタートも一発で掛かるとは、??? 1号船の機関部員、そして苦労した乗組員は 声もなくがっくり。

「うーん、それにしても、あれは一体何だったんだ」

“お前らが、あほなんじゃ、馬鹿者”と 日本人機長。

“でも、なぜなんだ、納得いかないなあ、”と小生。どう考えてもあの時点で、ストップした主機と動かなくなったクランク軸、今いとも簡単に掛かった主機、納得できない事ばかりでした。

そう言えば、あの時テガル造船所長が、この船団サマリンダより回航途中 1 号船がコタバル沖で原因不明の主機故障で 3 号船に曳航されてテガル港まで来たと言っていたが、そのときは気にもかけなかったけど、これで 2 回目ではないかそれも同じ原因不明の主機故障???? やはり台湾の機関長の首吊り自殺事件と。。。そんな馬鹿な、と思いながら何となく背筋が寒くなったものでした。その後、スマラン造船所での改造は各船とも、順調にすすみ最後の主機と補機の据付基礎の補強工事に入った時、またまた 1 号船に 考えられないような火災事故が発生したのでした。

ともかく、各船とも、台湾出来のためか全体に雑な造りで船体振動がひどく、船橋、特に前甲板上部がとくにひどく、書物が出来ないほどでした。主機、補機ともにファイバーグラス製のため、基礎のボルトが全部ゆるみ、ガタガタの状態、鉄板補強の必要があり、また、海老トロール船に最小限必要なトライネットウインチもなく、かなりいいかげんな船でした。冷凍機にも能力に問題ありで、急速凍結室、保冷室、共に温度が高くいい製品が出来るか問題でした。とりあえずオーナー側の意向で、必要最小限の改造を急ピッチで進め、エンジン関係を 1 名の日本人機関長、甲板部改造は 2 名の日本人船長が、それぞれ担当し 3 隻の改造に当たりました。

改造は順調に進んでいたある日のこと、午後の 3 時ごろ、小生、一人の日本人船長と、造船所から 1 キロぐらいの事務所で打ち合わせ中、港内の船に火災発生、うちの船らしいとの連絡を受け船長とも造船所に駆けつけると、なんと、改造中の 1 号船が船橋下の船員室付近から、真っ黒い煙を噴出しながら浮かんでおり、船員、造船所の連中が必死の消火活動にあたっているではありませんか、“ あー 、又一号船のトラブルだ”と船長。

折から、南東のモンスーンに流され反対側の倉庫岸壁に漂着、造船所の要請で駆けつけた消防自動車 3 台が直ちに（われわれには、のんびりとしか、見えませんでした）消火に当たりましたが、グラスファイバーの燃える火の勢いは物凄く、火勢は一向に衰えるどころか、船橋まで真っ黒な煙に包まれてしまい

手のつけられない状態でした。一人の船員の勧めで、港内に居たブルタミナの消火艇にきてもらい、海側から消火にあたりました。結果的には、これが一番効果があり徐々に火勢は衰えていきました。しかし内部の船員室、倉庫は、なかなか消火がはかどらず時間が掛かり、何とか鎮火したのは夜の十時過ぎでした。

火災はエンジンルームから発生、船員室、急冷室、倉庫、船橋と殆どが全焼、焼けただれた船体と船橋、折からの南東のモンスーンで雲ひとつ無い夜空に、十三夜頃の月の光に浮かぶすがたはまさに幽霊船で、テガルからスマランまで苦勞してここまで改造し、年間 60 トンの海老漁獲を予定していた全漁連、期待の船の変わり果てた姿に、必死に八時間もの消火作業に当たった私達は疲れと空腹も忘れしばらくは呆然と立ち尽くすのみでした。

翌日、早速原因調査に当たりましたが、火災に至った原因は、甲板上でのアセチレンガスによる鋼鉄製パイプ切断中の火の粉が、エンジンルーム内の、補機の基礎補強工事中の清掃に使っていたガソリンを含んだ、布切れの入ったバケツに引火したのですが、原因と火災発生の確率は非常に低いもので、当時甲板、機関室ともに日本人船機長が立会いで十分注意していた事から見ても、あり得ない事故、との意見でした。

しかも、エンジンルームでの火のまわりは非常に早く、あっという間に、火の海となり、作業していた日本人機長含む 7 名の機関部員が脱出するのがやっとで、消火作業などまったく出来なかったとの報告でした。そして、この事故は全漁連と造船所の間で裁判沙汰となり小生とエンジンルームで作業中の機関長は、何回か裁判所に参考人として出頭することになったのですが、1 号船の方はスマラン港外に、廃船となって、哀れな姿をさらしていましたが、その後の消息は不明です。

それにしても、コタバル沖での事故を皮きりに 2 回に亘る原因不明のエンジン停止事件、最後の火災事故によりついに一度も海老事業に従事することなく廃船となった 1 号船。

台湾から、サマリダに回航拿捕され、2 年間に亘る係船、台湾の船主の留守家族送金停止、新婚の機関長首吊り自殺事件、一連の事件の全てを明かした小生の話しに、関係者全員がしばらくは、声も無く息をひそめていましたが、これは起こるべくして起こった事故でたとえ、あの火災を運良くぼやで消し止めて

も、次に必ず大きな事故があった筈だ、人身事故に至らずおわったのは、せめてもの幸いだったと、日本人船機長含め関係者全員の意見でした。

その後、2号船、3号船は、ともに順調に改造は進み、たいした事故も無く、約3年に亘って海老事業に従事し、西イリアンのアラフラ海で操業しました。

さて、これを読まれた皆さんは、この一号船に起こった、一連の事故を、不幸な機関長の“怨霊の呪い”と見るか、単なる解明容易な事故と見るか、いろいろでしょうが、少なくとも、小生を含め関係者全員には背筋の寒くなる事故だった事は確かです。



北スラウェシ州ビトン草思

りんかい建設ビトン作業所
青山秀夫

北スラウェシ州ビトンにはビトン港開発工事の為、2001年6月に赴任しました。ビトン、マナドはインドネシアでありながら他の地域と何処と無く雰囲気が違う感じを初めに受けました。この雰囲気は、民族・宗教・歴史的背景等が絡み合いジャワとは違った独特の雰囲気を作り出していると思います。

当地は第二時世界大戦当時に日本軍が駐留していた事もあり、防空壕・慰霊碑等が Air Madidi, Girian に残っています。当地赴任中に、2001. 9.11WTC テロ・そして米国の報復ともいえるアフガニスタン侵攻・イラク戦争と世界情勢は58年まえに当地で行われた同じ過ちを繰り返しているように思へ、この地で散っていった日本人を思いながら、改めて人間の“性”のような物を強く感じブラウン管を見入りました。

こと仕事に関しては、ビトン港は非常に仕事がやりづらいと言う印象を持ちました。ビトンは比較的小さな町にも拘らず、各行政機関・出先機関がほぼフルキャビネットで揃っている事情もあり、また、運悪く2002年の地方分権（オトノミ）がスタートした年にも当たった為か、中央行政・地方行政機関のシステムの混乱と重複が“難しい”という印象を強く私に与えたのかと思います。

面白い話、現場に来るインドネシアの役人に彼らの所属機関を聞いても、「自分の所属が今は何処なのかハッキリしない」と話していた事には、今回のシステムの混乱振りが肌で解り、また驚きもしました。今後インドネシアもこの役人達から背筋を但さない事には将来が決して明るい物になら無いのではないかと思います。

既存のビトン港を初めてみた時の感想は、地方港としては非常に大型船・物流貨物量が多い事です。しかし、ジャカルタ・スラバヤ・ウジュンバンダンからの工業製品の供給と半径500km近い北スラウェシ州の物流圏を担う港と聞けば納得がいきます。此処ビトン港の立地条件は、対岸のレンベ島が天然の防波堤になっており外海が時化でいても、この水路に似た地域は風を保っていられる事や、水深が非常に深いと言うメリットが昔からの良港として発展したのではないかと思います。

ビトン市街に目を向けると、市役所から西側が区画整理されていて過去に都市計画に真剣に取り組んだ様子が伺えますが、ここ数年は市街地整備の動きは見受けられません。当時の開発計画事業の意欲を継続していればより良い町作りが出来たのではないかと、少々もったいないような気がします。

私事ではありますが一日の疲れを癒してくれるのは、市役所前通から見る夕日に輝く“マナド富士”です。何気ない風景ですが、日本の富士山を思わせる私の気に入っているビトンの風景の一つです。皆さんも機会があれば一度見ては如何でしょうか。きっと気持ちが落ち着くと思います。

2003年5月29日





インドネシア

ビツン在任中の事と新任地フィジーの事



フィジー

在フィジー 太田隆久

“タルシウス“といえは苦い思い出があります。それは、東海澱粉【株】ビツン在任中で同誌の編集長である川口さんから、再三再四に亘り掲載依頼されましたが、その都度言い訳をしてとうとう最後の確か8号（だったと思いますが間違っていたらごめんなさい）まで約束果たせず申し訳無く、この紙面にてお詫び申し上げます。

私が最初にビツンに仕事で来たのが、確か1999年でその時は、ナママグロの選別担当で六ヶ月ぐらいいました。その間、ウジュンパンダン、そしてフィリップスのダバオ、ジェネラルサントスと亘り歩きました、全てホテル住まいが殆どで慌ただしい六ヶ月のように感じました。

その後、2001年、翔洋水産の仕事で再来ビツン、漁船のオペレイションを1年2ヶ月担当しましたが、毎日忙しく一生懸命で、あっという間に過ぎた感じでした。その間、いろいろな人との、良い触れ合いまた苦い思い出と多々ありました。そしてその後の四ヶ月のビツンは整理のための在任でした。

インドネシアに関して今振り返ると、1988年からバリを基点としてジャカルタ、スラバヤそしてウジュンパンダンと約11年間過ごしました。ひとつ、ひとつ話せば長くなりますが、本当にたくさんの良い思い出、そして苦い思い出でいっぱいです。

昨年の5月久し振りに帰国して一週間後にA型肝炎と診断され、神戸の労災病院に入院するという最悪の状態で、がっくりしてしまいましたが、今は回復、また新任地で頑張っております。

私がここフィジーに来て、かれこれ10ヶ月になりますが、今日は、私の見たフィジーについて少しお話ししたいと思います。

フィジー諸島は、39の大小の島々からなり、未だ部落制度と言うのが政治については現存します。

フィジー人は、男女とも体格がヨーロッパ人なみに大きく、なかには日本の相撲取りのような巨人もいます。そしてオリジナルのフィジー人は皮膚は黒く、髪はちじれっ毛です。性格は明るく、昔の名残で失業しても部落に帰れば誰かが、食べさせてくれると言う昔の風習が残っているのが原因だとも思います。

飲酒についてはビールの歴史が浅く、限度を知らないためか、よく酔っ払いをみかけます。

南太平洋では、このフィジーは中心的な国で、日本大使館も近隣の島々を管轄しています。ちなみに、各国の大使館、領事館があり、いろいろな意味で新旧入り混じっています。

最近は特に中国人が増えて、フィジー人、インド人について3番目の人口を有しています、東南アジアは、どこに行っても華僑が居ますが、ここも将来は同じになるのでは、

話しは、また少々それますが、この島には毒蛇がまったく居ません、英国統治領だったころ現地フィジー人労働者の仕事がまったくはかどらず、同じ英国統治領だったインドからサトウキビの作業労働者を移民させたのですが、なにしろ毒蛇が多く彼ら作業をボイコットした為、やむなくインドからマングースをつれて毒蛇を退治してしまったと言う訳です。フィジーの山、平原、勿論ゴルフ場にも毒蛇はまったくいません。

またまた話しは、変わりますが今年の6月後半より当地で南太平洋のスポーツオリンピックゲームが始まります、5月半ばより各選手団が入国するので賑やかになります、皆さんも、チャンスが有りましたらぜひ、世界で一番早いあさを迎えるフィジーにきてください。

それでは改めて、北スラウエシ日本人会の今後のご発展を祈ります。

2003年4月29日。

上記、原稿は本人よりの依頼により、多少改訂させていただきました。(吉田)





日本語弁論大会

マナド国立大学日本語講師 新田洋子

北スラウェシ州は大変日本語教育が盛んな地域の一つで、約 50 の高校で日本語の授業が行われています。高等教育機関では、マナド国立大学とマナド外国語大学の二大学に日本語専攻のプログラムまたは学科があります。その他、授業科目の一つとして日本語教育が行われている機関も数校あります。その日本語学習の成果の発表の場として、日本語弁論大会が毎年開かれています。今年は 2003 年 4 月 4 日に高校生日本語弁論大会北スラウェシ地方大会が開かれ、19 の高校の代表がスピーチを競いました。また大学の部のほうは 5 月 24 日にマカッサルでスラウェシ地区日本語弁論大会が開催される予定です。そして、それに先駆けてマナド予選が 5 月 3 日に行われました。予選にはマナド国立大学の学生 11 名と、マナド外国語大学の学生 5 名が参加しました。この予選で上位に入賞した三名の学生がマカッサルに行きスラウェシ大会に出場します。

予選の結果は

- 第一位：ダンチェ・ナウィパ 「ごくらくちょう」
第二位：ダイネ・トゥラル 「マナドの埋め立て」
第三位：マリアム・トリウォギ 「ストレス」 でした。

弁論大会では、日本人会の方々に弁論の審査員として毎年協力していただき、大変ありがたく思っております。『タルシウス』の紙面をお借りし、皆様にお礼を申し上げます。またマナド予選で入賞した三名のスピーチを『タルシウス』に載せていただくことになり感謝しております。これからも熱心に日本語を学んでいる学生たちを応援していただけますようお願い申し上げます。

下の写真はマナド予選の出場者と審査員の皆様です。もう一枚は入賞した三人で、右からダンチェさん、ダイネさん、マリアムさんです。





追記：

マカッサルで行われたスラウエシ大会でも、マナド国立大学3年正のダンチエさんが一位になり、全国大会にスラウエシ代表として出場しました。ダンチエさんは「ごくらくちょうが住めるように森を守ろう」と力強いスピーチをしましたが、残念ながら入賞はできませんでした。

「ごくらくちょう」

マナド国立大学3年 ダンチェ・ナウィバ

みなさんはごくらくちょうを見たことがありますか。世界中でごくらくちょうはインドネシアにしかいません。「インドネシアのどちらの島にいるかな。」と外国人がたずねます。こたえは「インドネシアの東にある島パプアにいます。」

昔からごくらくちょうは有名な鳥で写真やはがきやテレビなどで見られます。そして、観光客と研究者たちがパプアへごくらくちょうを見に来ます。どうしてこんなに有名になっていますか。それはとても美しいとりだからです。ごくらくちょうはインドネシア語ではチェンデラワシといいます。パプアの言葉ではエPPERワード・カベドーといい、金色の鳥という意味です。

この鳥は小さいけれども、尾がとても長くてくちばしも出ています。そして、尾は金色でくちばしが赤いです。全体が金色です。ごくらくちょうは「コォーコォー」と鳴きます。その声は遠いところまで聞こえます。ふつうごくらくちょうは森の中の大きい高い木の枝から枝へあちこちとびまわってくらしています。食べ物の木の実をさがしたり、仲間の鳥たちとあそんだりするのです。でも、高い木のない林ではそれができません。ごくらくちょうには高い木のある森が必要です。

みなさん、この鳥はパプアの文化と深い関係があります。昔からパプアでは若い人がごくらくちょうの夢を見ると、次の日森へかりに行ったとき、ごくらくちょうをつかまえることができると言われています。そしてその若者は将来村人のためにいろいろな問題を解決して、村の人から尊敬される村長になると言い伝えがあります。それで、パプアでは村に問題が起きた時ごくらくちょうのかんむりをかぶって、問題を解決します。またパプアで伝統的な行事があるとき、この鳥の羽で作ったかんむりをかぶらずかぶっておどります。

でも、みなさん。残念なことに今ごくらくちょうの数がへっています。この鳥の住んでいる森の木をきりたおすので、鳥が住める場所が少なくなっています。畑を作ったり、材木をとるために人々は木をきります。パプアでは森の木をやいて畑を作ってやさいをそだてます。やさいがとれると、また森をやいて新しい畑を作ります。それで、ごくらくちょうの住める森はどんどん少なくなっています。そのほかには鳥を市場で売ったり、かざりにしたりするために鳥をつかまえるからです。こんなことをつづければ将来はどうなりますか。

私たちはごくらくちょうが住んでいる森の木をきりたおすことをやめなければなりません。私たちはごくらくちょうが住めるように森を守らなければなりません。伝統的な行事ではこの鳥のかんむりをかならずかぶります。でもかんむりを作るために鳥をころせば、このパプアにしかないただ一つの鳥はいなくなってしまう。パプアの大切なたからものがなくなってしまう。これからは生きていくごくらくちょうをころしてはいけないと思います。このとてもきれいなごくらくちょうがいつまでも見られるように。



「マナドの埋め立て」

マナド外国語大学3年 ダイネ・トゥラル

皆さん、こんにちは。

今日、私はマナドの海が埋め立てられていることについてお話したいと思います。このテーマを選んだのはマナドの町が大好きで、マナドに住んでいる人々と力を合わせて一緒にマナドの町を守りたいからです。

マナドはもともと、ウェナンという名前で、13世紀から現在のマナドという名前を使っています。マナドの西側には Boulevard という海岸通りがあって、以前は夕方になるとマナドの人々はそこに集まってきました。ピサン・ゴレンや、サテ・アヤムなどを食べながら夕日が海に沈む景色をぼんやり見ていると、何もかも忘れてのんびりした気分になることができました。残念ながら、6年前、スーパーやホテルを建てるために、そのきれいな夕日が見えるマナド湾の埋め立てが始まりました。

マナドの人口は約55万人ですが、新しいスーパーや店があちらこちらに建てられています。そして Boulevard 通りぞいの海岸をすべて埋め立てて、もっとたくさんの店を建てようとしています。新しく建てられた店の中で営業しているのは50パーセントぐらいです。こんなにたくさんの店を建てても、買い物をする人口は変わりません。営業がうまくいくのかどうかわかりません。また、わざわざ建てた店が長い間使われないで、閉まっているのは損じゃないかと思っています。

そしてもっと心配なことがあります。この埋め立て工事は、マナド湾の沖にあるブナケン島のサンゴに影響があるかもしれません。ブナケン島のまわりの国立海洋公園がこわれてしまったら、マナドに来る観光客ももちろん少なくなってしまうと思います。それだけではなく、マナドの観光収入が減ってしまうと思います。皆さんの意見はどうですか。実は、マナド湾を埋め立てる前にたくさんの人々が反対したそうです。その人たちはマナドの新聞投書欄にその意見を書いてのせましたが、結局、マナド湾は埋め立てられてしまいました。

私はマナドから20キロはなれたトモホンという町の出身です。トモホンの友だちもみんな埋め立てのことを残念に思っています。私と同じ世代の友だちです。マナドに住んでいる人、特に昔から住んでいる人々はもっと残念に思っていることでしょう。マナドに来たことがある外国人たちも残念だと言っています。私たちがどんなに反対しても、マナドはもう以前の状態には戻りません。本当に残念です。

マナドだけではなく、ほかの地域でも、同じような問題があると思います。みんなで環境を守っていくには、どうしたらいいのでしょうか。ゴミをあちらこちらに捨てないことはもちろんです。そして、自分たちの町の自然や環境にもっと関心を持った方がよいと思います。そうすれば私たちだけでなく、観光客や、次の世代の人々も地域の自然の美しさを楽しむことができます。

地域の環境や自然に関心をもって、みんなでインドネシアの自然を守っていきましょう。ありがとうございました。



「ストレス」

マナド国立大学3年 マリアム・トリウォギ

今の世界と昔の世界は違います。学問と科学がどんどん発達して便利な生活になりました。でも、今の世界の人間はきょうそう社会を生きなければなりません。私たちは生きるために必要なものを手に入れなければなりません。そのためにはきょうそうがあります。意識する、しないにかかわらず、さらに生きることが難しくなっています。それがストレスを生みます。今、ストレスは社会の大きい問題になっています。

ストレスはインドネシア語で小さいきちがいと言われていています。どうして小さいきちがいと言いますか。ストレスがある人はひとり言を言ったり、ぼんやりとした目をして、かなしそうな顔をしています。それはきちがいの人と同じようです。私たちの上に大きなにもつをのせられたような気持ちになって、私たちの生活はおびやかされます。

ストレスは誰でもかかるかのうせいがあります。身分やねんれいを区別することをしてしません。老人から若者までストレスがあります。原因はいろいろで各人違います。私は大学で勉強するために下宿で生活しています。両親と遠く離れて生活しているので、問題がとてまたくさんあります。たとえば大学では先生から宿題がたくさん出されます。そしてこじんてきな問題、たとえば恋人と友だちの問題もあります。たいへんなんです。私の友だちは両親がりこんしています。両親からあまり愛情をもらうことができません。それでストレスになっています。家族の生活にせきにんがある親たちも同じです。家族に必要なものを買うお金を準備しなければなりません。このような問題を心配してストレスになります。

ストレスになると頭が痛くなったり、胃が痛くなったりします。病気になる人もいます。ストレスからにげるため、おさを飲む人もいます。まやくを使う人もいます。でも私たちはストレスにまけてはいけません。ストレスはかいしょうしましょう。

人によってストレスにかかったときの解消法はいろいろあります。私はストレスの時とてまたくさんどんどん食べます。そしてストレスをかいしょうします。ストレスの時には食べることを寝ることをのぞいて何もしてません。大学のじゅぎょうや家の仕事にもきょうみがおきません。お金がなくなるまで食べ物を買ってどんどん食べます。時間をむだにします。でも気持ちはかるくなります。

みなさまはどうやってストレスを解消していますか。

もし、今みなさまが重い問題に出会って、その解決方法がなくてストレスがたまっても、ぜつぼうしないでください。神さまは私たちをくんれんするために問題をあたえます。大切なことは問題をさけないで、もし問題に出会ってもひかんとてきに考えないことです。すなおな心で解決方法が見つかるように神さまにおいのりして、静かな心で熱心に方法をさがしましょう。ストレスで悲しい顔をしないでください。問題があっても、スマイルをしてみましょう。ストレスにまけないでください。



日本語弁論大会全国大会を伝える新聞記事

(じゃかるた新聞)

全国日本語弁論大会を開催

きょう、ホテル・サリバンで

日イ友好祭の一環 第32
回全インドネシア日本語弁
論大会 (国際交流基金ジャ
カルタ日本文化センター、
元日本留学生協会共催) が
5日午後1時10分から、中
央ジャカルタのホテル・サ
リバンバシアイツク4階ホ
ールルームで開催される。

今年も、全国7都市の地
区大会を勝ち抜いた大学生
や社会人ら14人が参加。
「田舎の生活」「母という存
在」といった身近な話題を
扱ったものから、「自然と
の調和」「麻薬」など、イ
ンドネシアが抱える社会問
題など様々なテーマで、日
頃の日本語学習の成果を発
揮する。また、ジャカルタ

祭りの会が、よきこいりー
ラン踊りを披露し、大会を
盛り上げる。

審査員は駐インドネシア
日本大使館の秋元義孝公
使、インドネシア日本友好
協会の浜田慎也・運営委員
長、ナショナルコーベル社
の堀川修三社長、日本航空
の長坂博司・ジャカルタ支
店長、元日本留学生協会の
マランキ・氏、ジャカルタ
日本文化センターの安藤一
生所長、藤長おる氏と本
紙豊野靖夫編集長の8人。

国際交流基金では、イン
ドネシアの将来を担うイン
ドネシアの若者の考えや観
点を知り、日伊の文化交流
を深める機会の一つとし
て、多数の邦人の見学を呼
び掛けている。

2003年7月5日付

アステイテイさん優勝

「夢に向かって」論じる

日本語スピーチのナベ
ワンを目指し、全国七地
区の予選を勝ち抜いた大学
生や社会人十四人が日ごろ
の学習の成果を披露する第
三十二回全インドネシア日
本語弁論大会（国際交流基
金ジャカルタ日本文化セン
ター、元日本留学生協会・
ブルサター共催）が五日、
中央ジャカルタのホテル・
サリ・バンパシフィックで
開かれた。日伊友好祭の一
環となった今年は、さまざ
まなテーマを論じた参加者
たちの実力が目押し、「夢に
向かって」と題し、一度や
二度失敗してもくじけず頑
張ることの重要性を訴えた
ジョクジャカルタ特別州の
ガジャマタ大学三年アステ
イテイ・ユニアルテイさん
（二二）が優勝した。

アステイテイさんは、夢
を「人生という旅の行き先
であり、現実を渡る橋」と
例え、夢を実現するために
はさまざまな障害にぶつか
ることを説明。夢を実現す
るための努力については田
を耕すことと例え、三、四
回失敗した場合は、農民が
最良の稲を選ぶように自分
に最も合った夢を選ぶべき
だと述べた。

しかし、一度や二度失敗
してもあきらめない、失敗
の中にも学ぶべきことはあ
るとして、「失敗は若者の

特権ではないか」と来場客
約三百人に訴えた。

一位のジャカルタ特別
州のシムラタ大学三年のフ
エニ・ハリムさん（二二）
は「ニセ日本製品におどら
されるな」という題で、イ
ンドネシア市場に模造日本
製品が出回る理由について
発表した。

フエニさんは、自らの
体験を交え、中国やインド
ネシアのメーカーが「日本
っぽい物を作つたらもちと
たくさんお客様が買ってく
れる」と考え、日本語入り
の製品を大量に生産してい
ると指摘。また、ベトナム

バ・会社を経営する家庭に
日本語のキッズフレーズ
を書かされた経験を披露し
ながら、「日本語が書かれ
ていてもよく確かめてから
買うように」と呼び掛けた。
スピーチの審査は、七分

以内という時間制限。発音
内容のほか今年から審査
員の議長がおるさんによる
質疑応答の時間が設けられ
た。来場客は、故郷のバ
ン州に住む模造島の保護に
ついて、鳴き声などを交え
ながら熱弁を振るった国立
マナド大学三年のタム・チエ
・カウバさん（二二）を推
す声が多かったが、流暢な
発音に加え、質疑応答にき
ちんと答えたアステイテイ
さんらが入賞した。

弁論発表後は、ジャカル
タ祭りの会がよさこいソー
ラン踊りを披露。来場客を
ダイナミックな振り付けや

優勝したアステイテイさん（左端）ら、入賞者（前列）と参加
者たち



曲に引き込んだ。
ガジャマダ大の日本文化
學で日本人学生と話すイン
ドネシア人学生を見て、日
本語を学ぶことを決めた。
アステイティさんは
緊張したが、練習の成果
を十分に発揮できた。日本
人を苦むたぐさんの外国人
との触れ合いを増やしなが
ら、日本や外国の理解に努
めていきたい」と語った。
モスクワ勤務時代を含

め、今回で四回目の審査員
を務めた在インドネシア日
本大使館の秘花義孝公使は
「大会の参加者を含む日本
語を学ぶ若者たちは、日伊
友好発展の架け橋となる中
心的な存在になってほし
い」と激励。また、参加者
のテーマを取り入れながら
ユニークな講評で、来場者
から大きな拍手を浴びた。
優勝したアステイティさ
んと二位のフエニーさん

は、九月下旬に東京で開催
されるASEANスピーチ
コンテストにインドネシア
代表として参加する。二人
には日本航空の長坂博司・
ジャカルタ支店長から東京
往復の航空券、ブルサダの
マランキー氏から出国税目
万ルピアを贈呈された。ま
た、一位から五位までの上
位入賞者に、ナショナルコ
ーベル社の堀川修二社長が
テレビ、ラジカセなど豪

華な賞品が贈られた。
その他の入賞者は以下の
通り。
三位 実顔「プリハルデ
イ・シヤフイトリ」(三
一) 会社員 四位 「自然
の調和」フアティア(二
二) 博士ル・ストモ夫
三年 五位 「Adri」は便
利な言葉 イイス・ヌル・
アイシャ(二二) 一バジャ
ジャラン大三年(敬称略)
(永嶋真人 写真も)



クバン及びビトン港開発プロジェクト

JPC 石野

前言

我々が当地ビトンで現在従事している港湾開発プロジェクトは、実は正式に申しますと標記のように2港の名前が冠されています。これは東部インドネシアの主要港の開発工事をマクロ的発想から捉え、西ティモールのクバン港と北スラウェシのビトン港をワン・パッケージで対応しようとの意向から出たものであります。

下段の「プロジェクトの背景」を読んで頂くとその経緯をご理解願えると思います。

我々が根をおろしているはこのビトンであり、ここの工事に焦点をあてるのが妥当なんでしょうが、資料を分解しますと話が合わないところも生じますので、ここでもワン・パッケージで紹介させていただきます。

プロジェクトの背景

さて、皆さまも感じておられた通り、ビトン港やクバン港のある東部インドネシアは西部インドネシアに比べ開発が遅れており、年々その格差がひらいてきておりました。

この格差の主たる原因は、まずこの広大な東部地域に数限りない島々が点在すると言う地理的特性から来るものでした。それにより、インドネシア総人口の16%にあたる2,900万人を擁しながら、殆どの投資家は経済的効果の観点から東部よりも西部にあるジャワに集中してしまっていました。これはインフラ整備が不十分であったからと言えます。特に、各種インフラの中でも、この地域にとって海上輸送が主要である観点からすればこの関連インフラが重要な要素だったのですが、これが充分ではなかったからです。

インドネシア政府はこの地域の重要性を理解し、REPRITA V (第五次5ヵ年開発計画) から、この地域の運輸・通信網の確立とインフラの整備に最重点を置くことにしました。

これを実行すべく、この国の政府は日本政府にたいし東部インドネシア海上運輸総合近代化計画の調査研究への技術協力を要請してきました。JICAがこれに応え、1992年11月から1994年3月にかけて、東部インドネシア12州において海運、造船、港湾、海

上安全および船員養成の5分野で調査が行われた次第です。

この内、港湾の分野でJICAチームは、1994年から2005年の間に「中クラス」の港湾を17箇所、「小クラス」のものを85箇所この地域に開発することをマスター・プランに織り込みました。その中でも、下記のような観点からビトンとクバン両港が地域の核であり地域経済発展の要とされ、優先順位では第一におかれました。

1. 他の州に比べて、クバン港のある東ヌサテンガラ州とビトン港のある北スラウェシ州は、一人当たりGRDPが低く、また年間成長率も低い。(これの向上が必要である。)
2. 地域人口の規模がその地域の発展への潜在力と開発効果の度合いを計る要点の一つであるが、この両州とも人口はかなり多い。
3. クバン港は東部インドネシアの南端に位置し、ビトン港はその北端に位置していて、立地条件が優れている。つまり、両港は「外洋への出口(Pacific Rim)」となっている。

以上のような観点から、改めてJICAチームがこの両港を主体にして「実行可能性調査(Feasibility Study)」を行い、将来の需要性、施設の企画と設計、それに経済分析も含めて、総合的な観点から「実行効果」の高いことが確認されたのです。

そこでインドネシア政府は、当時徐々に増加しつつあったコンテナを含む海上貨物の取り扱いに対処する目的と、「第六次5カ年開発計画」に織り込まれた両港の開発を達成する意味から、日本のOECD(海外経済協力基金、現在のJBIC=日本国際協力銀行)に借入を申請し、1996年12月4日両港開発にかんする設計施工監理、工事施工、港湾機器調達を含む諸費用の許可がおりた次第です。

プロジェクトの経緯

かくしてプロジェクトに資金がついて出発したのですが、まずは設計調査、設計、施工業者を決めるための入札書の作成までの技術業務を我々「日本港湾コンサルタント(JPC)」とローカルのコンサルタント「ウイラトマン」のコンソーシアム(JWC)で担当官庁である運輸省海運総局から下命を受けたのが、1997年8月でした。

即、JWCで技術業務を開始し、その成果品を元に、紆余曲折もありましたが両港工事をワン・パッケージで施工業者を決める入札が行われたのが2000年6月です。厳しい入札評価をきりぬけて、両工事を入手したのが日本の「リンカイ建設」さんで、現地業者「アデイ・カリヤ」と「丸紅」との共同施工体(ジョイント・オペレーション)でした。

正式着工は、翌年2001年7月18日として、目下鋭意施工中でありまますが、工期はそれぞれ次のように分かれています。

ビトン港工事	2003年10月31日
クバン港工事	2003年9月30日

我々JWC コンサルタント・グループは施工業者決定により、技術業務から施工監理業務に移り仕事を継続して、今日に至っている次第です。

プロジェクト概要

両港の規模を、下表に示します。別添略図を参照しながらご覧下さい。

ビトン港工事	クバン港工事
コンテナ埠頭 L=130m サイドピア L=50m W=40m 5,200m ²	コンテナ埠頭 L=237.8m W=35-40m 9,856m ²
コンテナ・ヤード 52,854m ²	コンテナ・ヤード 21,000m ² オープン・エリア 5,100m ²
取付道路 L=520m	取付道路 L=702m
諸施設 CFS 倉庫 事務所棟 修理工場 発電変電所 給水所 ゲート	諸施設 事務所棟 トランジット・シェッド

(上記数値は、その後設計変更により少々変わっていますが、原数値を引用させて頂きました。)

上記は工事契約の内容なのですが、これのほかに別途契約で次表のような港湾機器の納入監理業務も行っております。この納入業務自体は日本商社「トーメン」さんが入手しました。これらの機器が港にお目見えするのは、今年末頃と思って下さい。

ビトン港	クバン港
1. 荷役機器 Head Truck 3 units Chassis for above, l=12m, 3 units Reach Stacker Crane, 35t 1 unit Forklift, 5t 4 units	1. 荷役機器 Heavy Duty Mobile Crane, 100t 1 unit Forklift, 10t 1 unit Forklift, 5t 1 unit
2. 港湾サービス船舶 Tug Boat (750HP x 2) 1 unit Mooring Boat (80HP x 2) 1 unit Pilot Boat (200HP x 2) 1 unit	2. 港湾サービス船舶 Tug Boat (750HP x 2) 1 unit

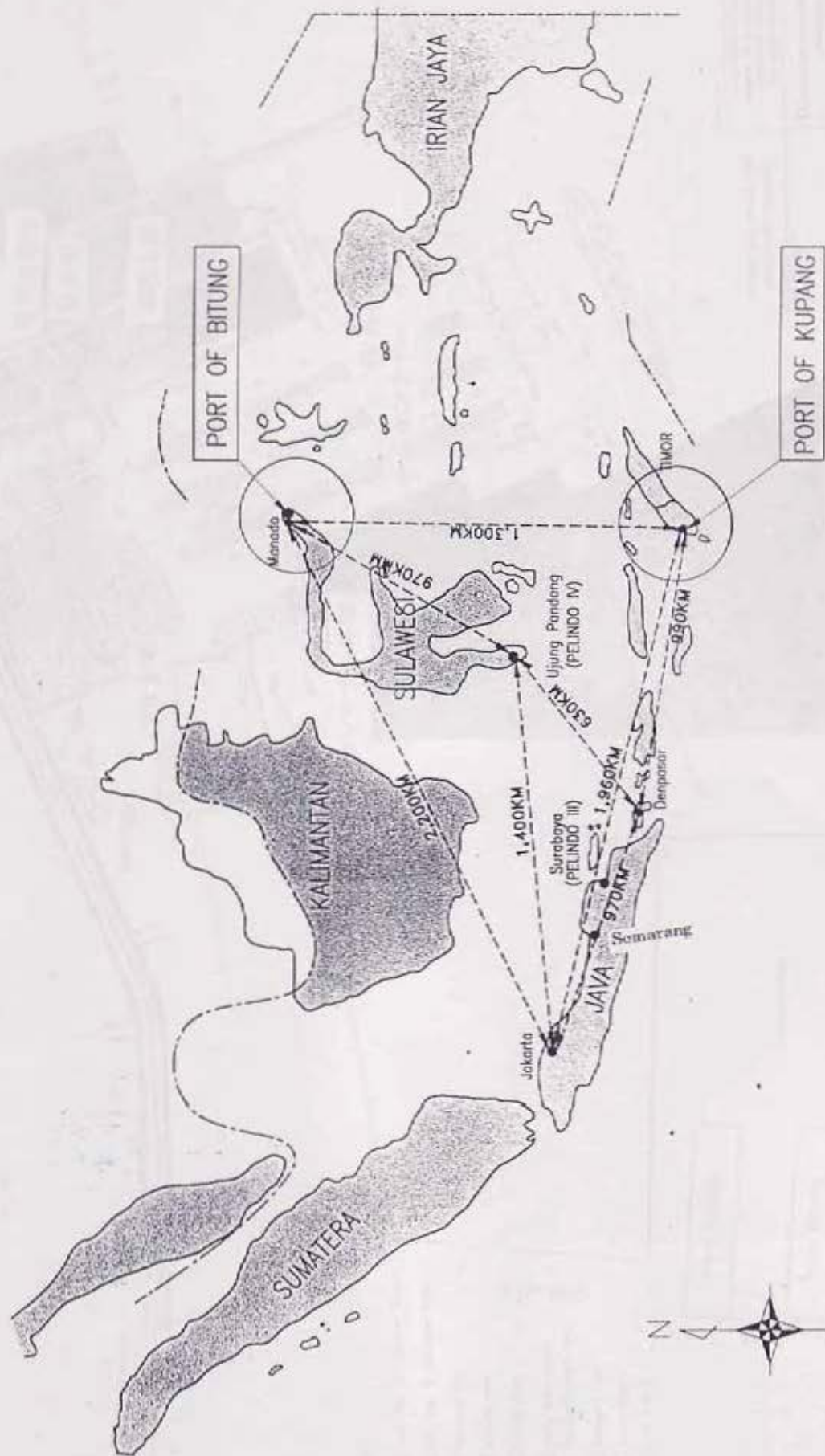
簡単ですが、我々が目下参画しておりますプロジェクトを紹介させていただきました。お暇がございましたら、一度現場に是非お越し下さい。現場を歩きながら、工事をご説明させて頂きたいと存じます。お待ち致しております。

連絡先

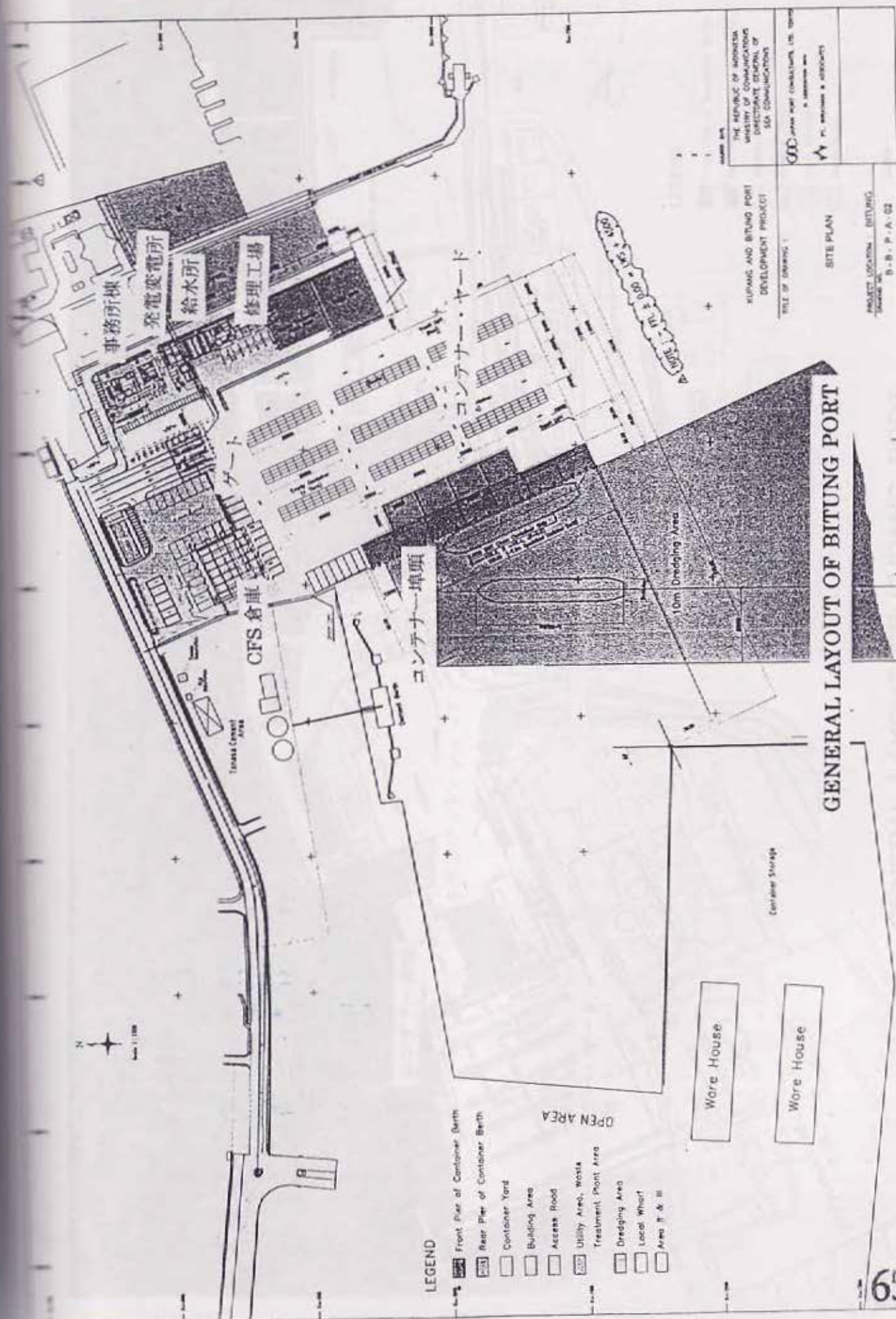
住所： Jl. Hatta, Pos 6, Pateten, Bitung
電話： 0438-35735

では、.....





LOCATION OF PROJECT PORTS



LEGEND

- Front Pier of Container Berth
- Rear Pier of Container Berth
- Container Yard
- Building Area
- Access Road
- Utility Area, Waste
- Treatment Plant Area
- Dredging Area
- Local Wharf
- Area II & III

OPEN AREA

GENERAL LAYOUT OF BITUNG PORT

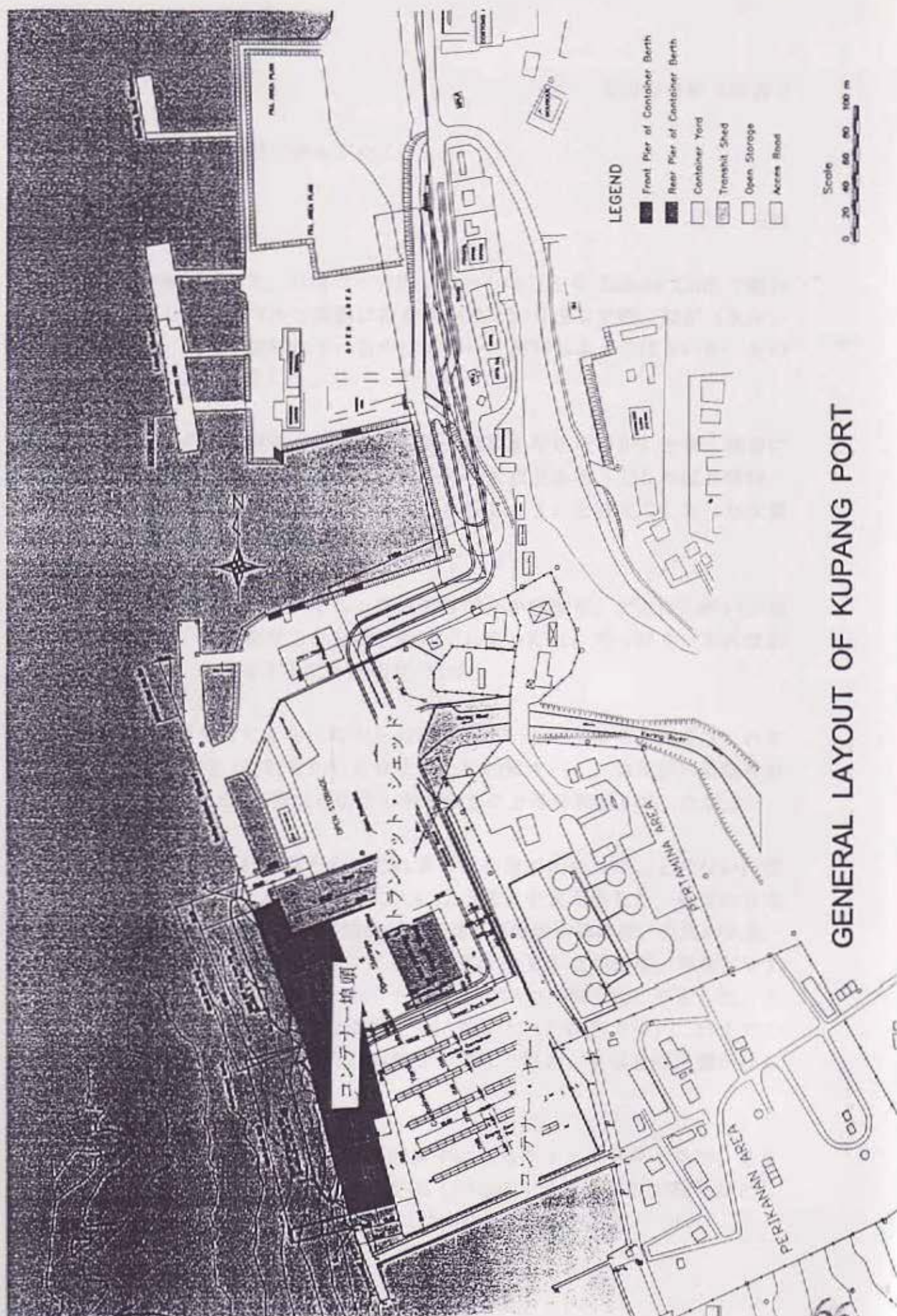
THE REPUBLIC OF INDONESIA
MINISTRY OF COMMUNICATIONS
DIRECTORATE GENERAL OF
SEA COMMUNICATIONS

KUPANG AND BITUNG PORT
DEVELOPMENT PROJECT

PT. KUPANG AIRPORT CONSULTANTS, LTD. (KAC)
KUPANG AIRPORT
KUPANG, INDONESIA

SITE PLAN

PROJECT LOCATION: BITUNG
Sheet No. B-B-P-A-02



2003年3月吉日

素晴らしき日本人会誌「タルシウス」

JPC 石野

実は、昨年春頃でした。日曜ゴルフ後、いつものごとく Sunset Café で疲れをビールで癒しながらゴルフ談義に花を咲かせておりました際、話が「タルシウス」に移り、発刊が途切れているのは惜しい、再刊しようではないか、との声が異口同音に上がりました。

そして、いろいろ話の経過があって「石野、編集をやらないか」と言う発言に出会い、酔いつつある勢いもあって、本来私の欠点である「でしゃばり精神」が頭を持ち上げ、あまり考えずに「やってみましょう」と答えてしまった次第です。

宿舎に帰り、冷水でマNDERをし、身体のはてりが治まり、だんだん酔いが覚めてくるつれ、いや大変なことを引き受けてしまったな、やっぱり「おれはおっちょこちょい」と反省すること仕切りでした。

しかし、男。引き受けたからにはやらねばなるまいという事で、先ずはこれまでに発刊された諸誌（創刊号から8号まで）を勉強すべく、会長から全誌をお借りし速読致しました。（実は吉田さん所有のものと後日判明しましたが。）

しかし、読み進むにつれ各巻とも、これまでに自分が出会ったことのない内容の濃い「日本人会誌＝タルシウス」に大いなる驚きを覚えました。通常の日本人会誌は会員への連絡事、総領事館からの通達、緊急時の連絡網、会員の入会・退会の挨拶、ゴルフ・コンペのスコア表、優勝者とBB者の挨拶、等等です。ところが、巻を追うにつれ、豊富な内容と量に驚き入った次第です。これまでの会誌に仕上げられた会長の指導力と編集者の熱意と努力、寄稿者の支援がひしひしと身に感じられました。

それに、創刊がインドネシア政局混乱の最中にあった1998年7月で、2000年正月発刊以後途切れるまで8巻が出ているのですから、この種会誌としても発刊頻度の高さにもこれまた驚きました。

各巻それぞれ、この地方の歴史、自然、人種、言語、習慣、動物、観光、地方政治、etc.が網羅されており、当地を知ろうとされる方々には貴重な情報源ですし、今後とも活用できる参考資料となっています。また、寄稿者の現地での諸々の体験談は、我々が当地で生活する上で良き指針になること請け合いです。

特に、第5号「太平洋戦争とBC級戦犯裁判」は圧巻です。第二次世界大戦中、この地で日本軍が如何に戦い、如何に統治したかを知るに重要な資料です。なかでも各所で散見される当地軍政の司令「堀内豊秋大佐」が賢哲な方で善政をしき、住民に慕われていたとのくだりは、共感を覚えますし、異国で仕事をしなければならぬ者にとって、参考になるはずです。

これだけ豊富な内容の会誌を過去のものとして、眠らせてしまうのは非常に勿体無いと判断し、8号までの「目次」を掲載させて頂き、各号の記事表題を皆様にお知らせさせて頂き、事になりました。

読者の中でこれが読みたいとのご希望がありましたら、前田会長ないしは吉田全志殿に申し出られれば、快く貸し出して下さるものと思っております。

最後になりますが、かくも素晴らしい会誌作成を指導された前田会長、並びに川口博康編集部長及び川井雄二編集部員のご誠意に敬意を表させていただきます。

今後「タルシウス」を作成するにあたり、これまでのような内容までに高めるのは至難の技と思っておりますが、何らかの形で会員間の交流を図り、参考になるものであればとの気持ちで臨みたく思っております。会員皆様のご支援・ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

尚、会誌再刊の話が出て具体化するまでにかくも時間を要したのは、一にこの請負人の怠慢から来るものでして、ただただお詫びするのみです。ジャワ流の言い回しになりますが「発刊出来ただけでも幸い」とみなしてご容赦願います。

では、.....



〈 北スラウェシ日本人会会報 第1号 〉

目 次

◇ ご挨拶	日本人会会長 前田良昭	2
◇ 北スラウェシ日本人会設立経緯について	日本人会副会長 川口博康	3
◇ 北スラウェシ日本人会設立に寄せて	在ウレムバンダ日本総領事館 佐久間徹	5
◇ 北スラウェシ安全対策連絡協議会設立準備会報告書	安全対策連絡協議会会長 辻田武司	7
◇ 日本総領事館の案内		10
— 特別掲載 —		
◇ 「インドネシア政変に関するトピックレポート」		
第6章 ハビビ新体制の特徴	アジア経済研究所 松井和久	14
◇ 北スラウェシにおける宗教	川井雄二	23
◇ — 経済 — マナドと3B	川井雄二	24
◇ プナケン国立海中公園	森井まち子	25
◇ ミナハサ観光案内	川井雄二	29
◇ 日常の安全対策（交通事故）	海外安全マニュアル	32
◇ — 建築 — 書籍交換会	川井雄二	37
◇ 命の恩人に会いたい	1985年4月28日新聞記事	38
◇ インドネシア語クロスワード・パズル	川井雄二	39
◇ 編集後記	日本人会 編集部	40

北スラウェシ州日本人会

〈 会報 タルシウス 第2号 〉



目 次

◇ 御挨拶	日本人会名誉会長 在マナド日本総領事館	松田総領事	2
◇ マナド空港拡張工事		西村 計一	4
◇ ミナハサと沖縄		長崎 節夫	9
◇ インドネシアに行った感想は		川口智香子	12
◇ マナド随筆(2) バットマン		川井 雄二	14
◇ マナドで知った人々の心		福岡 良男	15
◇ ジェネボント県視察メモ		松井 和久	22
◇ 南の島の知性		宮内 泰介	24
◇ ミナハサ観光案内(2)		川井 雄二	25
◇ 海外安全マニュアル —— 交通事故発生時における対応			27
◇ 海外生活健康マニュアル			31
◇ 総領事館からのお知らせ 年内主要日程			32
◇ 北スラウェシ州 国立博物館		川井 雄二	33
◇ インドネシア語クロスワードパズル		川井 雄二	38
◇ 編集後記		日本人会編集部	39
◇ 北スラウェシ州日本人会 名簿			40

北スラウェシ 日本人会

〈 会報 タルシウス 第3号 〉



目 次

◇ 年頭のご挨拶 北スラウェシ日本人会 会長	前田 良昭	2
◇ 南北スラウェシ 医療従事者訓練センター建設計画	牛崎英次郎	3
◇ 国際結婚 完全マニュアル	内田 忠茂	6
◇ スラウェシの珍獣	川井 雄	11
◇ 「国際交流基金」のご紹介	村上かおり	15
◇ 外国語学習における「動機」	村上かおり	19
◇ マナドハヤで3ヵ月経ちました	喜多 和	21
◇ 国軍階級に関して	辻田 武司	24
◇ 携帯常備薬に関して	辻田 武司	25
◇ アルコールと肝臓	海外生活健康マニュアル	27
◇ スラウェシの海 シーフカンス	八巻 宏之	28
◇ イルソブレーのお勧め	牛崎英次郎	32
◇ ミナバサ観光案内(3)	川井 雄	35
◇ 日本の「恥」とイギリスの「シラッ」	佐久間 徹	37
◇ 北スラウェシと日本の子ども交流会 報告書		39
◇ 編集後記	日本人会編集部	46
◇ 安全対策連絡協議会	お知らせ/緊急連絡網	47

北スラウェシ日本人会会報 (タルシウス 第4号)

目次

- ◇ 在ガジュン・パダン 日本国総領事館 松田総領事殿 並びに
在インドネシア日本国総領事館 川上特命全權大使殿の
北スラウェシご訪問

北スラウェシ日本人会 会長	前田 良昭	2
◇ 在インドネシア在留邦人安全対策懇談会	辻田 武司	4
◇ 北スラウェシ出身の国家英雄	川井 雄二	9
◇ マナドに流刑された英雄たち	川井 雄二	15
◇ ビトンでの歴節製造の歴史について	川口 博康	18
◇ 高校日本語教育支援	家田 章子	24
◇ スラウェシ島の歴史と民族	庵 波人	27
◇ 国際結婚 完全マニュアル Part II	押川 裕一	30
◇ メナドの親日家 ソンピさん	青木 次郎	33
◇ インドネシアのまぐろ延縄漁業	長崎 節夫	34
◇ MINANGA-RAFTING (川下り)	川口 博康	37
◇ マナドの新風物詩 フィグラ祭	川井 雄二	40
◇ 家族主義について スカルノとスハルト	川口 博康	41
◇ マナドに来て6ヵ月です。	喜多 和	42
◇ 肥満/肝炎	海外生活健康マニュアル	46
◇ 編集後記	日本人会編集部	47

北スラウェシ州日本人会

〈 会報 タルシウス 第5号 〉

— 特 集 —

太平洋戦争とB C級戦犯裁判

目 次

◇ はじめに	川井 雄	2
◇ B C級戦犯について	川口 博康	4
◇ 朝日新聞記事		6
◇ 秘録 大東亜戦史 蘭印編		20
◇ セレベス戦記	奥村 明	45
◇ セレベス島 ミナハサへの道	片山 清	62
◇ 夜光虫 医師が見た大東亜戦争	福岡 良男	81
◇ 孤島の上となるとも	岩川 隆	90
◇ その他の資料		105

北スラウェシ日本人会会報 《タルシウス 第6号》

目 次

◇ ゴロンタロ観光案内	川井 雄二	2
◇ グローバルな視点から、インドネシアの母子保健を考える インドネシア 母と子の健康手帳プロジェクト	芝山江美子	9
◇ はじめまして	野田奈緒子	13
◇ インドネシアー トモホン町に別荘を作って見て	川口 博康	15
◇ ビトンでの鰹節製造の歴史について(2) 戦後の鰹節工場について	川口 博康	20
◇ インドネシアのまぐろ延縄漁業(2)	長崎 節夫	28
◇ 大岩勇と鰹節に見る南洋史の断片	藤林 泰	33
◇ 「レフォルマシ」の陰で	松井 和久	35
◇ アンボンからの避難民	松井 和久	37
◇ 0. Ina ni Keke ちょっとお嬢さん ーマナドで唄ってー	庵 波人	39
◇ インガ... インガ...	川井 雄二	50
◇ 編集後記	日本人会編集部	51

北スラウェシ日本人会会報 (タルシウス 第7号)

目 次

◇ ごあいさつ	北スラウェシ日本人会 会長 前田 良昭	2
◇ 北スラウェシ日本人会発足1周年を迎えて 在ウジェン・バンドン総領事	松田 勲	3
◇ 北スラウェシ日本人会 総会議事録	辻田 武司	4
◇ 北スラウェシ日本人会 会計報告	会計 川口 博康	5
◇ 北スラウェシ日本人会規約		6
◇ 一年間をふりかえって	西村 計一	7
◇ 日系企業紹介	前田 良昭	9
◇ 回顧記	内田 格	10
◇ ある老人のつぶやき	青木 次郎	13
◇ インドネシアと私とキリスト教	青木 次郎	17
◇ インドネシアのまぐろ延縄漁業(3)	長崎 節夫	19
◇ 海軍体操	長崎 節夫	21
◇ 【入国管理局 外国人の書類を簡素化へ】	辻田 武司	24
◇ 【自動車のナンバープレート】	辻田 武司	26
◇ 特殊インドネシア語会話 ～無線編～	辻田 武司	29
◇ 北スラウェシ州豆知識	川井 雄二	31
◇ マナド市内 観光案内	川井 雄二	40
◇ 私の推薦店	金谷 俊緒	52
◇ 編集後記	日本人会編集部	54

目 次

◎ 年頭のご挨拶	前田 良昭	2
◎ ミナハサ観光案内		
タルシウス	川井 雄二	4
ワルガ遺跡公園	川井 雄二	7
イマーム・ボンジョール	川井 雄二	10
ミナハサ観光案内うちあけ話	川井 雄二	13
◎ マナドに赴任して		
ふたつの「インドネシア係数」	玉置 忠嗣	16
◎ クラバット山一登頂始末記	川口 博康	19
◎ 日本軍関係のモニュメントについて	川口博康 編	26
慰霊の言葉		
落下傘部隊五十周年式典		
メナド慰霊祭関係		
堀内落下傘部隊長		
◎ 戦前の北スラウェシ在留邦人	川井 雄二	37
◎ ビトン・アンボン漁業開拓者		
原耕氏のこと	川口博康 編	42
◎ ビトン駐在を振り返って	川口 博康	55
◎ 場所が違えばものも違う	伊藤 澄	61
◎ ビツン市内観光案内	伊藤 澄	63
◎ Minahasa 料理雑感	川口 修	65
◎ スラウェシだより		
動き始めた地方分権化	松井 和久	67
古着で遊ぶ島:		
東南スラウェシ州ワンギワンギ島	松井 和久	69
サンギヘ・タウラド諸島にて(1)	松井 和久	71
◎ アンボン在住10年目の事件	吉田 全志	74
◎ 編集後記		
ご協力ありがとうございました	川口博康	83
新編集部長 募集中!	川井雄二	84

ビトン港に日本国練習艦隊現る

去る7月20日、午前8時過ぎビトン港に「かしま」を旗艦とする日本国練習艦隊三隻出現。8時40分同港主要埠頭、Nusantara 岸壁に接岸。僚艦「はまゆき」及び「さわぎり」、順次それに寄り添い繫留。

迎えるはインドネシア海軍代表、北スラウェシ州知事代表、ビトン市代表、在マカッサル日本総領事並びに現地日本人会代表、及び現地見物人。

異色は、本国から来訪の水交会の面々20名程。日章旗・海軍旗を振ってのお出迎え。中に、堀内豊秋大佐のご令息も。昔身に付けた手旗信号。陸上・艦上新旧エールの交換。

地上歓迎式典、次いで旗艦艦上式典へ。渡辺奉勝 日本総領事並びにインドネシア海軍ビトン基地 Mucklas Sidik (Laksamana Pertama TNI) 司令官、栄誉礼を受く。

幹部や訓練生は Manembo-nembo へ。旧海軍戦没者慰霊碑に拝礼。

一方岸壁。10時半から11時半まで、オープン・シップ。日本人会の面々、艦内見学。操舵室、エンジン・コントロール室、寢室、etc.を見る。対潜ヘリコプターをまじかに見る。4,050トンのこの船、水上でも時速60kmとの事。驚く。

夕刻、5時、艦隊、岸壁を離れる。乗組員甲板に整列。こちらに帽子を振る白い彼らの列。印象に残る。次はジャカルタとか。

夕日に映えるクラバット山。彼らの目に焼き付いていることだろう。

Bon Voyage!!



歓迎のごあいさつ

平成15年度遠洋練習航海部隊の乗員を代表し、皆様の御来艦を心から歓迎致します。

当遠洋練習航海部隊は、練習艦「かしま」、護衛艦「はまゆき」「さわぎり」からなり、各艦には今春、幹部候補生学校を卒業した初級幹部約180名を含む約800名の自衛官が乗組んでいます。

遠洋練習航海は、海上における諸訓練を通じて初級幹部のシームanshipを育成するとともに、国際的視野を養い、あわせて訪問国との親善を深めることを目的としております。

本日は、時間の許す限り艦内をご見学いただき、練習艦隊と海上自衛隊をご理解いただければ幸いです。

練習艦隊司令官

海将補 杉 本 正 彦

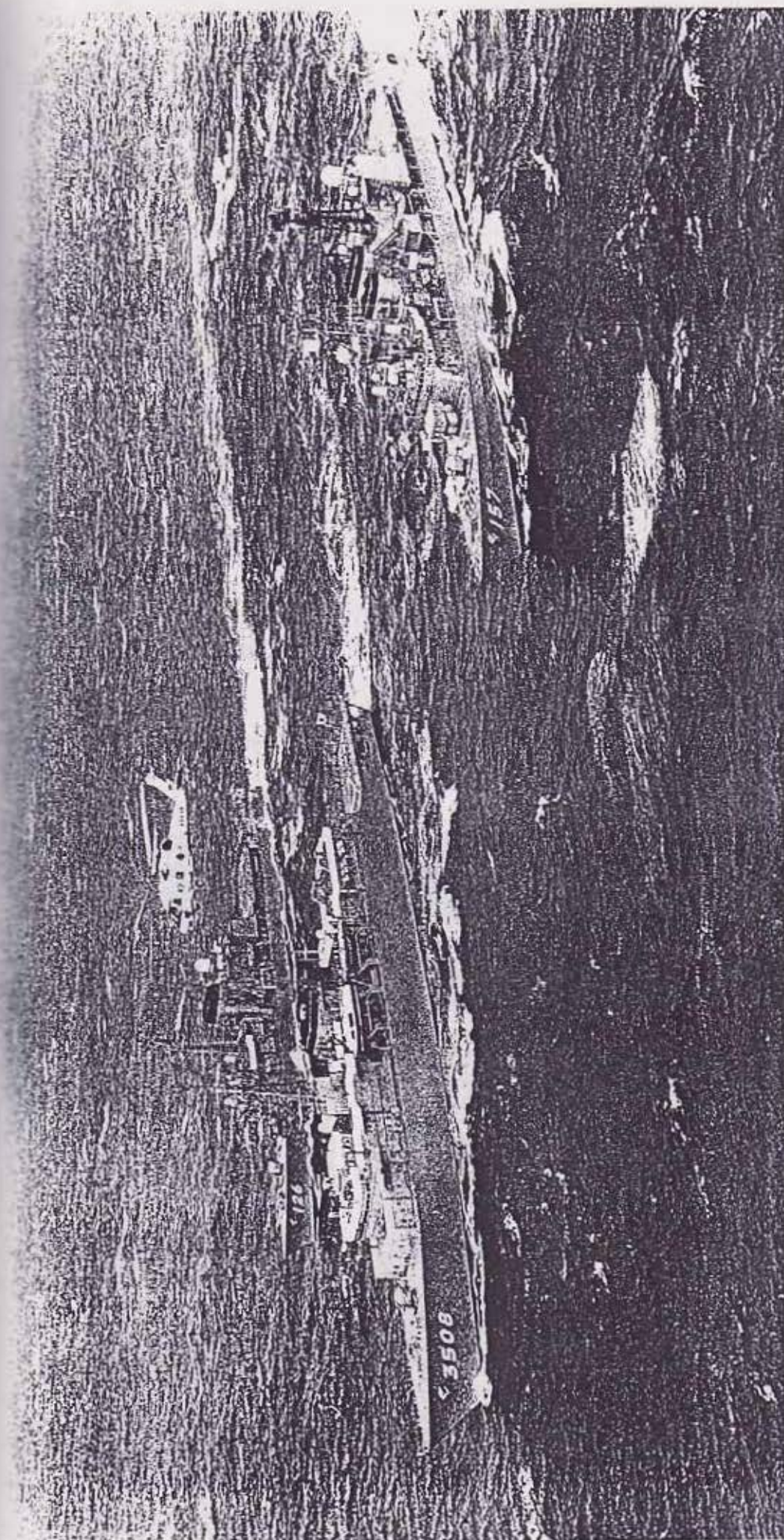
司令官略歴

昭和26年生まれ（富山県）
 昭和49年防衛大学校卒業後、海上自衛隊入隊
 平成4年 護衛艦はるゆき艦長
 平成6年 海上幕僚監部装備体系課艦船体系班班長
 平成8年 第47護衛隊司令
 平成9年 第6護衛隊司令
 平成9年 統合幕僚会議事務局第3幕僚室
 教育訓練調整官兼教育訓練班班長
 平成11年 統合幕僚会議事務局第3幕僚室
 運用計画調整官兼総括班長
 平成13年 護衛艦隊幕僚長
 平成13年 第3護衛隊群司令
 平成14年 練習艦隊司令官に就任



平成15年度

日本国練習艦隊



●主要要目 (かしま)

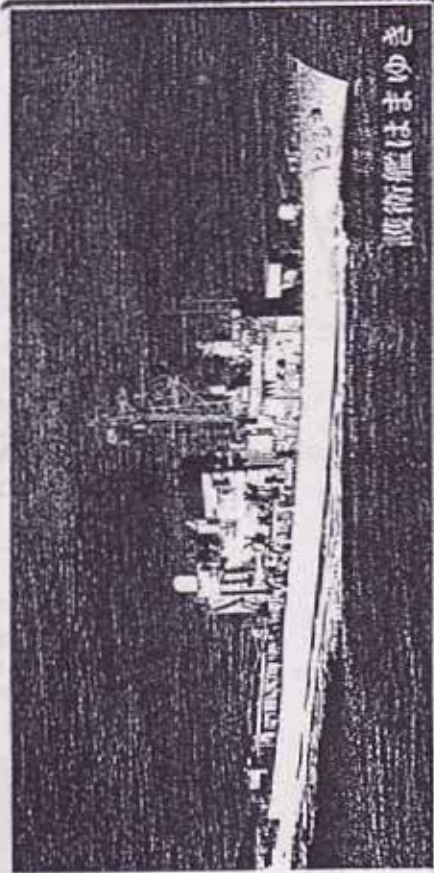
基準排水量	4,050トン
主要寸法	143×18×4.6m (長さ×幅×喫水)
主機械力	ガスタービン・ディーゼル2基2軸 (27,000馬力)
速	25ノット
主要兵装	62口径76ミリ単装速射砲 ×1
	3連装短魚雷発射管 ×2
定員	360名



練習艦かしま

●主要要目 (はまゆき)

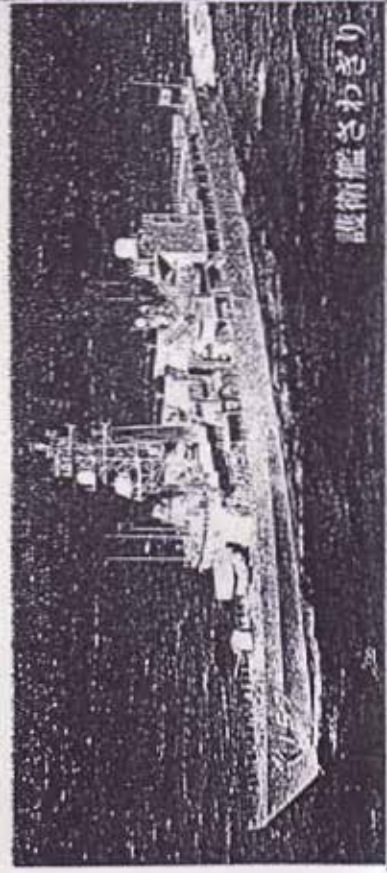
基準排水量	2,950トン
主要寸法	130×13.6×4.2m (長さ×幅×喫水)
主機械力	ガスタービン4基2軸 (45,000馬力)
速	30ノット
主要兵装	62口径76ミリ単装速射砲 ×1
	高性能20ミリ機関砲、3連装短魚雷発射管 ×2
	対艦、対空ミサイル装置、アスロック ×1
	哨戒ヘリコプター-SH60J ×1
定員	200名



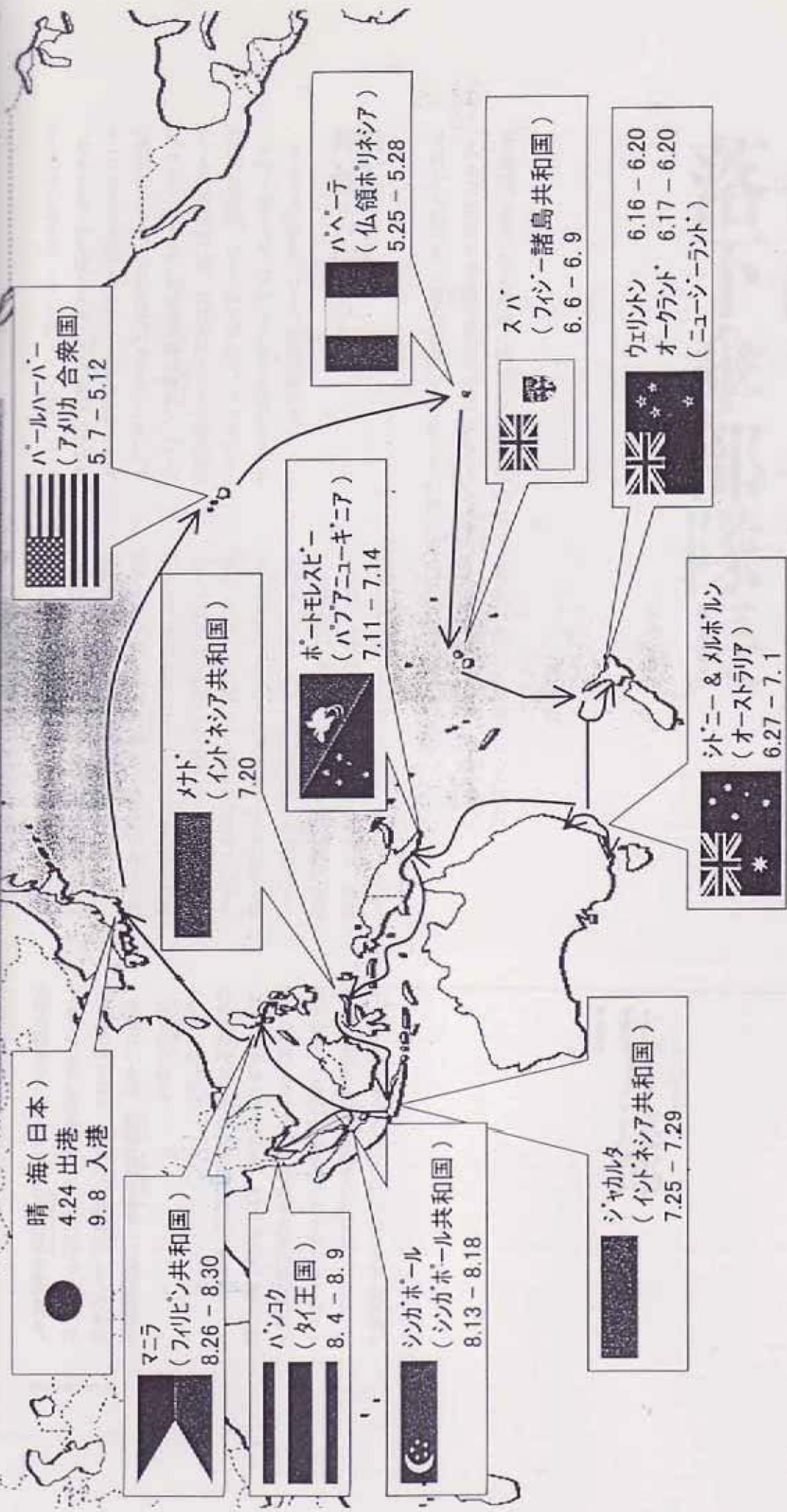
護衛艦はまゆき

●主要要目 (さわぎり)

基準排水量	3,550トン
主要寸法	137×14.6×4.5m (長さ×幅×喫水)
主機械力	ガスタービン4基2軸 (54,000馬力)
速	30ノット
主要兵装	62口径76ミリ単装速射砲 ×1
	高性能20ミリ機関砲、3連装短魚雷発射管 ×2
	対艦、対空ミサイル装置、アスロック ×1
	哨戒ヘリコプター-SH60J ×1
定員	220名



護衛艦さわぎり



期 間 : 平成15年4月24日(木)~9月8日(月)
 所要日数 : 138日(航海89日、停泊49日)
 総行程 : 21,705NM
 訪問国 : 10カ国(13寄港地)

伝説の人になつた 落下傘部隊長

不思議な言い伝えの地に降下した落下傘部隊を、島民は熱烈に歓迎してくれた。
「人々の期待と愛情を裏切つてはならない」。城内豊秋中佐は、決意を固める。
それから約一年、「横の司令」と皆から慕われた城内の奮闘が続くのだが。

白い花とともに 舞い降りた伝説の人

インドネシアに、ひとつの伝説がある。
かつて東ジャワにクデイルなる王国があり、その国の最盛期、ひとりの王がいた。ジョヨボヨという名の王なのだが、彼は古代インドの民族叙事詩「マハーバーラタ」をジャワ風に翻案し、ひとつの書をのこした。書の名は「バラタユダ」といい、ここにさまざまな予言めいたことが書かれている。なかでも、いちばん人口に膾炙していたのがアラの神である「ラトウ・アデイル」の伝説だった。

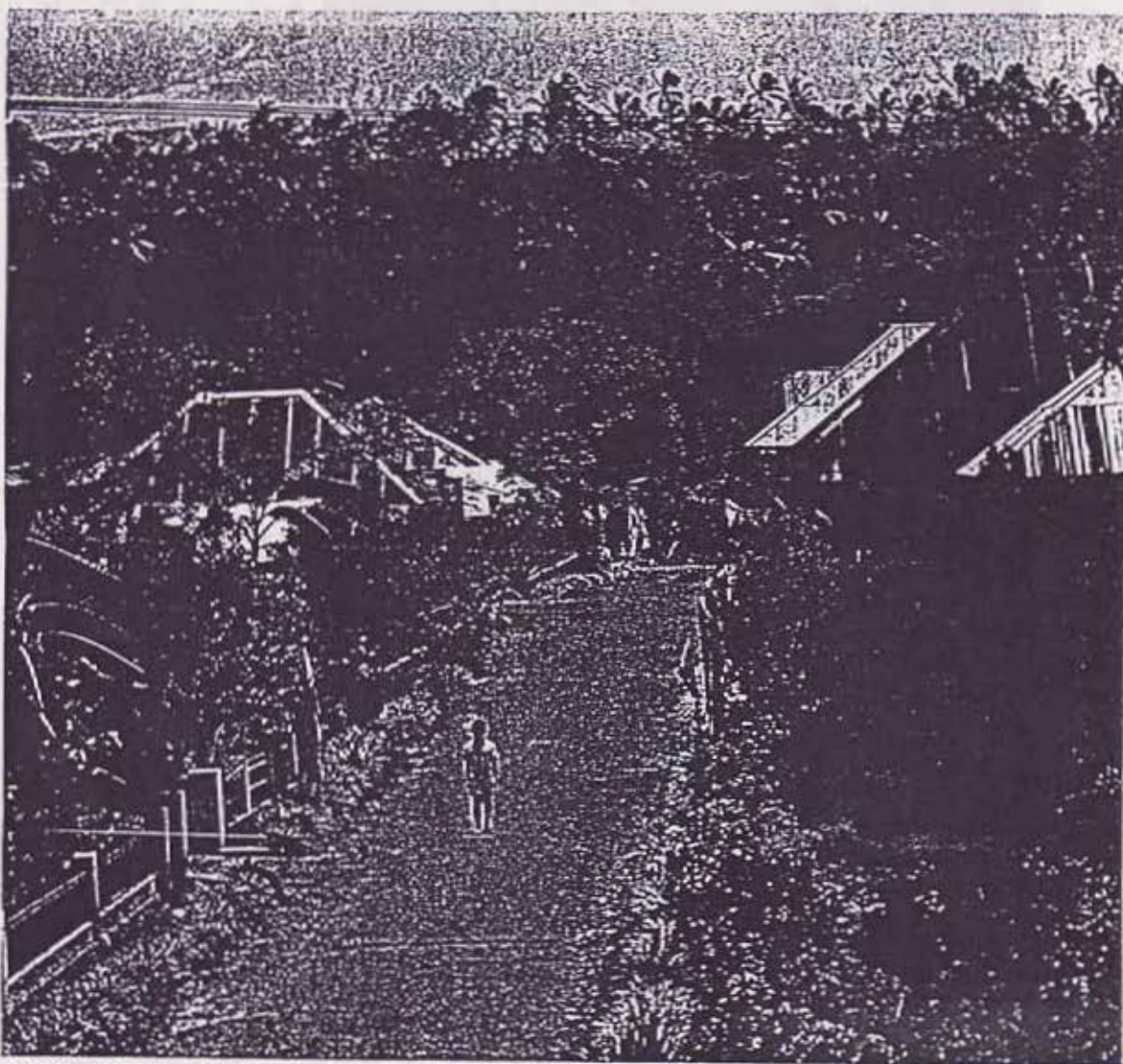
非常に興味深いもので、その書によるとインドネシアは、一時期たいそう国内が乱れてのち、外部から侵入した猫の目と赤い髪をもつ異民族に支配されるものの、やがて蓮の花の白い大輪が開くとき、北方から黄色い人間がやってきて異民族を駆逐し、代わって支配に入る運命を背負っているという。だがその支配はトウモロコシの一代限り（三年五ヵ月）で終わり、ほどなく白馬にまたがる救世主「ラトウ・アデイル」が降臨して、永遠の平和と幸福が約束されるというものだった。
当時……つまり、第二次世界大戦の前夜……この純白の蓮の花はオランダの最盛期を指し、黄色

Akiyuki Tsuruno
秋月達郎
● 作者 ●

い人間とは、インドネシア以外のアジアの何処かの人々であると解釈されていたらしい。だが、昭和十七年（一九四二）の早春、インドネシアのセレス島（現スラウエシ島）にある人々は別な解釈をした。天を見上げたとき、おびただしいほどの純白の花が咲き、それが大地に向かって降り下ってきたからだだった。

落下傘である。

正確に言えば、横須賀鎮守府第一特別陸戦隊の落下傘部隊であり、のちに「空の神兵」とうたわれるようになる七百五十名からの集団だった。この大隊の指揮をとっていたのが城内豊秋中佐である。



メナド(写真提供インドネシア大使館)

堀内はこのころ、すでに海軍のなかでは相当に名の知られた存在だった。「体操の神様」と呼ばれていたのである。

それまで、海軍の体操といえばスウェーデン式のもの採用されていたが、堀内は陸戦隊の司令となる前に、江田島の海軍兵学校の教官を務め、そこでデンマークの体操を基本とした堀内式海軍体操をみだし、これを普及させることによって名を高からしめていた。もともとこの体操、見ようによっては阿波踊りをさらに柔弱にしたものと見えた。ことに堀内は口髭が濃く、しかも頭が禿げあがっていたため、生徒たちの前で体操を披露するときなどは異様な迫力となり、頬を紅潮させて指導すると、阿波踊りを通りこして踊りのようにも見えた。だが、この体操は、身体を柔軟にすることにはかなりの効果があり、しかも基礎体力をつける上では相当に優れたものであったらしい。ともあれ、その「踊」が純白の落下傘にぶらさがりながら、セレベス島メナドに降下したのである。彼らがめざしたのは島内ミナハサ高地にあるランゴアン飛行場で、オランダ軍との激烈な戦闘のちにこれを奪取し、上陸してきた陸戦隊とともにセレベスの制圧に成功することとなるのだが、まさにその降下作戦は、堀内が「伝説の人」になる幕開けのようなものだった。

堀内は隊内での人望もあつく、常に快活で自信に溢ちあふれた軍人であった。だが、どれだけ矜持をはこびた軍人であろうと、まさか、自分のひ



堀内豊秋(昭和19年に海軍大佐に昇進、写真は昭和20年7月のもの)

きいる集団が、予言にあった黄色い人間として祭りあげられようとは思ってもみなかったに違いない。

おそろしく負けん気の強い
「いひゅうもん」

堀内豊秋は、日清戦争から五年経った明治三十三年(一九〇〇)、熊本に生まれている。

生家のあたりでは「もっこす」と呼ばれる頑固者がいるが、彼はその上をゆく「いひゅうもん」だっ

た。おそろしいほどに負けん気の強い者をして「いひゅうもん」と呼ぶのだが、ともかく堀内はかなり剛愎な性格だったらしい。生家が士族であり、庄屋であり、質屋であり、かつまた通商酒屋でもあったという賑々しい環境が、彼の素地をつくりあげていったと思われる。

ただし、故郷では万能児のように扱われていた彼も、海軍兵学校に入学するや、自分がいかに貧相な体つきと知識であるかを実感させられてしまった。だが、彼は「いひゅうもん」である。持ち前

の負けん気は、尋常でない鍛錬の末に肉体を改造させ、やがては海軍体操を創始するほどの体操の専門家へと押しあげ、開戦初頭、落下傘部隊をひきいてセレベス島の天からミナハサの地へ降り立たせるまでにいたった。

降り立つと同時に、

——こりやあ、いったい、どうしたことだ、

と面喰らうほどに、熱狂的な歓迎をうけた。

ジョヨボヨの予言などまったく知るはずもない堀内にとって、島民の狂おしいほどの歓迎ぶりは、驚嘆以上のものがあつたに違いない。だが、セレベス島の人々にしてみれば、落下傘部隊を歓迎するのはきわめて当然なことだった。オランダの王政にあえぎ、独立のきっかけをつかもうとしていた彼らの囁には、天空に咲いた純白の花は、まさしく予言にある蓮の花に違いなく、躍り出した兵たちは、まさにインドネシアから異民族を駆逐してくれるはずの、黄色い人間たちに見えたからである。

さらにいうと、このセレベス島には妙な言い伝えがあつた。そもそも、ここに住んでいるミナハサ族は、四百年のむかし、海外に雄飛した日本人の子孫なのだという。たしかに堀内の目にも、ミナハサの娘は故郷日本の娘によく似ていた。ここはもともと美人の産地とされているのだが、それにしても他の地域にくらべても肌の色艶がどことなく日本的だった。また稲穂や石塔や塙子などといった風物も故郷を思い出させるようで、あなが

ち伝承は嘘ではなかったかもしれないと堀内らは思ったことだろう。

大休、メナドという港の名称自体、日本語の「ミナト」が語ったものであるらしく、附近のゴロンタロという村は、五郎と太郎なる四百年前の海外雄飛者が開拓したことを記念してつけられた名であるという。また、苗字にしてもアンドーだのシガラキだのといったものであり、堀内が軍政を敷くべく借りあげたランゴアンの屋敷の持ち主の名も、「シガラキ」であった。こうした背景もあって、インドネシアの人々は当時、日本人という北方の人種にかぎらない親近感をいだいていた。

犯すな、殴るな、偉ぶるな

——インドネシアの人々は、われわれを天から下ってきた神兵であるとして尊敬の念をいだいてくれている。その期待と愛情を決して裏切つてはならない。

軍政をとる上において、堀内が強く胸に決したのであることは想像してあまりある。

とはいえ、彼に専門的な行政手腕があったわけではない。たしかに税金をオランダ時代の四分の一にまで引き下げ、つぎの任地のバリ島では、オランダ時代に専売であった製塩を自由化させたり、煙草の害を説いて禁煙を奨励したり、腰布一枚で歩いている女性たちに対して、事故を防ぐために布で乳房を隠すよう徹底させたりしたが、それら

一つひとつは細かな事例に過ぎず、ひらたくいって、堀内が致命したのは、たった三つのことだった。

犯すな、殴るな、偉ぶるな

——人間が生きていく上で古来より基本となっていることを、部下に明示したのである。

しかし、たいそう、評判はよかった。

堀内はもともと、鉄拳制裁などできるものかと、後輩を殴ることを極端に嫌がり、陸軍の兵が島民の宝物を奪ったと聞けば、「日本軍の恥」と憤慨して、自ら部隊に乗り込んで取り返した。道で出会う人々には笑顔で気さくに挨拶し、落下傘を背負った部下が、対空砲火のなかへ飛びおりてゆくのを正視してられないほどの優しさをもち、なにより戦術によって人が死ぬことを厭うた武人である。偶然とはいえ、ラトゥ・アディルたるべき資質は十分に備えていたといつていいし、民衆もまた、この長い烈闘をたくわえた休養好きな珍客を、ここから崇敬し慕った。

彼は、まぎれもなく神兵の長であった。

しかしながら、最終的には悲劇を迎えることになる。

堀内の与り知らぬところで、落下傘部隊を含めた陸戦隊の兵士たちは、猛烈な人気のもとに、現地の女性と内縁関係をもつて子まで留らせ、陸戦隊の隊長などは毎日のように愛妾の家から出勤し、こともあろうにとある部下にいたっては、島民を暴行した上、殺害までしていたのである。

潜暗を貫いていたはずの堀内は、その責任をと

らされることとなった。結局、ほとんど見せしめ同然のかたちで、インドネシア独立戦争のさなかの昭和三年（一九四八）九月二十五日、日機戦犯としてメナドの原野で、オランダ軍によって銃殺された。部下の所業を聞いた堀内は、「まことに恥ずかしい次第であります……私は落下傘部隊長としての責任は充分覚悟しています」と語り、最後の日、普段親しく言葉を交わしていた収容所の隣室のインドネシア人に、「ニッポン、悪かったね。ミスター・アンボン（ごめんなさい）」と穏やかな声で言つて、部屋を出たという。四十七歳。亡骸は、いまでも郊外テーリンの丘で、ブーゲンビリアに包まれながら眠っている。

伝説は、いう。

異人種を駆逐した黄色い人間の支配は、トゥモロコシの一代限りで終わり、そののちによりやく救世主ラトゥ・アディルが降臨するのだと。もしかしら、堀内は緑の野に鮮やかな黄を彩るトゥモロコシであつたかもしれない。そして彼の死後、

インドネシアはラトゥ・アディルの降臨すべき時代を迎えることになった。ただ、インドネシアが独立したのちも、メナドやバリでは堀内のことを民衆が語るときは、常にはほとんどの者が親指を高く高く掲げながら、こう声をはりあげたという。

「ホリウチタイチョウ、ココロ、ジョウトウ（上等、バグス）」

バグスとは現地語で「立派」という意味であるらしい。

海軍兵学校

江田島に行く途中、家族が住む広島島の戒善寺に寄った。戒善寺は地獄極楽の絵で有名な寺だった。作者は知らないが、年に一回開帳した。私も

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄

⑦

この時、絵を見たが、原爆で燃えてしまった。極楽の絵は今でも自分のデザインの一つの理想像になっている。

江田島に出発する前日の晩、江田島に家族全員でとった。普段あまり表情を見せない父親が、嗚咽した。せがれにもう二度と会えないと思ったのかもし

れない。翌日、妹の昌子が見送ってくれた。それが妹との最後の別れとなった。

江田島には遅れて到着してしまっ。同期全員が整列しているところにハワイから持ち帰ったトランクを提げ、敬礼して「栄久庵憲司生徒、ただいま到着しました」と大声で言った。同期が集まると、「遅れてきたくせに、東京の

前日の晩餐 父が嗚咽

体操教官、今でも心の英雄

坊っちゃん面して来た」と今でも冷やかされる。

この時期になると、我々の期の教育は江田島ではなく、長崎の針尾分校で行われた。いまオランダの街並みで有名なハウスデンボスがある場所

朝起きると、海に向かって号令をかける発声訓練。その後、上半身裸で海軍体操をする。三千八百人が寸分の違ひなくきちんと並び、全員が同じ動作をするから実に壮観。号令も「レディー・ビギン」などと全部、英語だ。



筆者がデザインした海軍兵学校針尾分校の碑 (1992年9月建立)

開戦当時、セレベス島メナドの落下傘降下部隊の司令で、デンマーク体操を海軍に導入した。柔らかな猫のように、敏捷でバランスのある身体をつくり上げることが目標だ。

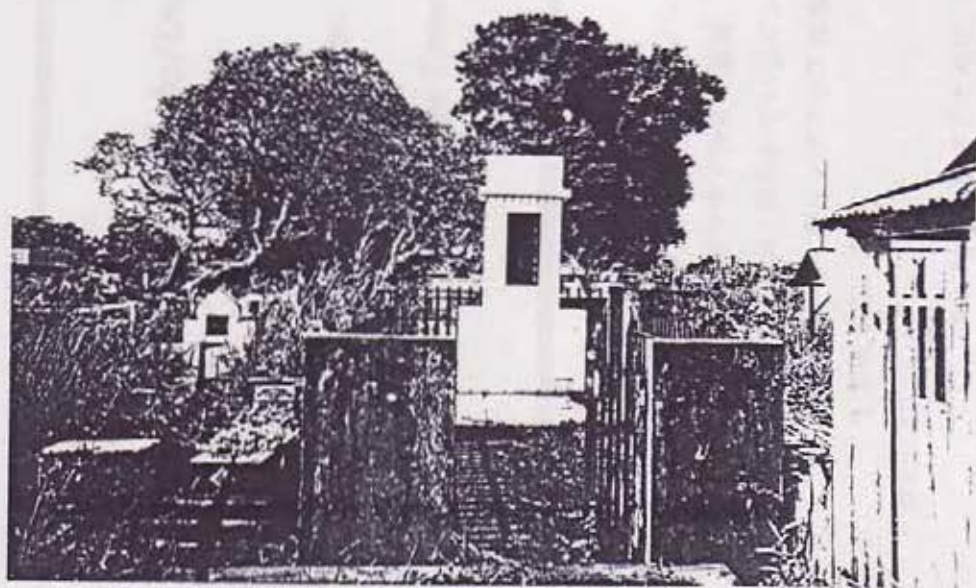
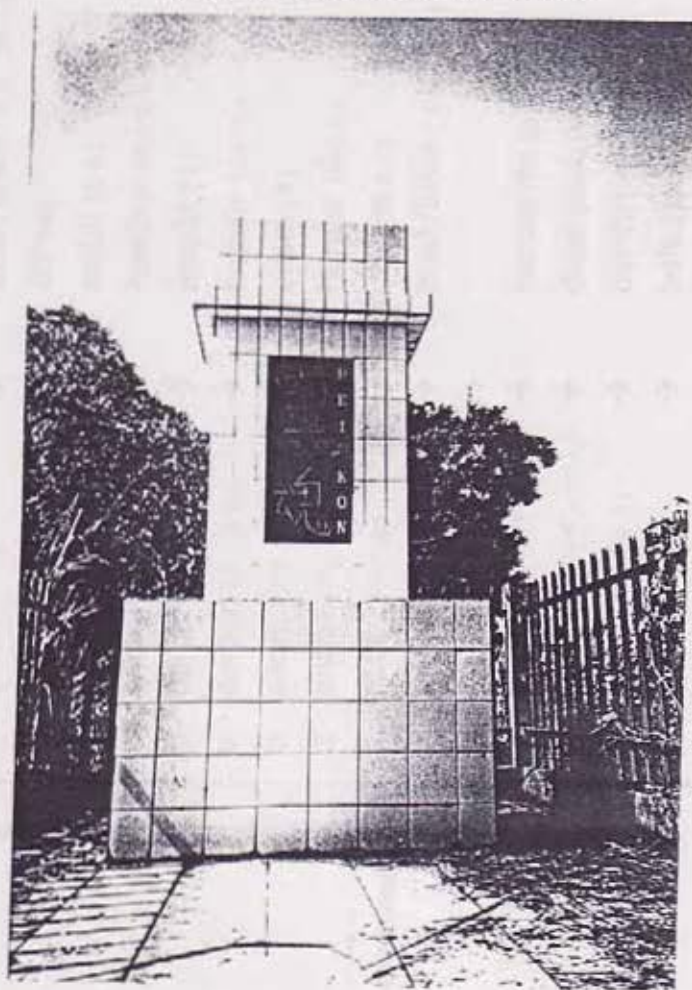
その一つが空中転回で、踏み切る時に今までのない勇気がいる。大佐はにこやかにユ一モアも交えながら、忍耐強く指導してくれた。怖さが楽しさに変わり、空中の姿勢が見えるようになる。全員がでけるようになった。大佐は戦後、メナドで行われた軍事裁判で死刑になったが、今でも海軍魂の精髓を教わった同期全員の心の英雄である。

食事によかった。銀しゃりで一汁二菜だ。五月二十七日の海軍記念日は汁粉が出た。

見えるようになる。全員がでけるようになった。大佐は戦後、メナドで行われた軍事裁判で死刑になったが、今でも海軍魂の精髓を教わった同期全員の心の英雄である。

デザイナー

マナド市デーリンの丘に眠る堀内豊秋大佐の墓碑
「霊魂」(REIKON) と記してある



Bahasa Manado/Indonesia

oléh
Defi Kandou
dan
Tadatsugu Tamaki

<注>：ここであるマナド語とは、標準インドネシア語に対して、

- 1) 全く異なるマナド特有の言葉
- 2) マナドで良く使われているインドネシア口語
- 3) 発音が近いがインドネシア標準語と表記が異なる言葉を意味する。

<表記について>

- 1) n と ng を区別するために、それぞれ「ン」と「ンッ」と表記した。
- 2) l と r を区別するために、それぞれ「ラリルレロ」と「ラリルレロ (太字)」と表記した。

Bahasa Manado

□	adé (アデ)	→
□	adoh (アド)	→
□	aér (アエル)	→
□	ambé (アンベ)	→
□	ambor (アンボル)	→
□	ampa (アンパ)	→
□	amper (アンプル)	→
□	anam (アナム)	→
□	ancor (アンチャール)	→
□	ator (アートル)	→
□	ba/pa/for (バ/パ/フォル)	→
□	bacarita (バチャリタ)	→
□	badiang (バディアン)	→
□	badiri (バディリ)	→
□	baé (バエ)	→
□	bagara (バガラ)	→
□	bage (バゲ)	→
□	bagini (バギニ)	→
□	bagitu (バギトゥ)	→
□	bahoba (バホバ)	→
□	bajalang (バジャラン)	→

Bahasa Indonesia

adik [弟・妹]	→
aduh [感嘆詞：あら、おっとと]	→
air [水]	→
ambil [取る]	→
hambur [撒き散らす]	→
empat [4]	→
hampir [だいたい・おおよそ]	→
enam [6]	→
hancur [砕ける]	→
atur [配える]	→
buat/bikin [作る・作る]	→
bercerita [話をする]	→
diam [静かな]	→
berdiri [立つ]	→
baik [良い]	→
membuat masala [騒ぎ立てる]	→
pukul [打つ・叩く]	→
begini [このように]	→
begitu [そのように]	→
mengintip [覗き見る]	→
berjalan [歩く]	→

<u>Bahasa Manado</u>		<u>Bahasa Indonesia</u>	
☐ bakalae (バカラエ)	→	☐ barasa (バササ)	→
☐ bakas (バカス)	→	☐ bareken (バレケン)	→
☐ bakimu (バキム)	→	☐ barmaeng (バルマエング)	→
☐ baku (バク)	→	☐ basar (バサル)	→
☐ bakudapa (バクダパー)	→	☐ basembayang (バスンバヤン)	→
☐ bakudusu/dusu (バクデウス/デウス)	→	☐ basodara (バソダラ)	→
☐ bakumpul (バクムプル)	→	☐ basambar (バスンバー)	→
☐ bakusedu (バクセデカー)	→	☐ basumpa (バスンパ)	→
☐ balaeng (バラエング)	→	☐ batamang (バタマン)	→
☐ balada (バラダ)	→	☐ batampa (バタンパ)	→
☐ balakang (バラカン)	→	☐ batobo (バトボ)	→
☐ balapis (バリピス)	→	☐ batunangan (バトナナガン)	→
☐ bale (バレ)	→	☐ bauni (バウニ)	→
☐ bale-bale (バレバレ)	→	☐ bekeng/beking (ベキン/ベケン)	→
☐ baniat (バニアツ)	→	☐ benko (ベンコ)	→
☐ bapikir (バピキル)	→	☐ berbage (ブルバグ)	→
☐ bapilih (バピリ)	→	☐ besae (ベサエ)	→
☐ barambu (バランプ)	→		
☐ barame (バラメ)	→		
		☐ bertengkar (言い争う)	
		☐ bekas (跡, 以前の)	
		☐ berjampur/rusak (食べ物にカビが生える・傷む)	
		☐ saling (お互い)	
		☐ berjumpa (会う)	
		☐ kejar (追跡する・競争する)	
		☐ berkumpul (集まる)	
		☐ bercanda (冗談を言う)	
		☐ mendua (愛人を作る・関係を持つ)	
		☐ petualangan (放浪すること)	
		☐ belakang (後ろ)	
		☐ berlapis (層を重ねる)	
		☐ pulang (帰る)	
		☐ bolak-balik (行きつ戻りつ, 度々)	
		☐ berniat (～するつもりである)	
		☐ berpikir (考える)	
		☐ memilih (選ぶ)	
		☐ berambut (髪の毛がある)	
		☐ beramai (皆で集って賑やかにする)	
		☐ terasa (感じる)	
		☐ berhitung (数える)	
		☐ bermain (遊ぶ)	
		☐ besar (大きい)	
		☐ bersembayang (祈る)	
		☐ bersaudara (関係がある)	
		☐ berteduh (木陰などに避難する)	
		☐ bersumpah (誓う)	
		☐ berteman (友達になる)	
		☐ tempatnya (場所の/は)	
		☐ berenang (泳ぐ)	
		☐ pacaran (愛人関係を持つ)	
		☐ nonton (映画・スポーツなどを観る)	
		☐ buat/bikin (作る・作る)	
		☐ bengkok (曲がった)	
		☐ bahagi (分ける)	
		☐ jelek (悪い)	

<u>Bahasa Manado</u>		<u>Bahasa Indonesia</u>	
☐ besar mata (ブサルマタ)	→	☐ melotot [目を見開く]	
☐ bili (ビリ)	→	☐ beli [買う]	
☐ bingo (ビンゴ)	→	☐ bingung [困惑した]	
☐ bini (ビニ)	→	☐ istri [妻]	
☐ blanja (ブランジャ)	→	☐ belanja [買い物する]	
☐ bobau (ボバウ)	→	☐ bau [臭う]	
☐ bobira (ボビラ)	→	☐ jerawat [吹き出物・にきび]	
☐ bodi (ボディ)	→	☐ bentuk/postur [体型]	
☐ brapa (ブラパ)	→	☐ berapa [いくつ]	
☐ brenti (ブルンティ)	→	☐ berhenti [止まる]	
☐ budel (ブドル)	→	☐ warisan [遺産]	
☐ buju (ブジュ)	→	☐ bujuk [なだめて納得させる]	
☐ bukan (ブカン)	→	☐ bukan [～でない]	
☐ bulung (ブルン)	→	☐ belum [まだ～でない]	
☐ bunung (ブヌン)	→	☐ bunuh [殺す・削減させる]	
☐ busu (ブス)	→	☐ busuk [腐った]	
☐ butul (ブトル)	→	☐ betul [正しい]	
☐ cabo (チャボ)	→	☐ cakar bongkar [引っ掻きあげる]	
☐ calana (チャラナ)	→	☐ celana [ズボン]	
☐ capatu (チャパトゥ)	→	☐ sepatu [靴]	
☐ capeo (チャペオ)	→	☐ topi [帽子]	
<u>Bahasa Manado</u>		<u>Bahasa Indonesia</u>	
☐ ciong (チオン)	→	☐ cium [キス]	
☐ ciri (チリ)	→	☐ jatuh [落ちる]	
☐ cirita (チリタ)	→	☐ cerita [話]	
☐ copa-copa (チョパチョパ)	→	☐ coba-coba [試す]	
☐ dalang (ダラン)	→	☐ dalam [～の中に]	
☐ dapa (ダパ)	→	☐ dapat [得る]	
☐ dapa inga (ダパインガ)	→	☐ teringat [思い出す]	
☐ deng (デン)	→	☐ dengan [一緒に・～を用いて]	
☐ digaro (ディガロ)	→	☐ digarut [擦りむけた]	
☐ ditaru (ディタル)	→	☐ diletakan [置かれた]	
☐ doi (ドイ)	→	☐ uang [お金]	
☐ dola (ドラ)	→	☐ hadang [妨げる]	
☐ dorang (ドラング)	→	☐ mereka [彼ら・彼女ら]	
☐ dotu (ドトゥ)	→	☐ nenek moyang [先祖]	
☐ dudu (ドゥドゥ)	→	☐ duduk [座る]	
☐ ente (エンテ)	→	☐ enteh [おまえ]	
☐ fasang (ファスング)	→	☐ cantik [美しい]	
☐ flao (フラオ)	→	☐ pingsan [気を失った]	
☐ forek (フォルク)	→	☐ garpu [フォーク]	
☐ gade (ガデ)	→	☐ gadai [質入]	
☐ gale (ガレ)	→	☐ gali [掘る]	

Bahasa Manado

☐	gepe (ゲペ)
☐	goro (ゴロ)
☐	goso (ゴソ)
☐	grap-grap (グラップグラップ)
☐	hela (ヘラ)
☐	hele (ヘレ)
☐	hidop (ヒドップ)
☐	hukum tua (フクムトゥア)
☐	idong (イドン)
☐	iko (イコ)
☐	ilang (イラン)
☐	inga (インガ)
☐	itang (イタン)
☐	iyoy (イヨヨ)
☐	jang (ジャン)
☐	jao (ジャオ)
☐	kacili (カチリ)
☐	kagal (カガル)
☐	kain batutu (カインバトゥトゥ)

Bahasa Indonesia

→	jepit [ピンセット]
→	karet [ゴム]
→	gosok [磨く]
→	lucu [おもしろい]
→	tarik [引く]
→	sedang [～している間]
→	hidup [生きている]
→	lurah [村長]
→	hidung [鼻]
→	ikut [一緒に行く]
→	hilang [失くなる]
→	ingat [思い出す・覚える]
→	hitam [黒]
→	iya [はい]
→	jangan [～してはいけない]
→	jauh [遠い]
→	kecil [小さな]
→	sebab [原因・理由]
→	kain selimut [掛布団]

Bahasa Manado

☐	kalamaring (カラマリン)
☐	kalar (カラル)
☐	kalu (カル)
☐	kamari (カマリ)
☐	kanal (カナル)
☐	kase/se (カセ/セ)
☐	kiapa/napa (キアパ/ナパ)
☐	kile-kile (キレキレ)
☐	kita (キタ)
☐	kobong (コボン)
☐	kong (コン)
☐	kongkalikong (コンガリンガリンガ)
☐	kous (コウス)
☐	kning (クリン)
☐	kuala (クアラ)
☐	kukis (クキス)
☐	kuli (クリ)
☐	kumaling (クマリン)
☐	laeng (ラエン)

Bahasa Indonesia

→	kemarin [昨日]
→	selesai [終る]
→	kalau [もし～ならば]
→	mari [～しましょう]
→	kenal [知っている]
→	beri/kasih [与える]
→	kenapa [なぜ]
→	ketiak [腋の下]
→	saya [私]
→	kebun [庭]
→	lalu/kemudian [それから・後で]
→	tipu/dusta [騙す/嘘をつくこと]
→	kaos [靴下]
→	kering [乾いた]
→	sungai [川]
→	kue [お菓子]
→	kulit [皮膚]
→	lagi [さらに・また]
→	lain [別の]

Bahasa Manado

Bahasa Indonesia

□ laju (ラジュ)	→	cepat (速く)
□ laku (ラク)	→	habis terjual [売切れる]
□ lalah (ララー)	→	kelah [不平不満]
□ lao-lao (ラオラオ)	→	hangat [暖かい]
□ lantaran (ランタラン)	→	karena [なぜならば]
□ lapan (ラパン)	→	delapan [8]
□ lebe (レベ)	→	lebih [もっと～]
□ lengkali (レンカリ)	→	lain kali [別の機会に、今度]
□ leper (レペール)	→	sendok [スプーン]
□ ley (レイ)	→	lagi [さらに・また]
□ lia (リア)	→	lihat [見る]
□ lobang (ロバン)	→	lubang [穴]
□ maaci ikan (マアチイカン)	→	insang ikan [魚のえら]
□ maeng (マエン)	→	main [遊ぶ]
□ maitua (マイトゥア)	→	pacar/istri [恋人・妻]
□ makang (マカン)	→	makan [食べる]
□ malendong (マレンドン)	→	keroyok [集団で暴行する]
□ mama (ママ)	→	ibu [目上の女性に対する敬称]
□ manangis (マナギス)	→	menangis [泣く]
□ mangaku (マングク)	→	mengaku [告白する・認める]

Bahasa Manado

Bahasa Indonesia

□ manganto (マングアント)	→	ngantuk [眠いこと]
□ mangarti (マングアルティ)	→	mengerti [理解する]
□ manucu (マヌチュ)	→	tusuk/menusuk [突刺す]
□ manyanyi (マニヤニ)	→	menyanyi [歌う]
□ mar (マー)	→	tapi [しかし]
□ maso (マソ)	→	masuk [入る]
□ maso minta (マソミンタ)	→	pinang/meminang [求婚する]
□ maskena (マスケナ)	→	wajah sedang marah [怒っている顔]
□ melele (メレレ)	→	menetes [滴り落ちる]
□ minung (ミヌング)	→	minum [飲む]
□ mo (モウ)	→	mau [欲しい・したい]
□ molia (モリア)	→	mau lihat [見たい]
□ mulu (ムル)	→	mulut [口]
□ nae (ナエ)	→	naik [乗る]
□ neces (ネチエス)	→	necis [きちんとした]
□ ngana (ンガナ)	→	kamu [君]
□ ngoni (ンゴニ)	→	kamu [君たち]
□ nimbole (ニンボレ)	→	tidak boleh [～してはいけない]
□ nim mau (ニンマウ)	→	tidak mau [いやない]

<u>Bahasa Manado</u>	<u>Bahasa Indonesia</u>	<u>Bahasa Manado</u>	<u>Bahasa Indonesia</u>
□ rumpu (ルンブ)	→ rumput [草]	□ strik (ストリク)	→ seterikan [アイロン]
□ rupa (ルパ)	→ seperti [~のように]	□ suar (スアル)	→ keringat [汗]
□ sabala (サバラ)	→ seblah [~の横・側]	□ sudara (スダラ)	→ saudara [兄弟・親戚]
□ sabantar (サバンタール)	→ sebentar [間もなく]	□ tabayang (タバヤング)	→ terbayang [見える, 想像できる]
□ sadap (サダップ)	→ sedap [おいしい]	□ tabobale (タババレ)	→ terbalik [反対になる]
□ sadiki (サディキ)	→ sedikit [少ない]	□ tadiang (タディアング)	→ terdiam [黙る]
□ saki (サキ)	→ sakit [病気の]	□ tahang (タハン)	→ tahan [耐える・我慢する]
□ sambilan (サンピラン)	→ sembilang [9]	□ tajam (タジヤング)	→ tajam [鋭い]
□ sampe (サンペ)	→ sampai [~まで]	□ takage (タカガ)	→ terkejut [びっくりする]
□ sanang (サナング)	→ senang [嬉しい]	□ tako (タコ)	→ takut [恐れる]
□ sandiri (サンディリ)	→ sendiri [ひとり・自分自身]	□ talalu (タラル)	→ terlalu [あまりに~過ぎる]
□ sangaja (サンガジャ)	→ sengaja [故意に]	□ talinga (タリंगा)	→ telinga [耳]
□ sapa (サパ)	→ siapa [誰]	□ tampa (タンパ)	→ tempat [場所]
□ sebiar (スピアル)	→ terlantar [忘れられる]	□ tampa rumpu (タンパルンブ)	→ tempat sampah [ごみ捨て場]
□ selop (スコップ)	→ sandal [サンダル]	□ tampeleng (タンペレング)	→ tampar [平手打ちする]
□ ser jaha (セルジャハ)	→ rencana jahat [悪巧み]	□ tanang (タナング)	→ tanam [園芸栽培]
□ setinggal (セティンガル)	→ ditinggalkan [残された]	□ tangka/loku (タンカ/ロク)	→ tangkap [捕える]
□ so (ソウ)	→ sudah [もうすでに~した]	□ tanta (タンタ)	→ tante [目上の女性に対する呼びかけ]
□ sorga (ソルガ)	→ surga [天国]	□ tantu (タントク)	→ tentu [確かな]
□ sratus (スラトゥス)	→ seratus [100]		

Bahasa Indonesia/Sangihe/Talaud

oléh

Lisa Hinonaung

dan

Tadatsugu Tamaki

<表記について>

- ^RはLとRの両方を続けて発音する感じ。
- e と æ はそれぞれ「エ」、「ウ」と発音する。
- a'a は「アア」と発音する。

協力:

Billy G. Dalope (Sangihe) / Nelson Pinunsada (Talaud)

<u>Bahasa Indonesia</u>	<u>Bahasa Sangihe</u>	<u>Bahasa Talaud</u>
□ makan [食べる]	kumang	umana
□ minum [飲む]	menginung	mainuma
□ tidur [寝る]	metiki [メチキ]	matila
□ kamar [部屋]	kamare	kamare
□ bunga [花]	bungang	bunga
□ meja [テーブル]	medah	medah
□ kursi [椅子]	kadera	kadera
□ pintu [ドア]	tukare	ngara
□ kalender [カレンダー]	almonake	almanak
□ lampu [ランプ]	sol ^R o	sol ^R o
□ orang [人]	taumata	taumata
□ topi [帽子]	sapeo	araposa
□ pantai [海岸]	apeng	anne
□ ikan [魚]	kina	inasa
□ baju [洋服]	laku	laubad
□ rumah [家]	bal ^R e	bal ^R e
□ hujan [雨]	tahiti	urana
□ bulan [月]	bul ^R ang	bul ^R ana
□ bintang [星]	bituwing	anumpitana
□ tali [紐・ロープ]	tal ^R i	tal ^R i
□ jam [〜時・時計]	orase	orasa
□ pena [ペン]	pena	pena

Ma NIKOKO

ミナハサ民謡

"O INA NI KEKE"

O ina ni koke, mange wi sako
Mange wa ki Wenang
Tu me les Baleko (Ref.)

Weane, weane, weane toyo
Daimo stapa, kota re makiwe (Ref.)

概訳

「あの一、お母さん」

あの一、お母さん何処行くの
お菓子を買いにウエナンによ (繰り返し)

頂戴、頂戴、もう少し
もうないのよ、もうないのよ
まだ欲しいの (繰り返し)



(一言)

「ウエナン」とは、13世紀まで使われていたマナドの旧名だそうです。

5 6 7 8 9 10 11 12

Am C G7

O, i na ni ke ke Ma nge wi sa

5 6 7 8 9 10 11 12

C, A7, Dm7 C Am Dm7 G7

ko Ma nge a ki we nang Tu me les wa la

5 6 7 8 9 10 11 12

C C, C, A+ C bass g

ko O, ko We a no

5 6 7 8 9 10 11 12

F G7 C, A7, Dm7 G7 C Am

We a ne to yo Da i mo si e pa ko

5 6 7 8 9 10 11 12

Dm7 G7 C

ta re ma ki we

SPINET :
U 80-4134-000
1 2424-2400
ALL ELECTRONIC ORGANS
U THOMPSON 18, HORN 8
HORN & VIBRATIONS

INFORMATION

お知らせ

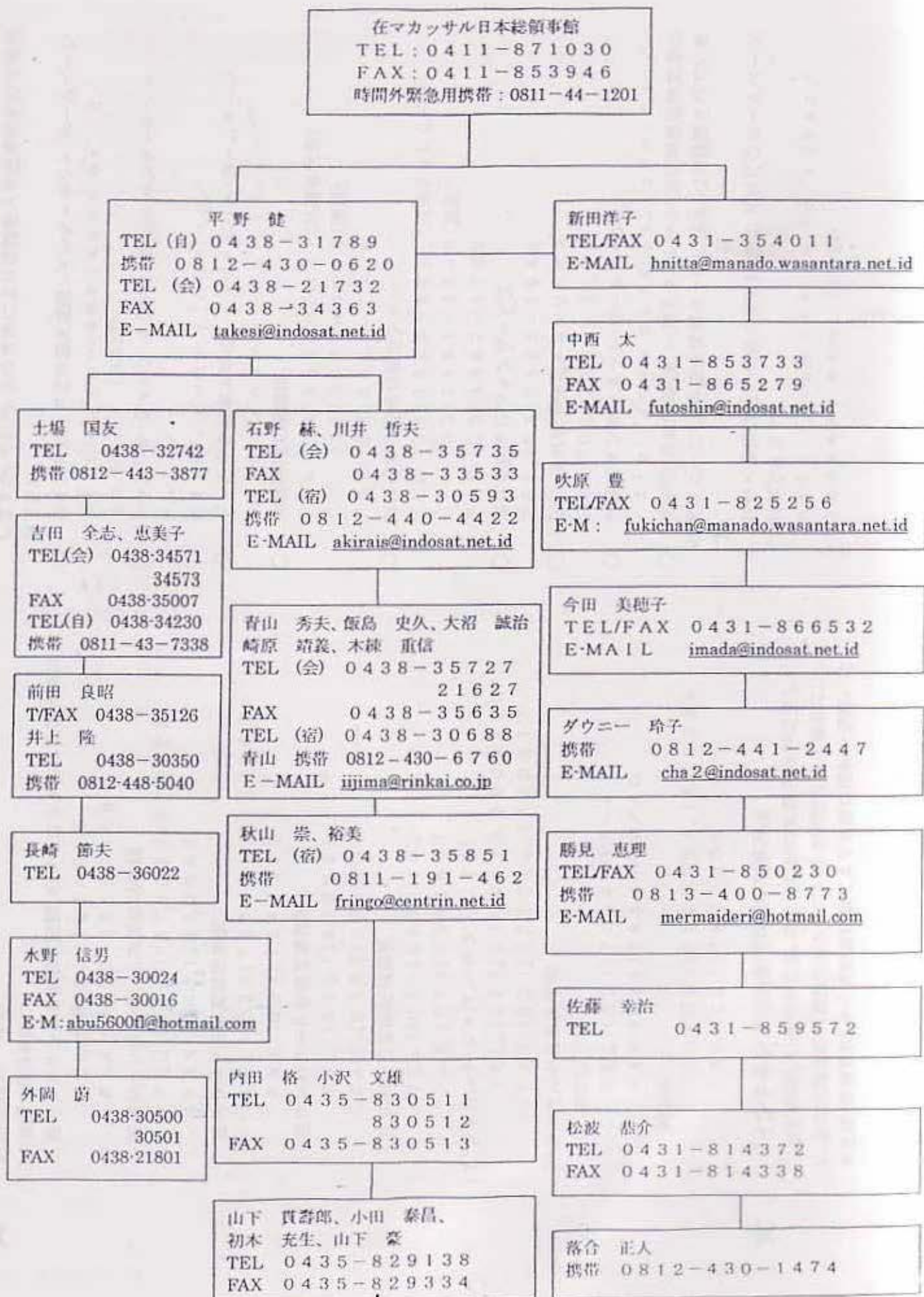
- ★ 北スラウェシ日本人会緊急連絡網
- ★ 緊急連絡先一覧表 (大使館・総領事館)
- ★ 「インドネシアの治安情報」の入手方法 (大使館・総領事館)
- ★ 在マカッサル日本総領事館からのお知らせ (5月20日付以後)
- ★ 平常時における安全対策、緊急事態への備えと対処要領
(在インドネシア大使館・総領事館刊)
- ★ 「インドネシア」(病気対策) (労働厚生省刊)
- ★ 大統領選挙法が成立 (じゃかるた新聞より)





北スラウェシ日本人会緊急連絡網

(周囲の方への連絡を宜しくお願い致します。)





緊急連絡先一覧表

(1) 大使館、総領事館

・在インドネシア日本国大使館、在ジャカルタ日本国総領事館

TEL:(021)324308

FAX:(021)3157156

・在ウジエンバンダン日本国総領事館

TEL:(0411)871030、872323

FAX:(0411)853946

・在スラバヤ日本国総領事館

TEL:(031)7314047、7347961

FAX:(031)7347962

・在デンパサール駐在官事務所

TEL:(0361)227628

FAX:(0361)231308

・在メダン日本国総領事館

TEL:(061)4531192

FAX:(061)4511447

(2) ジャカルタ・ジャバン・クラブ(JJC)

TEL:(021)3150418、3905722

FAX:(021)325902、3150817

(3) ジャカルタ日本人学校

小・中・高部

TEL:(021)7454130~4

FAX:(021)7454139/40

幼稚園

TEL:(021)7800054、7805386

FAX:(021)7801005

「インドネシアの治安情報」の入手方法

治安の著しい悪化や災害、騒乱その他の緊急事態が発生した
り、または発生の可能性が高まっていると判断される場合には、
大使館(総領事館)から前記連絡網により必要な情報を連絡いた



しますが、その他、次の方法により情報を入手出来ますので御利
用下さい。

○ 在インドネシア日本国大使館 インターネット・ホームページ
http://www.embjapan.or.id/
jp.html (日本語)

○ ジャカルタ・ジャバン・クラブ(JJC) インターネット・
ホームページ
http://www.jjc.or.id/
ジャカルタ日本人学校 インターネット・ホームページ

○ 外務省邦人保護課
TEL:(03)3580-3311(外務省代表)
(03)3581-4015(直通)
FAX:(03)3581-7209

○ 外務省海外安全相談センター
TEL:(03)3580-3311(内線2900~3)
(03)3581-3749(直通)
FAX:(03)3592-1709

○ 海外安全テレフォンサービス
TEL:(03)3592-3940

○ 国別・海外安全情報FAXサービス
FAX:(03)3584-3300

○ 外務省インターネット・ホームページ
http://www.mofa.go.jp/mofa.j/
その他、成田空港(第1・第2ターミナル)及び関西国際空港の
出発ロビーに「海外安全情報タッチビジョン」が設置されていま
す。

○ NHK国際放送の最新の周波数表は、NHKのホームページ
で入手できます。
http://www.nhk.or.jp/rjnet/
index-j.html (日本語)

送信者: 横山直樹 <cgmks02@indosat.net.id>
宛先: 渡邊 奉勝 <cgmks01@indosat.net.id>
Cc: 竹山 健一 <takeyama@indosat.net.id>; 松代 佳津美 <jpkonjen@indosat.net.id>; 横山 直樹
<cgmks02@indosat.net.id>
送信日時: 2003年5月20日 15:02
件名: 総領事館からのお知らせ(5月20日付)
邦人のみなさまへ
在マカッサル日本総領事館からのお知らせです。
メールをお持ちでないお近くの邦人の方へも適宜伝達方お願いします。

総領事館からのお知らせ

2003年5月20日

在マカッサル日本国総領事館

5月19日、外務省は、インドネシア：ナングル・アチェ・ダルサラム州における「非常軍政事態」の公布に関する渡航情報（スポット情報）とマレーシア・サバ州及びフィリピン南部におけるテロ攻撃の可能性に関する渡航情報（広域情報）を発出し、注意を呼びかけました。

I. インドネシア：ナングル・アチェ・ダルサラム州における「非常軍政事態」の公布

1. 5月19日未明、ジャカルタにおいて「ナングル・アチェ・ダラサラム州全域における非常軍政事態の宣言」を内容とする2003年大統領決定第28号が発表されました。同大統領決定は、インドネシア政府が国家の領土の一体性を損なうような事態を放置することはできず、より統合的な措置を通じて至急事態を解決することを考慮して決定したとされています。同決定の骨子はつぎのとおりです。

（1）非常軍政事態の適用を5月19日午前0時より開始。期間は6ヶ月とするが、その後、新たな大統領決定により延長できる。

（2）大統領を中央非常軍政執政官とし、本件に関する関連通常業務は政治治安担当調整大臣が行う。

また、陸軍イスカンダル・ムダ軍管区司令官を地方非常軍政事態執政官として任命し、同地方執政官は同州知事、警察本部長及び高等検察庁検事長の補佐を受ける。

2. 上記のように、ナングル・アチェ・ダルサラム州の全域は非常軍政事態下にあると宣言され、今後同州の治安回復のための統合的作戦がインドネシア政府の治安部隊によって行われるものと見られます。そのため治安部隊とアチェの独立を求める武装集団であるGAM（「独立アチェ運動」）との間で戦闘が激化し、同州及びその他の地域において治安が悪化するおそれがあります。また、累次にわたってお知らせしているとおり、ジャカルタ等においては最近爆弾事件が発生しています。これらの事件の背景については、現在警察当局が捜査中ですが、インドネシア要人や治安当局の中には、今回の非常軍政事態の導入に伴い今後GAMによるテロの可能性を示唆する発言も見られます。

3. つきましては、邦人の皆様におかれましては、今後もショッピング・センターや空港、銀行などの多数の人が集まる場所や公共施設、並びに警察や軍などの政府関係施設、さらには爆弾事件などに狙われやすい場所（いわゆるソフト・ターゲット）等に行かれる際には、事件に巻き込まれないよう周囲の状況に警戒するなど、安全対策に十分ご注意ください。

II. マレーシア・サバ州及びフィリピン南部におけるテロ攻撃の可能性

1. 米国国務省は、5月14日付けでマレーシアへの渡航に関する公告を更新し（有効期限2003年11月14

03/05/21

日)、その中で東南アジア地域におけるテロ組織の活動につき情報提供を行うとともに、特にフィリピン南部に近いマレーシアのサバ州において、米国民及び米国権益に対するテロ攻撃の可能性があるととして、要旨以下の通り警告しています。

(1) 2002年10月23日、米国政府はジュマ・イスラミア(JI)を外国テロ組織として指定した。JIはアル・カイダ及び地域の他のテロ・グループと関連のある過激派グループである。JIは東南アジア全域で活動している細胞組織を有している。2001年半ばからマレーシア当局は80人以上のJIのメンバーを逮捕している。

(2) 2002年10月のインドネシア・バリ島における爆弾テロ事件と同様の攻撃が、マレーシアを含むその他の東南アジア諸国で起こる可能性がある。当該地域に存在するJI及びその他の過激派集団は、欧米人が多く集まる場所に対し攻撃を実行する国境を越えた能力を証明してきている。テロ・グループは政府であろうが民間であろうが、標的を区別しない。

(3) 米国国務省はマレーシア・サバ州付近のフィリピン南部を拠点とするアブ・サヤフ・グループ(ASG)のメンバーによる攻撃についても懸念していることを強調する。ASGを構成する一部は、最近のフィリピンにおける軍事行動により消滅したが、ASGはフィリピン南部に近接するサバ地域の安全を脅かし続けている。

(4) マレーシアの警察と軍が東海岸とサバ州の島々に派遣され、パトロールを行っており、マレーシア政府は、2000年4月23日及び9月11日に武装集団が人質を取って、フィリピン南部に連行する事件が連続して発生したシバダン島、バンダナン島を含む多くの場所に分遣隊を派遣している。しかしこれらの地域は、遠隔地で、広大な地域であることから、治安上の支援を即時に行うことはできないであろう。

(5) マレーシア、サバ州東部の島々と海岸地域に渡航する米国民は、フィリピン南部に本拠地のあるASGの持続的な脅威を認識し、十分警戒すべきである。

2. 海外における米国権益・市民に対するテロ攻撃の可能性については、これまでも随時渡航情報を発出し注意を呼びかけています。特に、マレーシア・サバ州及びフィリピン何部に滞在・渡航される方は、上記の情報に十分留意し、最新の関連情報の入手に努めるとともに、テロ事件や不測の事態に巻き込まれる事の内容に、テロの標的となる可能性がある施設など危険な場所にはできる限り近づかない、大勢の人が集まる場所では警戒する、周囲の状況に注意を払うなど安全確保に十分に留意してください。また、テロ事件や不測の事態が発生した場合の対応策を再点検し、状況に応じて適切な安全対策が講じられるよう心がけて下さい。

■ バリ島爆弾テロ事件容疑者に対する公判の開始に伴う注意喚起

昨年10月のバリ島爆弾テロ事件の容疑者に対する公判が、5月12日よりバリ島にて開始されました。この関係で治安当局は、テロ事件防止のための警備の強化を行っています。また、去る4月24日の中央ジャカルタの国連ビル裏での爆弾事件、同27日のスカルノ・ハッタ国際空港における爆弾事件、更には5月6日にはメダン市のリッポー銀行支店での強盗殺人事件などが発生しています。これらの最近の事件の背景などは未だ不明ではありますが、今後も、爆弾事件、強盗事件、誘拐などの事件が他の場所でも発生するおそれがあります。つきましては、邦人の皆様にはこれまでもお願いしているところですが、周囲の状況に警戒するなど十分ご注意下さい。

○外務省領事移住部邦人保護課

電話：＋81－（3）3580－3311（内線5140）

○外務省邦人特別対策室（テロに関する問い合わせ）

電話：＋81－（3）3580－3311（内線3399）

○外務省海外安全相談センター（国別安全情報等）

電話：＋81－（3）3580－3311（内線2902）

○外務省 海外安全ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/pubanzen/>

○在マカッサル日本国総領事館

電話：（0411）871030、851882、853946（FAX）

（以上）

送信者: 横山直樹 <cgmk02@indosat.net.id>
 宛先: 渡邊 奉勝 <cgmk01@indosat.net.id>
 Cc: 横山 直樹 <cgmk02@indosat.net.id>; 松代 佳津美 <jpkonjen@indosat.net.id>; 竹山 健一
 <takeyama@indosat.net.id>
 送信日時: 2003年6月13日 14:44
 件名: 総領事館からのお知らせ(6月13日付)

邦人のみなさまへ

在マカッサル日本総領事館からのお知らせです。

電子メールをお使いでないお近くの邦人の方へも適宜伝達方お願いします。

総領事館からのお知らせ

2003年6月13日
 在マカッサル日本国総領事館

1. インドネシアに対する渡航情報の発出(一部地域の危険情報の引き下げ)

外務省は6月12日(昨日)、インドネシアに対する渡航情報のうち一部地域に出されていた危険情報を引き下げました。

渡航情報の詳細は次のHPをご覧ください。
<http://www.pubanzen.mofa.go.jp/info/info4.asp?id=002#header>

インドネシアに対する渡航情報(危険情報)の発出(2003/06/12)

- 首都ジャカルタ、バリ島他の全地域(下記の地域を除く)
 : 「十分注意して下さい」(引き下げ)
- ナングル・アチェ・ダルサラム州(旧アチェ特別州)
 : 「渡航の延期をおすすめします」(いつでも退避できるよう準備をおすすめします)
 (対象地域の拡大)
- マルク州
 : 「渡航の延期をおすすめします」(いつでも退避できるよう準備をおすすめします)
 (継続)
- 北マルク州
 : 「渡航の是非を検討して下さい」(引き下げ)
- バプア州(旧イリアンジャヤ州)、中部スラウェシ州、東ヌサトゥンガラ州(西ティモール地区)
 : 「渡航の是非を検討して下さい」(継続)

これにより中部スラウェシ州を除くスラウェシ島全域は「十分注意してください」に、北マルク州は「渡航の是非を検討して下さい」にそれぞれ引き下げられましたが、邦人の皆様におかれましては引き続きショッピングモール等の多数の人が集まる場所、公共施設等のテロの標的になりやすい場所又は大学キャンパス等に近づく際には警戒し、事件、デモ、騒動に巻き込まれることのないよう十分注意を払うなど自らの安全確保に留意して下さい。

2. インドネシアへの短期訪問のための査証免除措置の見直しについて

インドネシアへの短期訪問のための入国査証については、去る3月31日に発出された大統領令により従来我が国など48カ国・地域の国籍者に認められていた査証免除措置は以下の10カ国・地域からの国籍(地)者に限定され、かつ、その滞在期間は従来の60日から30日間に変更されることになる予定です。

【タイ、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、香港、マカオ、チリ、モロッコ及びベルー】

今後、この新たな措置が実施されると、日本人がインドネシアを短期訪問する場合は予め査証を取得することが課せられますが、日本人など一部の国籍(地)者については、空港到着時に査証(有料)を申請できる制度も検討されているようです。

しかしながら、本措置の実施時期は未だ確定しておらず、インドネシア外務省領事局及び法務人権省出入国管理総局によれば、現在、上記大統領令の実施のための施行法令、細則及び取扱要領等を策定中であり、さらには実施までには十分な周知期間をおくとしており、それまでは従来の査証免除措置が有効であるとしています。

つきましては、本件新措置の実施期日等の詳細が判明次第、邦人の皆様には改めてお知らせする予定ですが、今後インドネシア入国に際し、空港での入国審査等において何らかのトラブルが発生した場合には最寄りの総領事館まで御相談下さい。

○在インドネシア日本国大使館（在ジャカルタ総領事館）

電話（代表）： 021-324308

○在スラバヤ総領事館

電話（代表）： 031-5030008

○在デンパサール出張駐在官事務所

電話（代表）： 0361-227628

○在マカッサル総領事館

電話（代表）： 0411-871030

○在メダン総領事館

電話（代表）： 061-4575193

3. 米国による査証免除措置の強化（機械読取式旅券所持者に限定）について

米国への入国に際しては、従来日本人等は査証免除となっていました。昨年成立したテロ対策包括法に基づき今年10月1日以降は査証免除対象国の国民であっても非MRP旅券（注）所持者は査証免除措置を適用しない、つまり入国に際し例外なく査証取得が課せられることとなります。

【注：MRP旅券とは機械読み取り式旅券（Machine Readable Passport）であり、それ以外はすべて非MRP旅券です。最初のページ最下端に「THIS JAPANESE PASSPORT IS NOT MACHINE READABLE」の記述があるものが非MRPです。】

これにより10月1日以降は非MRP旅券を所持する日本人は米国に入国する際は査証を取得しなければなくなり、MRP旅券所持者に比べ不利となるため、外務省では今後非MRP旅券からMRP旅券への切替申請を残存有効期間の長さに関わらず受け付けることとしております。切替申請の詳細手続きについては総領事館にお問い合わせください。

なお、非MRP旅券は米国以外の国への渡航には当然有効に機能しますので念のため申し添えます。

（以上）

Akira ISHINO

送信者: 横山直樹 <cgmk02@indosat.net.id>
 宛先: 竹山 健一 <takeyama@indosat.net.id>
 Cc: 横山 直樹 <cgmk02@indosat.net.id>; 松代 佳津美 <jphorger@indosat.net.id>; 渡邊 孝典
 <cgmk01@indosat.net.id>
 送信日時: 2003年7月16日 14:42
 件名: 総領事館からのお知らせ(7月16日付)

邦人のみなさまへ

在マカッサル日本総領事館からのお知らせです。

電子メールをお使いでないお近くの邦人の方へも適宜伝達方お願いします。

総領事館からのお知らせ

2003年7月16日

在マカッサル日本国総領事館

1. 今月初旬、インドネシア国家警察がイスラム過激派ジュマ・イスラミーヤ(JI)のメンバーを相次いで逮捕したことに関連し、外務省より渡航情報(スポット情報)が発出されましたので、同内容を以下の通りご連絡します。

(1) インドネシア国家警察は、7月初旬にテロリスト・グループとされるJIのメンバー9名をジャカルタ首都特別州及びその近郊、並びに中部ジャワ州スマラン市で相次いで逮捕した旨公表しました。また、スマラン市等において、数千の弾薬、ピストル等の武器、弾薬を製造することのできるTNT火薬を含む大量の爆薬が押収されました。報道によれば、メンバーは公共の場所や教会等におけるテロを企画していたと見られ、上記の爆薬の一部は爆弾テロを起こすためにすでにジャカルタに移送されている可能性があり、現在警察当局は爆薬の一部と逃走を続けているJIのメンバーを捜索しています。

(2) つきましては、在留邦人の皆様におかれましては、昨年10月のバリ島爆弾テロ事件以降、各地の爆弾テロ事件の発生に関して注意をお願いしてきているところですが、上記(1)の動きもあり、今後もショッピング・モール、ディスコ、カフェ、宗教施設、多数の人の集まる場所、公共施設等のテロの標的になりやすい不特定多数が集まる場所に近づく際には警戒し、事件等に巻き込まれないよう十分御注意下さい。

(3) なお、7月14日午前7時過ぎ、ジャカルタの国会・国民協議会のビルの空調制御室において爆発事件が発生しました。同爆発事件の詳細、背景等は現在警察当局によって捜査中ですが、念のため同様の事件に関する情報には御留意下さい。

2. 最近の報道によれば、マナド市及びミナハサ県を中心とする北スラウェシ州において高熱と筋肉痛などの症状を呈するチクグニャ病(Cikungunya)が流行しております。北スラウェシ州保健局感染症予防課によれば、6月末までに約2,000名の罹患者が報告されており、7月から8月にかけて罹患者数は更に増える見込みの由です。この病気は蚊を媒介とする感染症であり、チクグニャ病のウイルスを持った蚊は、早朝から午前11頃までと午後3時頃から午後6時頃までが最も活動が活発な時間帯とされています。

つきましては、防虫クリームやスプレー等により蚊に刺されないようするなど感染対策を取られるようお勧めします。

なお、州保健局担当者の説明によれば、適切な治療により回復するので、過度な心配は無用とのことで、高熱と筋肉痛などの症状がある場合には、早急に医師の診察をうけるようお勧めします。

(問い合わせ先)

○外務省領事移住部邦人特別対策室(テロに関する問い合わせ)

電話:(代表)03-3580-3311(内線3399)

○外務省海外安全相談センター(国別安全情報等)

電話：（代表）03-3580-3311（内線2903）

○外務省海外安全ホームページ：<http://www.mofa.go.jp/pubanzen/>

○在インドネシア日本国大使館（在ジャカルタ総領事館）

電話：（代表）（021）324-308

○在マカッサル日本国総領事館

電話：（代表）（0411）871-030、851-882

FAX：（0411）853-946

電子メール：cgmks02@indosat.net.id

（以上）

1. 平常時における安全対策

インドネシアでは、1998年5月の暴動以降、物価高や不況による失業者が増え、旅行者を狙った空港、レストラン、ホテル等における引き等々の窃盗事件が頻発しており、最近では犯罪の大口も大胆かつ凶悪化しています。特に、ジャカルタでは、邦人に対するタクシー強盗やバンク強盗の他、押込み強盗等の犯罪も発生しています。また、最近では、不安な社会情勢等を背景に、政府機関、外交使館や一般企業のビル等に対する爆弾テロ事件も発生しました。

常に自分の身の回りに注意を払うことは海外生活の基本と言えますが、インドネシアでは特に次のような点を心に留め置くことが必要です。

1. 安全対策の基本的な心構え

(1) 自分と家族の安全は、自らが守るとの心構えを持つこと

インドネシア国内外の政治・経済・治安状況及び対日感情等について様々な媒体から情報を得るよう努力する。

(2) 常に危機意識を持って行動すること

日本人は経済的に裕福であると見られがちであり、窃盗や強盗等の一般犯罪のほか、テロ、誘拐等の標的にされる可能性があることを十分に認識する。

(3) 我々が外国人であることを自覚すること

価値観の違いを認識し、インドネシア固有の文化や風俗を十分尊重する。また、平素より、隣人、会社従業員、使用人等インドネシア人との間に良好なコミュニケーションを保つよう努力する。

2. 一般犯罪被害に遭わないための対策

○ 自宅における留意点

(1) 住宅環境を整備し、夜間は街灯を点灯して死角をなくす。ドアや窓の作りを強固なものとし、必要であればアイロングリルを設置する。施設設備は頑丈なものとし、複数の鍵を設置するなどの工夫をする。

- (2) ドアや窓の施錠は、たとえ在宅中であってもこまめに行う。
鍵は自らが確実に保管し、仮に使用人に合い鍵を預ける場合であっても、主寝室の合い鍵は渡さない。
- (3) 外出する際は、使用人による盗難を防ぐ観点からも、主寝室の施錠を励行する。貴重品は主寝室に金庫を備え付け、その中で保管する。
- (4) 家の外から目立つ場所に高価な物を置かない。また、知らない訪問者は絶対に家の中に入れない。たとえ警察官や警備員であっても、身分証明書を確認するくらいの用心深さを持つ。
- (5) 使用人の採用に当たっては、身元のはっきりした者を採用する。また、その際は身分証明書を確認し、そのコピーを保管する。特に、運転手については、運転免許証の有効期限についても注意する。
- (6) 使用人には、主人の許可なしに外部の人間を(使用人の家族でも)家の中に入れないよう十分に注意を与える。また、家人の在宅を確認するような電話には答えないよう平素から指導する。
- (7) 不心得な使用人や解雇した使用人の手引きによる犯罪も多いことから、十分に注意を払う。特に、長期間に亘り家を留守にするような場合は、知人や会社の同僚等に定期的に見回りをしてもらうよう依頼する。
- (8) 外出先から帰宅した際、ドアの施錠が開いていたり、窓が割られていたりなど不審な点が認められたら、安易に家の中に入ることなく、警察や近隣の人に助けを求める。
- (9) 在宅時に盗賊の侵入に気付いても、身の安全を第一として対処する。盗賊のいる場所に姿を見せることなく、鍵のかかった部屋で盗賊の退散を待つか、電話で警察等に通報する。それでも押し入って来た際には、むやみに抵抗しない。
- 行動における留意点
- (1) 繁華街、市場、デパート、空港等、大勢の人が集まる場所や横断路橋では、周囲に不審人物がいないかどうか気を配る。特に、見知らぬ人に話しかけられ、その応対をしている際に鞆等を盗まれるケースも多いので注意する。また、ズボンの後ろポケットに財布等の貴重品を入れない。鞆は抱きかかえるように持つ。
- (2) 外出する際は、派手な服装は避け、大金は持ち歩かない。また、支払いの際に現金を人前で晒さないよう、財布の取扱に注意を払う。
- (3) 車に乗ったら直ちにドアロックを施し、窓ガラスは閉める。貴重品を残したまま車を離れないようにする。大きな荷物で持ち歩くことができない場合は、予めトランクの中に入れるなど、外部から見えない場所に保管する。
- (4) 信号待ち等のため一時停車した際、サイドミラーを破壊し持ち去る手口の盗難や、手斧を示して威嚇し金品を要求する強盗事件が多発しているため、不審者が近づいてきたら、進路を変更しでも車を発進させて避難する。抵抗したり争ったりすることは厳に慎む。
- (5) 車で走行中、タイヤがパンクしたり、投石を受けたりした場合でも、その場に停車することなく、ホテルやレストランの駐車場等の安全な場所まで移動して修理や車体の確認を行う。その際にも、ドアロックは確実に施す(後ろから追いかけて、修理中に車内の鞆等を盗んだり、凶器を示して金品を要求する手口の犯罪が多発)。
- (6) タクシーを利用する際には、ホテルで客待ちをしているものや、電話で呼び出したものを利用する。深夜の繁華街で、流しのタクシーを拾うことは非常に危険なので厳に慎む。
- 会社事務所における留意点
- (1) 席を離れる際は、たとえ短時間であっても、貴重品は机やロッカー等の施設設備のある場所に保管し、確実に施錠をする。卓上のパソコンは、ワイヤーロープで繋ぐなどの工夫をする。
- (2) 事務所の出入り口のみならず、各執務室にも施設設備を設ける。帰宅の際、または、昼食時等に外出して執務室が無人となる場合には、こまめに施錠する。
- (3) 現地従業員との接し方に注意する。思わぬところで恨まれて、

執拗な嫌がらせを受けることもある。人前で厳しく叱るなど相手の尊厳を傷つけるような行動や感情的な言動は慎む。また、労働争議から派生する放火や監禁事件も懸念されるので注意する。

3. 暴動、テロ事件に巻き込まれないための対策

(1) 現在でも、デモ隊と治安部隊との衝突等に端を発した小規模な暴動が散発している。車で移動する際には、運転手にラジオ・オニユースを聞かせるなどして情報を収集し、危険な地域、道路の通行を避けるよう心がける。また、暴動ではないが、高校生同士の喧嘩から突如として路上で投石合戦が始まることもあるので注意する。

(2) 多数の群衆が参加する集会やデモ等の会場付近では、暴動が発生する恐れもあるので、事前の情報収集に努め、そうした場所には近付かないよう注意する。

(3) 最近では、不安定な社会情勢を背景とした爆弾テロ事件が散発している。政治的な記念日や節目等に当たる日には、関連する場所やショッピングモール等多数の人が集まる場所への外出は控える。

(4) 仮に暴動、喧嘩の現場に遭遇した場合には、速やかにその場から回避する。また、爆発音が聞こえたり、煙が立ち上ったりした場合には、二次的な爆発や群衆のパニックに巻き込まれる恐れもあるので、現場見物等の行動は厳に慎む。

4. 誘拐被害に遭わないための対策

(1) 我が国のプレゼンスが高まるにつれ、世界各地で政治・経済的目的のために邦人誘拐事件が現に発生しており、インドネシアを含め、海外における邦人誘拐の可能性は増している。

(2) 誘拐対策の基本は、「個人の意識と努力」であり、「目立たない」「用心を怠らない」「行動を予知されない」の三原則を守ることが重要である。

(3) 過去の事例によれば、誘拐事件の発生前には、不審電話が続いたり、尾行されたり、また、自宅やオフィス付近に不審者・車がいるなど、何らかの異常があることが分かっている。常に周囲に注

意を払い、その前兆を掴むよう努める。

5. 交通事故対策

(1) インドネシア(ジャカルタ)の道路交通事情は非常に厳しいので、車の運転は運転手に任せ、極力自分ではしないよう心がける。運転手には、平素から、安全運転に心掛けるよう十分に指導する。また、日中は交通渋滞が生じやすく、出勤時、屋敷時、退社時には特に激しくなることから、運転手に無理な運転をさせないためにも、時間にゆとりを持って行動する。

(2) 自分の車が交通事故を起こした場合、追突等の二次的事故が起こらないよう安全を確保し、その上で現場の保全を図る。事故の当事者はあくまで運転手であるので、示談交渉等については運転手に交渉させ、自分は安易に車外に出ない。身の危険を感じた場合は、早急にその場から退避する。

(3) 事故現場には即時に野次馬が集まることがあるので、可能な限りホテルの駐車場等の安全な場所に移動して示談等の交渉を行う。その際、特に事故現場では、相手を刺激するような言動はしない。同乗者、付近のビルの警備員等に警察、病院等への通報を依頼する。

(4) 軽微な物損交通事故であれば、基本的にはその場での示談となる(警察への通報義務はない。)が、解決がつかない場合や、後刻の示談に相手が応じそうもない場合等は、両当事者(当方は運転手のみ)揃っての警察への出頭を促すなど、臨機応変の措置をとることも必要である。

(5) 人身交通事故の加害者となった場合は、周囲の状況(野次馬の参集状況等)や相手の負傷の程度等を勘案した上で、必要であれば、自分の車、タクシー等で負傷者を病院に搬送するなど、臨機応変の措置をとる。

(6) 事故現場では、後日のトラブルを避けるため、相手の運転免許証や身分証明書記載事項、相手車両のプレート番号等を運転手に控えさせておくこと。自身の身分等について答える必要がある場合は、(御主人の)氏名、会社名及び会社の電話番号にとどめ、自宅

の住所や電話番号は絶対に教示しない。

- (7) 警察において事情聴取を受ける場合には、通訳可能な同僚等の同伴を求める。捜査報告書等への署名を求められた際には、内容を十分に確認した上で応じる。

6. 災害に対する備え

- (1) 消火器を準備し、操作を熟知しておく。火災が発生したら慌てずに初期消火に努め、必要に応じて消防署に連絡する。
- (2) 高層住宅に居住する場合には、平素から、火災や地震発生時の避難経路を確認しておく。

7. 旅行者に対する注意事項

- (1) 旅行者が遭う犯罪被害の大半は、スリや置き引き、車上狙い等の窃盗によるもので、特に、空港やホテルのロビー、レストラン、デパート等で多発している。手荷物からは絶対に目を離さない、人混みの中では鞆は抱きかかえるようにして持つ、駐車車両の中に貴重品を放置しないなど、荷物の管理を厳重にする。また、空港等のロビーで見知らぬ人から話しかけられた場合は、注意が逸れた際に手荷物を持ち去られるケースもあるので、特に注意する。
- (2) 紛失したり盗難被害に遭った旅券は、変造プロカーを通じて売買された後、先進各国への密入国等に不正使用され、後日、真正な名義人に思わぬ金銭的被害等が及ぶこともある。また、その後の旅行日程を大幅に変更しなければならなくなる事例は多数ある。旅券は肌身離さず所持するとともに、常に所在を意識するなど、管理には細心の注意を払う。

- (3) クレジットカードの不正使用被害が増加している。これは支払い時にカードの磁気情報を記録され、これを不正に使用されて身に覚えのないものまで請求されるというものである。クレジットカードで買い物をする場合、信頼のおける店で使用すること、また、店員のカード操作をよく確認する。また、書損じ等が生じた場合は、必ず間違った控え書の返還を求める。万が一、身に覚えのない請求があった場合には、クレジットカード会社に通報する。

II. 緊急事態への備えと対処要領

1998年5月、ジャカルタを中心に各地で暴動が発生し、約9000人の在留邦人が臨時便やチャーター便で国外に退避したことは、今なお私たちの記憶に生々しく残っています。私どもは、これら多くの貴重な体験を教訓とし、今後の危機管理に役立てていかなければなりません。

インドネシアでは、依然として民族・宗教間の対立等に端を発する事件が各地で散発しており、今後の政治・経済情勢如何によっては、様々な動きが活発化する可能性も多々あるものと思われまします。こうした情勢の中、種々の緊急事態に常日頃から備えておくことは、インドネシアで暮らす上での必要不可欠な要素と言えるでしょう。ここでは、そうした準備や緊急事態への対処の上で参考となるよう、一応の基準と心構えを記しました。

1. 外務省「海外危険情報」について

外務省は、旅行先の国や滞在先の地域の治安状況等を5段階の危険度に区分し、「注意喚起」「観光旅行延期勧告」「渡航延期勧告」「家族等退避勧告」「退避勧告」の5種類の海外危険情報を出しています。各々の趣旨は以下の通りです。

- 危険度1「注意喚起」
渡航及び滞在に当たっては通常以上の特別な注意が必要とされ、必要な安全対策について注意を喚起するもの。
- 危険度2「観光旅行延期勧告」
観光等を目的とする不急の渡航の延期を勧めるとともに、状況に応じた注意を払うことを勧めるもの。状況により旅行者の出国を勧める場合もある。
- 危険度3「渡航延期勧告」
全面的な渡航の延期を勧めるとともに、状況に応じた注意を払うよう勧めるもの。状況により事情が許す者の出国を勧める場合もある。

○ 危険度4「家族等退避勧告」

退避、引揚げに必要な準備を行うよう勧めるとともに、家族等の事情が許す者に対しては、安全な国(地域)への退避または本邦への引揚げを勧めるもの。

○ 危険度5「退避勧告」

当該地に滞在している全ての邦人に対して安全な国(地域)への退避または本邦への引揚げを勧めるもの。

2. 平素の心構え

(1) 情報入手方法の確立

緊急事態発生時は、いかに正確な情報入手するかが重要な鍵となる。平素から、各種情報のコンタクト先を確認したり、日本人会へ加入して素早く情報入手出来るようにするなど、情報入手方法を確立しておく。

※ 緊急事態発生時の最後の安否確認の方法は、滞在する皆様から提出していただいた「在留届」が基礎となります。

「在留届」は、いわば外国で滞在する際の住民登録であり、3ヶ月以上滞在する予定のある方は、必ず総領事館に提出して下さい。また、転居、転職、出生等による家族の異動事項が生じた場合には「記載事項変更届」を、帰国の際には「帰国届」を提出するようにして下さい。

(2) 旅券等の管理

旅券、出国・再入国許可証、警察登録証明書(SKLD)、滞在許可証(KITAS)等は、いつ何時でも持ち出せるようにしておく。また、旅券の有効期限が常に6ヶ月以上であることを確認しておく。

※ 滞在許可、出国・再入国許可取得手続き等のため、移民局に旅券を預けている間に緊急事態が発生し、本邦へ引き揚げる必要が生じた場合は、総領事館で「帰国のための渡航書」を発給しますが、相当の遅延も予想されるので、移民局での手続きは、平常時に早め早めに対応するようお願いいたします。

※ 長期滞在者は、出国に際し、「滞在許可証」を所轄の移民当局へ提出し、「出国許可証(Exit Permit)」を取得しなければなりません。また、後日、再入国するためには、「再入国許可証(Re-entry Permit)」も必要です(短期滞在者については、「滞在許可証」の取得手続きは不要であり、従って、出国の際の「出国許可証」の取得も必要ありません。なお、緊急事態発生時に「出国許可証」の取得が困難な場合には、総領事館に相談して下さい。

3) 備蓄品、緊急持出し品等の準備

- ・ 食料、飲料水

状況によっては、買い物のための外出が困難になり、あるいは、しばらくの間自宅で待機する方が安全なことも予想されるので、10日間位生活出来る程度の食料、飲料水の備蓄を心掛ける。

- ・ 金銭

事態の緊迫により、銀行の閉鎖が予想されるので、国外退避のための金銭(外貨及び出国税100万ルピア、空港使用料5万ルピア)を準備することを心掛ける。

- ・ 短波ラジオ等の持出し品

事態が悪化してくると、NHKの短波放送により治安状況が放送されるので、予め短波ラジオ(予備電池を含め)を準備し、日本語放送の周波数や放送時間帯を確認しておく。救急薬品や懐中電灯等、緊急時に持ち出すものについては、平素から整備し、保管場所を確認しておく。

※ インドネシア国内での短波ラジオの購入は困難です。

- ・ 給油

自動車は常に整備し、燃料は早め早めに給油しておく。

(4) その他留意すべき事項

- ・ オープンチケットの準備

5月暴動の際には、航空会社の発券カウンターにチケットを購入のための長蛇の列ができて大変混雑したことから、状況の緊迫が予想される場合には、事前にオープンチケットを購入し、早

めに予約を入れるなど、先を読んだ策を講じる。

・家族間の連絡体制

家族のその日の行動を家族全員が把握しておくとともに、家族にも携帯電話を用意するなど、いつでも連絡がとれるよう策を講じる。

・保険への加入

海外傷害保険、火災保険、盗難保険、自動車保険等に参加しておく。

3. 緊急事態が発生し、または発生するおそれがある場合の対応

(1) 正確な情報入手し、状況を正しく把握するとともに、流言に惑わされたり、群集心理に巻き込まれたりすることなく、冷静に行動する。また、邦人相互間で緊密な連絡をとり、情報の共有に努める。

※緊急事態が発生し、または、発生するおそれがある場合には、大使館及び総領事館は、ジャカルタ・ジャバン・クラブ(JCJ:ジャカルタ日本人会)と緊密な連携を保ちつつ、緊急連絡網及び大使館インターネット・ホームページ等により、随時情報の提供並びに必要な措置について連絡します。

(2) 生命、身体、財産等に危害が及ぶか、または、及ぶおそれがある場合には、ホテル、あるいは、各企業の決めた集合場所へ避難し、所轄警察署に援助を求めめるなどの措置をとる。ただし、情勢によっては、自宅で待機する方が安全なこともあり得るので、軽率な行動は慎む。屋外で銃声が聞こえたら、窓の近くに寄らない。

※退避状況を速次大使館(総領事館)に通報して下さい。

(3) NHK海外放送(ラジオジャバン)からの情報入手についても留意する。

※大使館もFM放送による情報提供を行うこととしておりますが、開始時期等については、緊急連絡網等により連絡します。

4. 退避または出国等

(1) 日本政府から退避勧告があった場合は、これに従ってなるべく早く退避、引揚げを行う。外務省は、原則として一般商業機が運航されている間に退避勧告を発出するので、一般商業機で退避するよう努める。

※一般商業機が満席で座席確保が出来ない場合等には、チャーター便等によることとなります。また、退避手段としては、政府専用機を含む自衛隊機の派遣が考慮されることもあります。

(2) 事態が逼迫して、大使館から退避又は引揚げのための集結の連絡があった場合には、示された集結場所の内、最寄りの場所に集結する。

(3) 退避又は引揚げのための移動に際し、国旗(日の丸)を使用する場合は、その使用が逆効果になることもあるので注意する。

※大使館(総領事館)との連絡を密にして下さい。

(4) 退避する際には、貴重品は身に付ける。服装は肌の露出が少なく動きやすいものを、履き物は動きやすく丈夫なものを履くようにする。また、両手が使えるようにしておくため、貴重品、常備品等はナックザック等で携行し、荷物は最小限度にとどめる。

※現場の状況を随時大使館(総領事館)へ通報して下さい。他の在留邦人の方々の貴重な情報となります。

※各人又は派遣元の会社の判断により国外に退避する(日本へ引き揚げず)場合には、その旨を必ず大使館(総領事館)に届けて下さい。大使館(総領事館)への連絡が困難な場合は、日本の外務省邦人保護課へ連絡して下さい。



インドネシア

1 感染症の流行状況

インドネシアでは、次のような病気があります。

- | | | |
|---------------|-----------|--------|
| 食中毒・水から感染する病気 | 虫が媒介する病気 | その他の疾患 |
| ○細菌性赤痢、アメーバ赤痢 | ○マラリア | ○B型肝炎 |
| ○A型・E型肝炎 | ○デング熱 | ○狂犬病 |
| ○コレラ | ○日本脳炎 | ○エイズ |
| ○鼠中毒 | ○フィリア症 | ○破傷風 |
| ○寄生虫疾患 | ○リーシュマニア症 | |
| ○結核、肺チフス | | |

インドネシアは、海洋性気候に属し、雨季（10～3月）乾季（4～9月）に区別されます。そのため、消化器系疾患については、雨季にやや多く発生する傾向があるものの、それほど大きな季節的な変動はなく、乾季でも発生することがあります。

○2001年、全国の空港検疫所でインドネシアから帰国した旅行者5名からコレラ菌、47名から赤痢菌、506名から鼠中毒菌、1名からデング熱が検出されています。また、感染症発生動向調査によると国内でインドネシアから帰国した旅行者からコレラ菌患者11名、赤痢患者61名、腸チフス患者9名、バチルス菌患者5名、熱帯熱マラリア患者3名、三日熱マラリア患者5名、鉤形マラリア患者1名、型不明のマラリア患者1名、デング熱患者9名が報告されています（国立感染症研究所：感染症週報より）。

2 インドネシアでの病気の予防方法

様々な感染症や風土病がありますが、都市の観光だけであれば、食事や飲み物に注意し体調を整えておくだけでも、かなり病気の予防ができます。

そこで病気を予防する上で注意したいことを紹介します。

(1) 注意したい感染病

- 生 野 虫 一部の旅行ではネズミや一匹しきトランでも通れる方が無難です。屋台などで寝ているようなものは避けてください。赤痢、鼠中毒、肝臓、寄生虫などの心配があります。
- 食 料 品 カンパキとされる果物はネズミやシロアリでも通れる方が無難です。自分で買った果物はよく洗ってください。また、肉類や野菜はよく煮る、焼く、炒める、揚げる、茹でるなどの調理が必要です。
- 生 物 品 一部の旅行では、動物の生肉や生卵、生魚などを食べるのは、衛生上の観点から避けてください。また、一部の旅行では、動物の生肉や生卵、生魚などを食べるのは、衛生上の観点から避けてください。

○口ブスター

インドネシア名物で、これを目的にインドネシアに旅行される方もいるくらい安くて美味しいと評判があります。以前、生卵の口ブスターが原因と思われるコレラの集団発生がありました。口ブスターやエビの生卵にはご注意ください。生卵もダメです！

○生 水・氷

最近では水道設備が整備されていますが、水質は健康で日本人では下痢をおこすことがよくあります。また、腐敗菌や肝炎ウイルスに汚染されることもないとはいえないので、生水は避けたほうが無難でしょう。水を飲む場合は、ミネラルウォーターやボトルドウォーターを注文しましょう。また、氷は生氷から作られることが多いのでなるべく取らないこと。

(2) 注意したいこと

○野 犬 や 猫 狂犬病が少数ですが発生しておりますので、むやみに犬に手を出すのは危険です。また、野犬などの動物に近づいたら、すぐに退避できる病院で、狂犬病予防注射のためのワクチンを接種しましょう。

○夜 遊 び

インドネシアでもエイズは報告されています。患者数は多くありませんが、感染者はかなりの数であるといわれていますので、安全な「遊び」は禁物です。「自分だけは大丈夫」と考えがちですが、一度で感染する事もあることをお忘れなく。

3 予防接種

旅行経路（出発国）によっては、入国時に黄熱の予防接種が要求されます。また、一般にA型肝炎、破傷風、日本脳炎、狂犬病などの予防接種が勧められます。予防接種は、これまでの予防接種歴、滞在期間、旅行形態、出発までの期間でかわりますので、詳しいことはお近くの検疫所に問い合わせてください。

4 マラリア情報

(WHO INTERNATIONAL TRAVEL AND HEALTH 2002)

ジャカルタなどの大都市、ジャワ、バリ、パプアの主要リゾート地を除いて全土に年間を通して存在しています。予防薬としては、クロロキンとプログアニール（Proguanil）併用が、インドネシアではメフロキン（Mefloquine）が有効ですが、服用については副作用などに注意が必要です。

クロロキン/商品名：アラレン（Aralen）、アプロクロール（Aviclor）、ニバキン（nivaquine）、レソシン（Resochin）など、プログアニール/商品名：バルドリン（Paludrine）、メフロキン/商品名：ラリアン（Lariam）、メファキン（Mefaquin）など。



マラリアの危険な地域



帰国時に体に以上があればお気軽に検疫所へ相談してください。

インドネシア

1 病気になる時

(1) 夏風邪

インドネシアで流行している病気は、コレラや細菌性赤痢、アメーバ赤痢、食中毒のような消化器系感染症の他、局地的に熱帯・亜熱帯地域特有の感染症であるマラリアやデング熱などがあります。日本にない病気もあり、抗生剤の乱用などの素人療法で逆に治療が遅れ、取り返しがつかなくなる危険があります。一時的に日本より持参した市販薬を使用するのは差し支えありませんが、体調に異常がある方は速やかに現地の病院を受診してください。

(2) インドネシア国内の医療機関

インドネシアでは医療機関が整備されており、特に都市の病院では、技術的なレベルを心配する必要はなく安心して診察を受けられます。ただし、日本と違い公立病院より私立病院の方が設備や技術が確かなので、在インドネシア邦人は私立病院へ行くケースが多いようです。また、インドネシアの医師は夕方まで総合病院に勤務し、その後は個人開業する場合が多いことを覚えておいてください（予約が必要）。

なお、一流のホテルでは、専任の医師あるいは医師の紹介をしているので利用すると良いでしょう。

医療費については、日本と違い健康保険がききませんが、西郷理博であれば数百円から数千円で済みます。しかし、重症になると数万円以上請求されることもありますので、できれば海外旅行傷害保険に加入することです。

参 考：外務省 在外公館連絡情報

ジャカルタ

ジャカルタ日本人総領事館：
(クリニック・メデイカ・カウチ)

住所：Graha Rama Bldg., J.L.R. Rasuna Said, Block X-1, Kav. 1-2, Jakarta 12940, Indonesia
TEL：021-5261118（代表）、5265127（日本語専用）
日本人医師

（1）クリニック
(SOS メデイカ)

住所：Jl. Purifikasi 10 Ciptate, Jakarta
TEL：021-7504001 日本医局

（2）メデイカ・カウチ
(SOS メデイカ)

住所：Jl. Gatot Subroto Kav 59, Jakarta
TEL：021-5210700 最新医療設備が充実

（3）メデイカ・カウチ
(SOS メデイカ)

住所：Jl. G. S. 43, Jakarta
TEL：021-5210700 最新医療設備が充実

スラバヤ

スラバヤインターナショナル病院：

住所：Jl. Nginden Intan Barat Block B, Surabaya
TEL：031-5993211
医療設備が充実

デンパサール

SOS メデイカ・クリニック・バリ：
(SOS International Clinic)

住所：J.L. By Pass Ngurah Rai 24X Kuta 80361, Bali
TEL：0361-764515,
0361-755768（アラームセンター24時間対応）
日本医局

インドネシアでは頻りに電話番号を覚える場合があります。ここに記載してある電話番号も変わることが考えられますので電話帳で確認してください。

在インドネシア日本大使館：
(ジャカルタ日本総領事館)

Embassy of Japan,
Menara Thamrin Bldg, Jl. M. H. Thamrin,
Kav. 3 Jakarta Pusat, Jakarta, Indonesia.
TEL (62-21) 324308
<http://www.embjapan.or.id/> (英・日・印)

在デンパサール日本駐在官事務所：

Branch Office in Denpasar,
Consulate-General of Japan at Surabaya,
Jalan Raya Puputan, No. 170 Renon,
Denpasar, Bali, Indonesia.
TEL (62-361) 227628

ジャカルタ日本人会：

Kyline Bldg. 3F, Jl. M. H. Thamrin 9, Jakarta
(TEL 321708 内線 2331)

JICA インドネシア事務所：

Jl. M. H. Thamrin 59, Jakarta
(TEL 3907533)

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター：

Sumitomo Tower 2F, Jl. Jend. Sudirman Kav. 6162, Jakarta

2 帰ってからの過ごし方

帰国して最初に受けるのは検疫です。滞在先で下痢、嘔吐、発熱など体に異常があれば健康相談室で相談してください。最近では赤痢やコレラでも軽い症状で済んでしまうことが多いのですが、感染力は思ったより強いので、自分で大丈夫と思っていても家族や会社の人に感染することもありますので・・・

また、潜伏期間といって感染してから一定の期間たないと発病しない病気が数多くあります。検疫時は何となくたに数日してから症状が出ることもあります。その時（症状が出た時）には、速やかに医師の診察を受けましょう。診察を受ける際には滞在した国と期間、蚊やノミ、ダニに刺されていたりそのことや、食べ物のことについても説明されると診断の役に立ちます。

帰国時に体に異常があればお気軽に検疫所へ相談してください。

大統領選挙法が成立

小政党も擁立可能に

被告人の出馬も容認

国会は七日、本会議を開き、来年七月ごろ、インドネシアで初めて国民投票で実施する大統領選挙の実施細則を定めた大統領選挙法を全会一致で可決した。大統領候補の擁立条件や立候補資格をめぐり、法案審議が紛糾していたが、条件を緩和することで各党の妥協が成立。議席獲得率3%以上の政党や政党連合に大統領候補の擁立を認め、法廷で係争中の被告人であっても大統領に出馬できるという世界的にも例のないおおらかな内容に落ち着いた。

国会特別委のテラス・ナラン委員長によると、同日国会で成立した大統領選挙法は、十五章、百三条から成る。

政府案で、国会議席獲得率が20%以上だった正副大統領候補の擁立条件は大幅に引き下げられ、2004年の大統領選に限り、国会議員選挙で3%以上の議席か、5%以上の得票を得た政党および政党連合に正副大統領の擁立が認められた。

闘争民主党など単独での擁立が可能な大

政党だけでなく、国会議席を持たない小政党も他党と連合を組めば、大統領選挙への参加が可能となった。

二〇〇九年の大統領選からは、議席率一五%以上、もしくは得票率二〇%以上と条件が厳しくなる。

立候補者の前歴規定は、当初、「禁錮五年以上の求刑を受けた刑事被告人、または、有罪が確定した人物」は、立候補が禁止されていたが、ゴルカル党の強い反対で「被告人」の部分は削除され、「有罪確定者」のみが禁止されることになった。また、学歴規定についても、立候補者の学歴は、高卒以上と定められた。

これらの妥協は、公金横領事件で研究のアクバル・タンジュン国会議長（ゴルカル党党首）やインドネシア大とバジラン大中退のメガワティ大統領（闘争民主党党首）の立候補を可能にするために行われたもので、政治評論家サニット氏は「党首の立候補が可能な恐れがあった二大政党（闘争民主党とゴルカル党）が妥協し合った」と述べている。

主な正副大統領候補の条件

・インドネシア国民	
・35歳以上	
・唯一種を信仰している	
・独立宣言（1945年）に署名していること	
・選挙区または選挙区外に居住していること	
・インドネシア国籍を有していること	
・結婚した経験があること	
・結婚した年以降に離婚したことがないこと	
・結婚した年以降に再婚したことがないこと	
・結婚した年以降に再婚したことがないこと	

編集後記

- 「タルシウス」復刊の話は、本誌にも記しました通り昨年の春から出ておりました。しかし、このグータラ。走り出すまでに時間がかかり失礼しました。中には入会の挨拶文を寄せて下さったのですが、この発刊まえに任期満了帰国となった方がおられ、退会の挨拶も併せて書いていただくことにもなってしまいました。申し訳なく思っております。陳謝。
- 会長の「ご挨拶」の中にもありましたが、2001年2月に北スラウェシ州がゴロンタロ州と北スラウェシ州に分かれたことから、「北スラウェシ・ゴロンタロ州日本人会」と記すべきではとの意見が出ました。しかし、会の名前には「州」の字はなく政治区画と言うよりも地域的観点から、会長の意向にも配慮し、元の名前で記述させてもらいました。悪しからずご了承下さい。
- 今回は、皆様のこの国での体験談と随想といった内容のものが多く、編集を終わってみますと、これまでの「タルシウス」とは少々趣きが違ったものになってしまったようです。
- 新田洋子先生のお計らいで、北スラウェシ州の学生弁論大会に参加した、一位から三位までの入賞者の原稿を掲載させて頂くことができました。現地の若者の声に触れることが出来、幸いでした。新田先生は8月中旬にはお帰りとか。今後、益々のご発展をお祈り致す次第です。それにしても、この三名の内二名は、マカッサルでのスラウェシ地区大会でも入賞との事、掛け替えの無い素晴らしい土産を置いて行かれる訳ですね。
- さて、来年、この国は選挙と言う「熱い」年になります。それも、新しい選挙法に基づくものです。混乱が予想されますし、全国を異常な昂ぶりが支配し、異様な雰囲気となります。現在、巷のあちこちに、いろいろな党のいろいろな旗がたなびいており、既に前哨戦は始まっております。まずは、これに巻き込まれてあらぬ目で見られたり、過激な動きに巻き込まれないよう、注意していこうではありませんか。
- 末筆ながら寄稿下さった方々に謝意を表させていただきます。この「後記」を脱稿してホットしています。では、.....

2003年8月吉日

石野 赫

